

平成１８年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学ＦＤ委員会

は じ め に

玉川大学は平成 18 年度に大学認証評価機関である大学基準協会の認証評価を受け、19 年 4 月 1 日付けで大学基準に適合との認定を受けました。この認証評価制度は我が国の高等教育史上初めてのものですが、その目的は教育・研究水準の向上を図り、その質を保証することにあります。この点検・評価は今後も継続的に行われるものですから、今回の評価結果を十分に検討して、今後の改善に役立てることが重要になります。F D 活動は、大学教育の質を保証する鍵を握っており、その重要性が今回の認証評価によって改めて確認されたといえます。

平成 14 年度に開始した大学全体としての F D 活動は、今回の認証評価の結果を踏まえ、新しいステージに入ることになります。そこでは教員一人一人の自己研鑽を基本に据えながらも、教育組織として自己能力の開発と向上の機会をどのように提供し、学術共同体の教育・研究に携わる同僚として互いに向上しようとする環境をいかにして醸成するかが問われることになります。カリキュラムの運営を含む教育環境を整えることが問われます。

前記の認証評価において高く評価された「全人教育」の理念のさらなる実現が F D 活動に大きく依拠していることを確認し、かつ自己点検、自己評価こそ F D の原点であることを大切にしたいものです。学生の学習を発展させることへの熱き思いを強め、専門学問分野の知識や技術への理解を深め、そして両者を結びつける創造的工夫の花を咲かせること目指したいと思います。

大学 F D 委員会委員長
教学部長 高 橋 靖 直

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画及び課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	3
(6) 今後に向けて	3
2. 認証評価機関による認証評価結果と助言	4
3. 学部の活動	11

II 教員研修

1. プレゼンテーション研修会	
(1) 実施の概要	27
(2) 研修プログラム内容	27
(3) 実施の状況	28
(4) 実施後のアンケートから	28
(5) ディスカッションの実施	31
(6) 実施の成果	36
(7) 平成 18 年度プレゼンテーション研修会参加者一覧	37
2. 未来創造セミナー	
(1) 実施の概要	38
(2) 研修プログラム内容	38
(3) 実施の状況	38
(4) 実施後のアンケートから	39
(5) 実施の成果	39
(6) 平成 18 年度未来創造セミナー参加者一覧	39
3. 新任教員研修会	
(1) 研修プログラム内容	40
(2) 実施の成果	41
4. Blackboard@Tamagawa の活用	
(1) 活用事例報告	43

III コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要	49
2. 集計結果及び公表	49

参考資料

1. 大学 FD 講演会（玉川学園講堂での全文採録・掲載）	65
2. 大学 FD 委員会の議事要旨	83
3. プレゼンテーション研修会アンケート用紙	93
4. 「コア科目授業評価アンケート」用紙	94
5. 玉川大学 FD 委員会規程.....	95

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、大学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を以下のとおり明確化している。

- ① 玉川の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員の育成。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所 属	氏 名
委員長	教 学 部 長	高 橋 靖 直
委 員	文 学 部	小 嶋 正 敏
委 員	農 学 部	河 野 均
委 員	工 学 部	山 田 博 三
委 員	経 営 学 部	玉 木 勝
委 員	教 育 学 部	金 井 茂 夫
委 員	芸 術 学 部	梶 原 新 三
委 員	コア・FYE教育センター	菊 池 重 雄
アドバイザー	学術研究所	切 田 節 子
事務担当	教 学 部	茂 村 恭 司
事務担当	教 育 企 画 部	大 野 太 郎
事務担当	研修センター	柳 原 達 宏

(3) 今年度の活動計画及び課題（平成 17 年度報告書「今後に向けて」より再掲）

- ・大学 FD 講演会を複数回の開催を図る。
- ・新任教員研修会を継続実施する。
- ・プレゼンテーション研修会を複数回の開催を図る。
- ・教員相互の授業参観及び研究会の開催を推進する。

(4) 活動状況

主な活動内容としては以下のとおりである。今年度は一年次教育の全学実施二年目となり昨年度に引き続き「一年次セミナー」担当者の研修会等を数多く開催した。さらに、一年次教育国際会議等への教員派遣、研修会の開催、平成 19 年度に向けて新教材の作成等を行った。また、学内教職員の意識を高めるための学外講師による FD 講演会を開催した。

コア科目の「学生による授業評価」は当初の計画どおり今年度で 4 年目となるが、春・秋学期とも全学的に実施した。平成 14 年度から継続して行っているプレゼンテーション研修会は本年度も 3 回開催し、合計 16 名（初年度からの延べ受講者数は 180 名、平成 18 年 5 月 1 日時点の在職者で受講した累積数は 169 名、全専任教員の 65.3%）の教員が参加した。

なお、大学 FD 委員会は 4 回の開催であったが、詳細として巻末に参考資料（議事要旨）を掲載した。

<平成 18 年度>

4 月 1 日	大学 FD 講演会「大学教育と学生の質の保証」（絹川正吉国際基督教大学 名誉教授 Ph.D.）
5 月 30 日	一年次セミナー授業方法研究会
6 月 5 日	第 1 回大学 FD 委員会
7 月 8～14 日	春学期コア科目の「学生による授業評価」アンケート実施①
7 月 24～27 日	「一年次教育国際会議（カナダ オンタリオ州トロント）」教員派遣
7 月 31 日	コア科目担当者研修会
8 月 1・2 日	平成 18 年度第 1 回プレゼンテーション研修会
9 月 12・13 日	平成 18 年度第 2 回プレゼンテーション研修会
9 月 21 日	「未来創造セミナー―世代と部門を超えて―」開催
10 月 4 日	「一年次セミナー」担当者研修会
11 月 13 日	第 2 回大学 FD 委員会
1 月 6～15 日	秋学期コア科目の「学生による授業評価」アンケート実施②
1 月 19 日	第 3 回大学 FD 委員会
1 月 24 日	「一年次教育」講演会「FYE―一年次教育―の波及効果」（Mary Stuart Hunter, Director of Administration, 米国サウスカロライナ大学 附属一年次教育研究機関 [NRC]）
2 月 21・22 日	平成 19 年度採用の新任教員研修会
2 月 27・28 日	平成 18 年度第 3 回プレゼンテーション研修会
3 月 3・4 日	大学コンソーシアム京都「第 12 回 FD フォーラム」教職員派遣
3 月 13 日	平成 19 年度「一年次セミナー」新規担当者研修会
3 月 23 日	平成 19 年度「一年次セミナー」担当者研修会
3 月 30 日	第 4 回大学 FD 委員会

（５）活動の成果

大学 FD 講演会は全専任教員対象に開催した。本年も 4 月に開催し、当日が本学園の創立記念日ということもあり、450 名前後が参加した。毎年、着実に教員の意識が高まってきていると言える。また、本年度は理事長と「学生と接して感じる大学のあり方ー10 年後の玉川大学を、どんな「夢の大学」にしたいですかー」というテーマを題し、学部を超えての夢を語ることを通して本学の目指す方向を再確認するとともに未来を担う一員としての自覚を深めることを目的に「未来創造セミナーー世代と部門を超えてー」を開催した。

プレゼンテーション研修会は、実施後のアンケート調査によると「有用性」についての回答が一番多く、「今後、授業に役立つようにスキルを生かしていきたい」「授業について考え直すよい機会になった」というコメントが目立った。また、ディスカッション内容が充実し、これらを通じて教員間に相互理解が深まり、FD 活動の必要性を認識し、意欲も向上した。さらに、改善への提案に結びつくような具体的な意見が出てきたことが成果としてあげられる。

コア科目における「授業評価アンケート」は今年度も 2 回実施し、15 年度からで計 8 回実施したことになる。授業毎の集計結果及び記述式アンケートは各授業担当者にフィードバックしているが、昨年度同様、全体及び分野集計の平均値を学内のみ対象にホームページで公表した。

新任教員研修会は、開催後のアンケートにおいて、研修内容が充実していた、教材が分かりやすかった、講師の説明がわかりやすかったと概ね 100%の回答を得た。また、研修に参加して、「大学の沿革、教育方針、理念、全容がよく分かり大学運営の仕組みが理解できた」「今後の授業運営に参考になった」「学部間交流ができた」など感想が寄せられ、本研修会の目的を達成できたと評価できる。

一年次教育の教材については当初、米国の多くの大学で使用されている教科書の抄訳書を本学が作成し使用したが、担当者、学生の双方に戸惑いと違和感が生じた。このため、本学の実情に即した独自の教科書が必要となり本学での使用はもちろん、他大学での使用も念頭に入れ、平成 18 年度より『大学生活ナビ』を作成した。

（６）今後に向けて

昨年度の報告書に記載のとおり、今年度も大学 FD 講演会、新任教員研修会に加え、プレゼンテーション研修会も本学の研修センターとの共催の形式で開催した。平成 19 年度以降は、さらに内容と開催回数について研修センターと調整を図りながら充実を図りたい。

また、教員相互の授業参観や研究会は、平成 17 年度秋学期から開催し 6 学部中、3 学部。平成 18 年度は 6 学部中、5 学部が実施したが、学科によっては実施できていない現状もあるという結果であったため、平成 19 年度以降は全学部全学科で開催できるよう、さらに啓蒙活動を推進していきたい。

2. 認証評価機関による認証評価結果と助言

玉川大学は、財団法人大学基準協会の加盟判定審査ならびに認証評価の結果、大学基準に適合していると認定され、2007（平成 19）年 4 月 1 日付で正会員への加盟・登録を承認された。認定期間は 2012（平成 24）年 3 月 31 日までで、次回の認証評価は 5 年後の 2011（平成 23）年度、その後は 7 年ごとに認証評価を受けることになる。ここに認証評価の結果より、教育内容・方法および教員組織に係る内容を抜粋する。特に、大学への提言において記載されている「長所として特記すべき事項」の維持・伸張および「助言」を付された事項の改善は、今後の大学・大学院 FD 活動において重点的に取り組んでいく。

『玉川大学に対する加盟判定審査結果ならびに認証評価結果(平成 19 年 3 月 13 日)』より抜粋

<前略>

II 総 評

一 理念・目的・教育目標の達成への全学的な姿勢

貴大学の設立母体である玉川学園は、1929（昭和 4）年に設立された。その教育理念の実現に向けて、1947（昭和 22）年に玉川大学が誕生し、2006（平成 18）年 5 月 1 日現在では、6 学部 5 研究科を擁する総合大学となっている。

創設者が提唱した「全人教育」という教育理念を、建学当初から現在に至るまで一貫して堅持している。この教育理念こそ貴大学の教育を支え、特色を形成している最大の財産であるとともに、教育界にも大きな影響を及ぼした優れた理念である。卒業生の子弟で貴大学に入学を希望するものが多く、教育理念が純粋に伝承される独自の学園カラーや体質を形成している。また、学部教育に「全人教育」の精神を反映させるために「12 の教育信条」を掲げ、独自性の高いカリキュラムを編成し、全学部共通のコア科目において「全人教育・FYE（First-Year Experience）科目群」10 単位を 1 年次生の必修科目として設置している。ほかにも、一流の芸術・音楽に触れる研修行事や幼稚部から大学まで学園全体で開催する体育祭、礼拝堂での祈りなどの活動をととして教育理念の実践を図っている。

しかし、全人教育の一環として全人形成に相応しい教養を身に付けることを目標とした、コア科目に対して「学生の授業評価では積極的な評価を得ていない」との自己評価があるため、授業評価の結果の背景にある原因を究明することが必要である。また、教育理念が卒業生や学園の教職員にどのような付加価値や満足度をもたらしているのかを継続して検証し、今後、教育・研究にフィードバックしていくための改善が必要である。

<中略>

三 長所の伸張と問題点の改善に向けての取り組み

<中略>

2 教育内容・方法

(1) 教育課程等

文学部・教育学部

文学部・教育学部ともに、教育目標の達成に向けて体系的に履修する教育内容になっている。「全人教育・F Y E科目群」を含む「コア科目群」から「学科科目群（導入科目群・発展科目群・専攻科目群）」に展開するという連続性のある科目配置を行っている。「全人教育」の一環として幅広い、また学際的・国際的な教養人となることを目指した「コア科目群」に特色があり、そのなかでも、特に大学の理念が色濃く現れているのが「全人教育・F Y E科目群」で、学士課程への導入教育の役割を果たしている。

農学部

バイオサイエンス、ライフサイエンスを教育基盤として、「生命」「資源」「環境」の3つの視点から教育・研究を推進する姿勢を明確に打ち出している。「コア科目群」から「学科科目群」にわたる一貫したカリキュラムを編成し、1年次生には「全人教育・F Y E科目群」10単位を必修として、大学教育における基礎的な学修の技法を教示している。また、専門分野の学修に必要な、化学・生物学・物理学などの基礎学力が不足している学生への対応にも取り組んでいる。

工学部

教育理念に基づいて策定した「工学部宣言」に沿った教育内容であり、十分な成果をあげるように整備できている。学士課程への導入教育として「一年次セミナー」を設置し、「学科科目群」では、低学年次に工学分野の学修に共通する基礎的な科目を設置して人間力の育成を行い、第1セメスターから「導入科目群」「発展科目群」「専攻科目群」をバランスよく配置している。また、実験・実習を伴う科目に重点を置いて実践的な技術者の育成を目指している。

経営学部

学部の4つの具体的な教育目標におおむね沿った教育内容である。特に、「先行履修制度（プリリクイジット）」を導入し、専攻する分野の学問を体系的に学ばせている点、国際社会で活動できる企業経営管理者に必要とされる資質として、外国語や国際関連諸領域の基礎知識を修得させる点、コンピュータリテラシーを強調したカリキュラム構成、企業経営の倫理性・公共性を強調している点に特色がある。

芸術学部

学部の教育目標を「芸術による社会貢献」「人と芸術の新しい関係」「芸術と社会の新しい関係」「開かれた芸術」などのキーワードで集約し、これらを十分に達成しうるように教育内容を整備している。「コア科目群」から「学科科目群」にわたり体系的なカリキュラムであり、さらに、4つの学修領域「芸術創造」「芸術応用」「芸術研究」「企画経営」を設定し、効果的な学修ができるようにしている。また、「一年次セミナー」のほか、「パフォーミング・アーツ概論」「ビジュアル・アーツ概論」を設置し、導入教育を意識したカリキュラムでもある。ただし、広範な芸術分野を網羅した教育内容であり、専門性を深化する場合に若干の懸念を含んでいる。

文学研究科

教育理念に基づき、学士課程教育を深化させるとともに、教育学専攻では教育学研究

と教員養成を、英文学専攻では英文学・英米文化研究と中高英語科教員の養成を目標としている。高い専門性を図るために設定した専攻内の4つのプログラムに加えて、文学・農学・工学の3研究科の枠を超えた学際領域プログラム「人間情報科学」を開設するなど、広い視野を有し、精深な学識を有する人材の育成に努めている。「長期履修学生制度」によって、標準修業年限を超えて在籍する場合の学生納付金を2年間で修了する場合とほぼ同額に抑えられていることは、特に社会人学生に対しての配慮となる。また、英文学専攻では、他大学からの進学者に対して「全人教育研究」を必修化していることが注目される。

農学研究科

教育目標を達成し十分な成果をあげうるようなカリキュラムを編成している。ただし、修士課程の講義科目において、やや特定の分野への偏りが感じられるため、広い視野に立つという目標に向けて多少の改善が必要である。高度専門職に就ける人材の養成に加えて、広い視野と高度な専門性の両方を備えた人材を養成するために、文学・農学・工学の3研究科の枠を超えた学際領域プログラム「人間情報科学」を設置している。

工学研究科

修士課程においては、2つの専攻のなかにコースを設け、合計8つのコースで工学研究科の学問領域をカバーしている。また、博士課程後期では、この8コースを生産開発工学専攻として一本化した研究指導体制をとっている。修士課程・博士課程後期ともに適切な教育目標を設定し、その達成に必要なカリキュラムを編成している。また、文学・農学・工学の3研究科の枠を超えた学際領域プログラム「人間情報科学」を開設し、横断的・有機的連携のもとに学際的視野を持った人材の育成に努めている。なお、社会人学生の在籍者がいないため、社会人学生が入学しやすい履修制度を検討することが望まれる。

(2) 教育方法等

文学部・教育学部

文学部・教育学部とも、入学時や進級時などにおける履修指導は組織的に行っている。新生のガイダンスについては、文学部では1週間をかけ、教育学部では2泊3日の合宿指導を行っている。また、履修登録できる単位数の上限は全学的に1セメスター20単位（年間40単位）に設定している。さらに、一定以上の優秀な成績をおさめた学生には「大学院科目」の履修を認める措置も講じている。

教育効果の測定や学生による授業評価に関しては、文学部では3学科がそれぞれ独自の方式で授業に対する反応と意向を聴取し、教育学部では「授業リフレクション・シート」という名称の授業評価アンケートを実施している。文学部では学科ごとで趣旨や方法が異なるため、学部としての実態が把握しにくい状態である。

教育方法の改善に向けては、両学部とも「プレゼンテーション研修」「FD講演会」「授業実践報告会」などを試み、努力が認められる。

シラバスに関しては、記述内容の充実に向けた努力を行っているものの、文学部では教員間で記述内容の差が大きい。

農学部

新入生に1泊2日の研修を実施するなど、入学時および進級時における履修指導の徹底、成績評価の方法の均一化、ウェブを利用したシラバス、マルチメディアを積極的に活用した授業の展開、組織的にファカルティ・ディベロップメント（FD）活動に取り組むことによる教育方法の改善、eラーニングシステム「Blackboard」の活用など、教育に関する多くの改善に努力が感じられる。

しかし、授業評価の実施とその結果のフィードバックについては、専任教員の講義科目のみにとどまっていること、結果の学生への公表がないことなど、今後の改善・充実が望まれる。

工学部

学生による授業評価を全教員の担当科目すべてにわたり実施することを義務付け、その結果を原則すべて公開にしているが、いまだに参加しない教員がおり、授業評価結果を授業改善にどのように生かすのかは個々の教員の裁量に任せている。

入学時や進級時での組織的かつ入念な履修指導、年間の履修登録できる単位数の制限、ウェブを利用したシラバスなど、十分な成果をあげるための教育方法を実践する努力は行っている。

2006（平成18）年10月に学部としてISO9001を認証登録し、「教育クォリティ方針」のもと、教員の個々の授業すべてについて、「授業チェックシート」を作成し、授業のPDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルを活性化させ、学科の「授業検討委員会」において確認作業を行っている。学生の満足度を確認しながら教育の質を継続的に向上させていることは評価できる。

経営学部

学部のFD会議を定期的に行うなど、教育方法の改善に取り組んでいる姿勢が見られる。特に、授業にディスカッションやフィールドワーク、eラーニングの要素を取り入れて改善している点、FD会議・FD研修会などで話し合いながら教育方法の改善に努めている点、全学的なプレゼンテーション研修会に約9割の教員を参加させ、教育方法について学ばせている点などは、注目に値する。また、セメスターの履修要件を満たさなかった学生を対象に、警告者ガイダンスおよび注意者ガイダンスを開催して丁寧な履修指導を組織的に行っている点は評価できる。

しかし、シラバスの記述が十分でない科目があることや、授業評価結果を授業改善にどのように活用するのかについては教員個人の裁量に任していることなど、課題も多々見られる。

芸術学部

eラーニングシステム「Blackboard」の教育的な活用や、GPA（Grade Point Average）制度を導入した教育効果の測定など、教育目標を達成する努力を行っている。また、履修登録できる単位数の上限を各セメスターで設定し、適切な履修指導も行っている。しかし、シラバスや学生による授業評価結果の活用については、なお多くの課題を残している。

文学研究科

入学時の全般的な履修ガイダンスのあと、指導担当教員を決定し、個々の学生の目的と修学形態に応じた指導を行っている点は、標準的な指導形態であり適切である。成績評価の仕組みを厳格にし、GPA制度を導入するとともに、必要に応じて評価に異義申し立てができる体制を整備している。また、修士論文の審査・評価に、透明性・客観性を高める措置も講じている。しかし、シラバスの作成および学生による授業評価についての組織的取り組みが課題として残っている。

農学研究科

教育目標を達成するために、おおむね配慮された教育方法である。修士課程では1年次にスクーリング、1～2年次に研究論文作成のための研究指導、2年次の終わりに論文発表会の実施、博士課程後期では1年次から研究室単位での研究や演習、博士論文作成と研究発表などにより、適切な指導を組織的に行っている。

しかし、シラバスを作成しておらず、授業評価に相当する教育評価システムも整備できていない。FDに対する活動も行っていないため、取り組むべき課題は多い。

工学研究科

修士課程では、年度始めに履修ガイダンスや履修コースの説明などを通じて適切な履修指導を行い、2年次への進級時に「中間発表会」を開催して全担当教員が各学生の学位論文作成状況を把握し、適切に研究指導を行っている。博士課程後期では、学位論文の研究成果を専門学会誌に掲載することを義務づけており、一定水準の研究指導を行っている。

しかし、シラバスを作成していない。また、研究科独自のFD活動も組織的にできていない。

<中略>

7 教員組織

専任教員数は大学設置基準に定める必要専任教員数を上回っており、教育目的に対応した人的配置を行っている。研究科については、「大学院資格審査委員会」の審査を経た学部教員が兼担している。

専任教員1人あたりの学生数は、教育学部教育学科を除く学部・学科で30名以下となっており、少人数教育を行っていることが特色である。また、「全人教育・FYE科目群」を中心に、専任教員が主要な授業科目をほとんど担当している。

専任教員の年齢構成については、高齢化しており、助教授・専任講師の平均年齢がやや高い。また、女性教員を増やして、専任教員の男女比率のバランスをとることも望まれる。

専任教員の担当授業時間数の平均も教員間で格差がある。特に、農学部や工学部などの専任教員の一部は、担当授業時間数が多いので改善の必要がある。開講する科目数の充実と教員の担当授業時間数のバランスの確保については、課題が残る。

専任教員の任用手続きについては、規程に明文化しているが、さまざまな規程に分散している状態でわかりにくい。また、選考方法および評価（選考）基準が明示されてお

らず、教員公募も一般化していない。

実験や実習を伴う分野の人的支援は、助手や副手、専任の職員などが担っている。特に、理工系・芸術系の分野では学修を支援する要員が不可欠であり、妥当な要員数を確保できる体制を確立すべきである。この点については検討を進めており、成果を待ちたい。

芸術学部について、実技担当教員の多くが芸術家として積極的に活動を行っていることは教育・研究にもよい影響を与えると期待できるが、多様な学生に対してより効果的な教育を行うためには、非実技系科目を担当する教員を充実させることが望まれる。

<中略>

Ⅲ 大学に対する提言

総評に提示した事項に関連して、特筆すべき点や特に改善を要する点を以下に列挙する。

一 長所として特記すべき事項

1 教育内容・方法

(1) 教育課程等

1) 全学部の新入生に対して「一年次セミナー」を組織的に展開して、導入教育を行っている。この1年次教育プログラムの実施にあたっては、「コア・FYE教育センター」が主体となって、教材、教育用ツールの開発・提供、授業評価アンケートの作成・分析、指導教員の研修などを行っている。全学的・組織的な取り組みは「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」にも選定されており、大いに評価できる。

<中略>

二 助言

1 教育内容・方法

(1) 教育方法等

1) 全学部でフォーマットを統一したシラバスを作成することとなっているが、作成できていない教員が一部おり、内容にも精粗がある。また、学生による授業評価アンケートについては、その結果の授業改善への活用方法は教員に一任されて個人の裁量で行われており、一部の学部を除いて、評価結果を学生に公表していない。組織的な取り組みを強化して適切に実施する必要がある。

2) 研究科においてはシラバスを作成しておらず、FDに関わる組織的な取り組みもないため、実施に向けて検討する必要がある。

<中略>

3 教員組織

1) 大学全体の専任教員の年齢構成を見ると、50歳代が42.4%と突出しているため、若手教員を採用するなど、年齢構成のバランスをとるための改善が望まれる。平均年齢についても、助教授が47.3歳、専任講師が41.1歳であるため、やや高いという印象を受ける。現在、昇格基準の見直しを進めており、この点についての改善を待ちたい。

2) 専任教員の任用手続がさまざまな規程に分散している状態でわかりにくく、選考

方法および評価（選考）基準が明示されていない。また、教員の採用は、学内教員による推薦を基本としており、公募が一般化していない。教員公募の推進と任用手続の整理が望まれる。なお、2006（平成 18）年度には公募を試みるなど、公募制と学内教員による推薦制を絡めた望ましい採用方法の検討を進めており、経過を見る必要がある。

< 中略 >

以 上

3. 学部活動

平成 18 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価の実施			学部 研修会	プレゼンテーショ ン研修会へ の参加者数
			実施時期	専任 対象	公表		
文 学 部	4 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)*1	学外 実施	4 名
農 学 部	5 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	—	3 名
工 学 部	—	—	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)*2	学内 実施	3 名
経営学部	25 名 (全員)	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)	学内 実施	1 名
教育学部	10 名	4 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学外 実施	3 名
芸術学部	5 名	12 回	秋セメ終了後	全員 *3	—	学外 研修	2 名
コア科目			春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内 (報告書)		

*1:文学部における公表は国際言語文化学科である。

*2:学外には総括した内容、学内には全てを詳細に Web と紙面で公表している。

*3:受講者 30 名以上の講義科目を対象とした。

各学部専任教員におけるプレゼンテーション研修会の受講修了状況（平成 18 年度現在）

	18 年度専任教員数 (A)	A の中で受講した人数	割合
文 学 部	65 名	41 名	63.1%
農 学 部	41 名	32 名	78.0%
工 学 部	55 名	29 名	52.7%
経営学部	25 名	23 名	92.0%
教育学部	38 名	25 名	65.8%
芸術学部	35 名	19 名	54.3%
合計	259 名	169 名	65.3%

※専任教員は助手以上で、平成 18 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

■各学部における今後（平成 19 年度～）の計画等について、一覧にまとめる。

	今後の計画
文 学 部	・教育研究上の資源や経験を共有していける場の提供（比較文化学科） ・新学部を設置趣旨や教育目標の実現へ向けての FD 活動の展開（リベラルアーツ学科） ・学内の FD 活動の機会をより多く設けるとともに、学外で開催される各種 FD 研修会への積極的な参加を促す。 ・今後の文学部における教育・研究活動の在り方を再検討した上で、教員個々人の資質向上に努める。
農 学 部	・シラバス内容の充実とその改善 ・Blackboard システムの活用方法の検討 ・授業評価アンケート項目および実施科目の検討 ・平成 19 年度プレゼンテーション研修会への参加 ・教員相互の授業参観の実施 ・学力不足の学生に対する対応 ・4 単位科目の授業運用上の検討、および見直し ・大学院 FD 委員会と協調し、教育技能開発の推進を図る。 ・TA の活用法の改善
工 学 部	・20 年度からの学部改組を ISO9001 活動と整合性を取りながら進める。 ・改組において「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。
経営学部	・授業内容・方法に関する研究（継続） ・教員研修会の開催（継続） ・専門科目共同授業に関する研究（継続） ・リメディアル教育に関する研究（継続） ・一年次教育に関する研究（継続） ・学生確保に関する研究（継続） ・学部・大学院一貫教育についての研究
教育学部	・講義科目の授業評価アンケートだけではなく演習、実習、実技科目についてのアンケート用紙を作成し実施する。 ・アンケート結果を集計し学部内そして学生への還元が課題。
芸術学部	・GPA 向上、附加能力向上とともに、社会貢献するべくその機会と場を獲得のための重要課題の一つである就職という現実とどのように取り組むかを教員、学生双方に認識させるかを考える。

§ 文学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

大学を取り巻く環境が大きく変化し、多様なニーズが大学に求められる中において、文学部では、文学部および各学科独自の理念や教育目標をいかに実現するかという視点を常に念頭に置きながら、日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開するように心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に活動に参加できるような体制を構築することを目標にしている。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

文学部長を交え、文学部各学科（人間学科、国際言語文化学科・比較文化学科、リベラルアーツ学科）の合同 FD 委員会を開催している。また各学科では、学科会あるいは運営委員会等の場で FD 活動の企画・運営に関する事項を審議している。

(3) 18 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

FD 研修会の開催、学生による授業評価の実施、教員間の授業参観、学外研修への参加など、それぞれの活動で成果をあげることができた。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

人間学科では、各科目の授業形態（講義中心・発表・討論）・受講者の人数（クラスの規模）・マルチメディアの活用の仕方（Blackboard の活用：教材・宿題・課題呈示などを含む）に応じて、授業時に行う講義内容に関する理解の確認とコメント用紙の提出、アンケートによる学生の学習状況の把握などによって学生の授業に対する評価を知ると共に、それに対するフィードバックもしている。

国際言語文化学科および比較文化学科では、昨年に続き第 6 回目（比較文化学科としては初めて）のアンケート調査を行った。今年度は国際言語学科の発展科目群および比較文化学科の全科目を対象とし、春・秋両学期末に実施した。アンケート結果は個別に各担当教員にフィードバックし、授業改善に資すると共に、学科運営委員会で全体の集計分析を行い、本学ホームページに掲載する予定である（春学期分の結果はすでに「中間報告」として掲載してある）。

リベラルアーツ学科では、各教員がそれぞれの授業形態に応じて、授業に対する学生のリアクションや評価を確認しながら、授業運営の改善に努めた。授業アンケートは、必修科目（例えば「リベラルアーツ入門」）を中心に実施し、学生にフィードバックするとともに、結果を授業運営に反映させた。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

人間学科では、授業参観という形ではないが、学科・学年指定のいくつかの必修科目を複数の教員が担当する中で相互研修の組織的な取り組みを行っている。各学生の

学習状況をかなり徹底して把握する、教員の教授方法、学習指導などといった授業への取り組みについて授業中の具体的な場面を例に挙げて互いに意見交換をする、評価基準を検討するなどの活動は、相互の授業活動を客観的に捉えることにもつながっていると思われる。

国際言語文化学科・比較文化学科およびリベラルアーツ学科においても、複数の教員が担当する科目を中心に互いの授業を参観する機会をもち、教授方法の客観的把握と改善に努めた。

④ 研修活動の組織的な取り組み

プレゼンテーション研修会には文学部から4名の参加があった。

人間学科では、京都大学での高等教育研究開発推進センター主催「大学教育研究フォーラム」(3月27日～28日開催)へ4名が参加した。

国際言語文化学科・比較文化学科では、京都産業大学で行われた「第12回FDフォーラム」(3月3日～4日)へ4名が参加した。

リベラルアーツ学科では、教育研究活動の改善へ向けて、日頃から学科全体で取り組んだ。年度末(2月14日)には、学外施設において集中的に、全教員が参加してFD研修会を実施した。この研修会では、(ア)まず、外部講師による講演を2つ実施した。NPOと大学教育との連携に関する講演と他大学のFD研修事例に関する講演である。

(イ)次に、「リベラルアーツ学科からリベラルアーツ学部へ：総括と展望」というテーマの下、全教員でディスカッションを行った。学科完成年度を終えるに当たり、学科設置の趣旨や教育目標との関連で、4年間の教育活動の点検と総括を行い、新学部開設へ向けての課題と展望を話し合った。また、本学科からも、京都大学高等教育研究開発推進センター主催「大学教育研究フォーラム」へ1名が参加した。

⑤ その他の取り組み

人間学科では、③で既述した活動に学科のほとんどの教員が関わっており、また、学科の規模が比較的小さいこともあり、教員相互の間で学習指導に関連する個々の学生の状況についても日常的に意見交換・情報の共有が行われている。

リベラルアーツ学科では、全教員が参加して、書籍『キーワードで学ぶ知の連環ーリベラルアーツ入門ー』を出版する企画を立案し、原稿作成と編集を行った(19年4月玉川大学出版部より出版予定)。この出版活動を通して、本学科のリベラルアーツ教育の特色と在り方を認識し、再点検する機会を得た。

(4) 今後の予定や課題

人間学科では、基本的にはこれまでと同様の枠組みで続ける。

比較文化学科では、各教員の担当授業が従来とは大きく変わり、また「双方向的な授業」ということを強く打ち出していることから、とまどいを持つ者も少なくない。今後、教育研究上の資源や経験を共有していける場を提供していきたいと考えている。

リベラルアーツ学科では、これまでのFD活動の成果と問題点を踏まえ、19年度か

らは、新学部を設置趣旨や教育目標の実現へ向けてのFD活動の展開が課題となる。

文学部では今後、学内のFD活動の機会をより多く設けるとともに、学外で開催される各種FD研修会への積極的な参加を促したい。そして、今日の大学を取り巻く状況を的確に把握し、今後の文学部における教育・研究活動の在り方を再検討した上で、教員個々人の資質向上に努めたい。

S 農学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

全学FD委員会と協調しながら、プレゼンテーション研修会などに積極的に参加し、また、専任教員および非常勤講師は原則学生による授業評価を行う（ただし実験・実習・演習、また受講者が10名以下の科目については除く）。これらを通じて、教員の教育技能開発を推進する。

(2) 学部におけるFD活動の組織体制

大学FD委員（河野）、農学部長（佐々木）、生物資源学科主任（新島）、生物環境システム学科主任（岩坪）、生命化学科主任（東岸）、計5名から構成する。

(3) 18年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

- ・専任教員および非常勤講師は新カリキュラム科目（1,2年生対象）の授業評価を春semester、秋semesterの2回行った。また4単位科目については複数の教員が担当している関係上、同科目でそれぞれ担当者別に授業評価を実施した（下記②）。
- ・専任教員のプレゼンテーション研修会への参加（下記④）。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

- ・学部長の方針により、非常勤を含む全教員の協力を求め、また授業評価アンケートの内容を一部改変し、新カリキュラム科目（1、2年生対象）について、春semester31名（延34科目）、秋semester30名（延32科目）で実施した。
- ・春semester、秋semesterの集計結果をWebで公開する予定である。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

授業時間帯の重複等により、教員相互の授業参観の組織的な取り組みは出来なかった。同一科目で担当教員の異なる授業については、教員相互の授業参観は成績評価上必要と考える。

④ 研修活動の組織的な取り組み

農学部の専任教員でプレゼンテーション研修会に参加していない教員は11名となった（平成17年度）。平成18年度プレゼンテーション研修会には、3回の機会に4名を参加予定したが、1名は事情により欠席した。

⑤ その他の取り組み

- ・環境再生医の研修会に教員4名が参加し、環境再生医2級の資格を取得した。
- ・科目シラバスの充実、および同一科目のシラバスの調整を図った。

(4) 今後の予定や課題

- ・シラバス内容の充実とその改善。
- ・Blackboardシステムの活用方法の検討。

- ・ 授業評価アンケート項目および実施科目の検討。
- ・ 平成 19 年度プレゼンテーション研修会への参加。
- ・ 教員相互の授業参観の実施。
- ・ 学力不足の学生に対する対応。
- ・ 4 単位科目の授業運用上の検討、および見直し。
- ・ 大学院 FD 委員会と協調し、教育技能開発の推進を図る。
- ・ TA の活用法の改善。

§ 工学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部宣言を具現化するために、教育内容や教育環境の向上をはかる。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

- ・工学部 FD 活動の多くは ISO9001 教育マネジメントシステムの活動と連携している。学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観、など、主任会、教務担当者会で運営している。
- ・全教員参加による工学部 FD 研修会を年 1 回開催。

(3) 18 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

ISO9001 に関しては、2004 年 3 月にマネジメントシステム学科が登録され、2006 年 3 月 15-17 日の審査において、知能情報システム学科、メディアネットワーク学科に拡大されてきた。今年度は、2006 年 9 月 13-15 日更新審査を受け、対象外であった機械システム学科を含め、工学部全学科を対象とすることとなった。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

- ・平成 14 年度から実施してきた学生による授業評価は、16 年度秋セメから全教員・全科目に拡大した。更に 17 年度秋セメからは ISO9001 に対応するためアンケート項目を改定し、全学科を対象とした。18 年度からは、諮問委員会である自己点検委員会から教務担当者会に移し、業務体系の中で実行することとした。
- ・公開：各教員には全体の集計結果と個人の科目別データ。学外 web には全体の集計結果公開。学内 web に全情報を公開（科目別集計シートにおいて教員名は除く。科目担当情報により間接対応可能）。学内 web と同じ内容を冊子として、玄関ロビーで学生に公開。
- ・結果の活用：ISO9001 活動において期末に学科毎に行なわれる授業評価検討会における、各科目ごとの評価、来期への目標設定の中で各教員の授業改善に生かされる。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

2006 年度実施件数

機械システム学科	1
知能情報システム学科	3（平成 17 年度 10 件）
メディアネットワーク学科	1
マネジメントシステム学科	1

各学科の取組について、工学部 FD 研修会において発表した。
授業参観にビデオを活用することについて、意見が出された。

④ 研修活動の組織的な取り組み

- ・全学 FD 委員会で計画されたプレゼンテーション研修会に各学科から参加した。
- ・ISO9001 内部監査委員養成研修会を学内で開催し学科の教員に参加を要請した。

⑤ その他の取り組み

工学部 FD 研修会 2007 年 3 月 22 日 13:00～16:05

工学部改組 似内昭夫

各学科研究授業実施報告 菅沢深、塩澤秀和、水野真、菅原昭博、

各学科 ISO14001 活動報告 小野道照

ISO9001 活動報告 岡井紀彦、山田博三、山本庸介、小野道照

JABEE 活動報告 山本庸介

(4) 今後の予定や課題

- ・20 年度からの学部改組を ISO9001 活動と整合性を取りながら進める。即ち改組において「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。

S 経営学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ① 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）の輩出。
- ② リベラルアーツを基盤とした経営学教育の実現。
- ③ 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部の形成。
- ④ 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部の形成。

(2) 学部における FD 活動の組織体

- ① 学部の専任教員全員が参加する FD 会議（年 2 回）を教育研究会および研究発表会の形式で開催。
- ② 経営学部教員研修会（春学期 1 回：専任教員のみで開催、秋学期 1 回：専任教員および非常勤教員で開催。）今後とも継続して行う予定。

(3) 19 年度の活動内容

- ① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）
 - ・学生による授業評価の実施と公開（その詳細は②に記述する）。
 - ・一年次教育の実施。（全学科目「一年次セミナー101・102」として平成 17 年度より実施。）
 - ・「特別研究 I ～IV（ゼミナール）」の見直しー平成 19 年度より「プロジェクト・セミナー I ～IV」として開始。実施状況をみながら選択科目として継続していくかどうかを点検していく。
- ② 学生による授業評価（活用状況、公表）

春学期、秋学期ともに全専任教員、全非常勤教員が実施ー「経営学部オフィシャル・ホームページ」で平成 18 年度春学期分まで公開済み。平成 19 年度の経営学部 FD 会議でアンケート項目および実施方法について再確認を行う予定。
- ③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

平成 17 年度、平成 18 年度と毎年 12 月に FD 委員（＝学科主任）が中心になり教員相互の授業参観を年 1 回実施してきた。平成 19 年度についても教員相互の授業参観を実施し、授業改善に学部全体として取り組む予定である。なお実施時期については今後検討する予定。
- ④ 研修活動の組織的な取り組み
〈経営学部 FD 会議〉
 - ・ 研究報告
 - ・ 国際 FYE 会議参加報告
 - ・ 学外 FD 研修会参加報告

〈経営学部教員研修会〉

- ・ 第 7 回教員研修会（8 月実施）－平成 19 年度における観光経営学科の開設を中心とした学部運営についての経営学部長報告、観光経営学科開設後の国際経営学科の新たな運営等についての学科主任報告を行った。またそれに基づく国際経営関係、観光経営関係に分かれた 2 分科会での質疑・討論。それらの質疑・討論内容の発表。専任教員のみの参加。
- ・ 第 8 回教員研修会（3 月実施）－第三者評価結果並びに観光経営学科の開設を展望した経営学部の今後の運営についての経営学部長報告、12 月に実施した経営学部授業参観結果および国際経営学科の運営についての国際経営学科主任報告、学部大学院一貫教育についての海野先生報告を行った。さらに個人情報保護講座についてのビデオを鑑賞した。またこれら報告を踏まえて国際経営関係、観光経営関係に分かれた 2 分科会で質疑・討論を実施。最後に分科会での議論について報告等を行った。専任教員・非常勤教員の両方を含めた参加。

⑤ その他の取り組み

- ・ リメディアル教育（AO 入試合格者および指定校・公募推薦入試合格者対象）の実施。今回は学生 95 名、父母 29 名が参加し、1 日の体験授業と学部・学科ガイダンスとして実施。多数の参加により盛大に行われた。
- ・ 第 6 回英語科目担当非常勤教員研修会の開催。
- ・ インターンシップ検討会の開催。今回は派遣先 20 社、派遣学生 35 名と過去最大となった。

（４）今後の予定や課題

- ①授業内容・方法に関する研究（継続）。
- ②教員研修会の開催（継続）。
- ③専門科目共同授業に関する研究（継続）。
- ④リメディアル教育に関する研究（継続）。
- ⑤一年次教育に関する研究（継続）。
- ⑥学生確保に関する研究（継続）。
- ⑦学部・大学院一貫教育についての研究。

S 教育学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指している。指導に当たる教員は自らの資質と能力を向上させ、社会に貢献できる人材育成を行うことを通して、学部の競争優位性を高めることが教育学部 FD 活動の目標である。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

教育学部長、学科主任、教務主任、学生主任、教務・教職担当及び FD 委員で組織する。

(3) 18 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

本学部では社会が求める人材の育成をすることにより、学部の競争優位性を高めることを FD 活動の目標として掲げているが、全教員が担当する教育実習・保育実習での研究授業の訪問指導、またこれらの学校訪問の機会を単に学生指導にとどめるだけではなく、訪問校、園などの学校長や園長、施設長など学校責任者との面談を通して、教育現場の現状や社会的要請と教育の成果や改善すべき点等を調査する機会を FD 活動と位置付けている。さらに、毎年行っている教育長・学校長・園長・施設長などとの協議会において本学部に対する意見・要望を聞くことを通しても FD と人材育成に反映させようとしている。その結果を踏まえて 18 年度もコミュニケーション能力の低下や自然体験の不足を補完するものとして、教員が学生と共に参加した野外教育研修や tap 研修などのプログラムを教育計画に組み込み実行した。また、コスモス祭を表現力・創造力・実行力・伝達力などの育成を図る教育機会として捉え、学部全体で組織的に取り組み、教員と学生が共に育つ「共育」の成果として現れるように FD 活動を実践した。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

学生による授業評価はリフレクションシートとして春、秋 Semester 終了時に実施し、講義内容や教授方法の改善点はどのようなところにあるのかを調査した。今年度の結果を踏まえて、授業評価の目的が教員と学生が共有出来る授業評価案を検討している。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

教員相互の授業参観については、あえて特定の時間を設けず、いつでも授業の参観ができるような体制をとっているが、教員それぞれの持ち授業時数が多いためか、あまり相互参観が進んでいるようではない。しかし、今年度はゼミ論発表会では、複数のゼミが公开发表を行い。徐々にではあるが相互参観が進みつつあるといえる。

④ 研修活動の組織的な取り組み

- ・ 平成 17 年度から開始された 1 年次教育に関する研修を主な題材にして、答申「我が国の高等教育の将来像」を踏まえ、基礎力の充実を図るために求められる教員の資質と能力の向上を目指して 1 年次、2 年次の担任が中心となって今年は学内で 1 日ではあるが終日研修を行った。このことは教育学部の独自性を発揮すべく内容を再構成し、特に 2 年次担任が中心となって一年間の「担任ゼミ」を充実させた。
- ・ 教員の資質と能力が、教職に対する愛着、誇りに支えられた知識、技能等の総体であることを、学部長をはじめ FD 委員が中心となり各種の会議等で発言し、FD 活動基盤の意識化を進めた。
- ・ FD フォーラムに参加し他大学における FD 活動の内容と実態を把握し、本学部の将来構想や各教員の資質と能力の向上を図るようにしている。

⑤ その他の取り組み

17 年度、18 年度に採択を受けた教員養成 GP「実践的指導力を育てる体験学習プロジェクトー地域連携プログラムの検証と研究ー」の推進過程は、学部の FD 活動にも大きな寄与があった。教員養成に係る学部教員にとって、当 GP の各プログラムの遂行・省察の過程は、学部全体の方向に照らして各教員の教授行動や教授行動を振り返り、改善を求める過程であった。「教員としての資質能力に関する調査」「各種体験学習プログラム」「教材・教授法開発プログラム」「宿泊集団生活体験プログラム」「シンポジウム」等への参画は、そのまま学部教員のあり方を強く示唆するものであった。

その意味において FD 活動にも、学部の独自性なり性格に基づいての FD のあり方を考えさせる契機でもあったといえる。また、日常的な教育活動と密着しての FD のあり方を考えさせるものでもあった。これらの点、今後、より充実した FD 活動に向けていきたいと考える

(4) 今後の予定や課題

本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える学部の形成を進めるために一層の FD 活動を推進する。具体的には、講義科目の授業評価アンケートだけではなく演習、実習、実技科目についてのアンケート用紙を作成し実施すること、そして、アンケート結果を集計し学部内そして学生への還元が課題でもある。

§ 芸術学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ・芸術学部のミッション「芸術による社会貢献」の意図を理解するとともにそれを実践する人材育成が学部全教員の目標であることを認識し、その達成のための方途を探究する。
- ・三学科それぞれの特性を反映した独自のカリキュラムに加え、学科相互間の学習連携の実現を強く意識したカリキュラムをも合わせて設定することで「社会貢献」に対する幅広く有意義な体験の機会を持たせる。
- ・「芸術による社会貢献」達成のための具体策として多様な職業の理解と就職することへの意識向上を図る。そのためにキャリアセンターとの連携を密にし、各種就職説明会および試験等の企画と実施に各学年の全担任が強力する。また学生の SPI 試験、VPI 試験受験感想アンケートの集計結果を全担任が掌握し、各種企画継続の参考とする。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

- ・芸術学部長を中心に主任会メンバーがこれに当たる。毎月の主任会と主任研修会で活動目標とその達成手段を検討し、随時その成果及び新たな方策等を拡大教授会で報告する。

(3) 18 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況・成果）

- ・芸術学部では各 Semester 終了時成績報告に加え各学科学年の GPA グラフを添付し、学生各自が自分の成績がどこにあるのかが解るようにしてある。
- ・成績不振学生に対して芸術学部独自のスケジュールで履修継続特別指導とその指導記録を各履修登録前に実施している。
- ・GPA を上げることと同時に芸術学部の学生としての基礎的学力、知識向上を図るために、今年度芸術教養テストを春 Semester 1・3 年次生に「アート・スタンダード・テスト」として実施した。結果は予想以上に良好であったが、その継続と段階的内容設定については目下検討中である。
- ・一年次セミナーの授業時間の有効活用と、内容理解充実のために芸術学部独自の方式を模索中であり、実験的授業を新入生研修で実施した。この成果のデータ化には時間を要するが、クラス単位ではなく学年合同による複数担当者、複数専門分野の学生によって得られる有意義な取組みとして捉えている。
- ・学生に附加能力をつけさせるために英語検定合格等を視野に入れたカリキュラム設定を先ずメディア・アーツ学科が外国人専任担当「アートインイングリッシュ」に取組み、19 年度開講に向けて準備中でありその成果は他二学科への波及が期待される。

- ・芸術学部発足第一期完成年次卒業プロジェクトを中心にした三学科それぞれの優秀な成果を修めた学生に授与する芸術学部長賞を創設した。本年度はその第2回にあたるが、この総合的に学習成果をあげるということに対する教師、学生双方の意識向上を期待することができる。
- ・カリキュラム改訂及び新設科目設定等による学生の履修要望を受け入れる幅を広げることが可能になった。その一つとしてパフォーミング・アーツ学科の音楽実技科目のなかに実技教育のカテゴリー制（M20・M30・M50）をする。それに伴い鍵盤楽器（ピアノ編）の教科書編纂が18年度に完成することが特筆できる。また演劇・舞踊系では科目「パフォーマンス」に柔軟に繋がる表現領域・企画等の科目を増設、ビジュアル・アーツ学科は実技を演習科目として新設メディア・アーツ学科との連携を打ち出す。これらの成果は追って得られるであろう。

② 学生による授業評価（活用状況・公表）

- ・17年度はWebにおいて学生授業評価を実施したが、その低い回答者数値を解消するために18年度は芸術学部の一授業改善のための一学生による授業評価アンケートの回答用紙を作り、芸術学部開講科目（受講者30名以上の講義科目）を対象に補講・試験期間内で実施した。その回答結果は担当者に返還される。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

- ・三学科共に産学連携プログラムを実施する。パフォーミング・アーツ学科＜青山円形劇場との連携＞、メディア・アーツ学科＜デジタルプラネット Music Japan TV との連携＞、ビジュアル・アーツ学科＜ゆうゆう版画美術館祭り・町田市立国際版画美術館連携＞がある。これらはその内容から個人の教員が単独指導できるものではなく、計画から実施まで複数教員の連動により成立するものであり、当然のことながら常に複数教員同士の確認掌握の下に進行する。これらは芸術学部独自の教員相互授業参観であり、その組織的取り組みといえる。

この種の試みは三学科で継続されるプログラム意外に19年度新規に実施されるプログラムがあり、これら企画は特定の分野では成立し得ない総合的内容をもつもので、ここでも複数の教員による組織的授業参観が発揮されることになる。

④ 研修活動の組織的な取り組み

- ・17年度に続き18年度もFD共同研究としてロンドン市内メトロポリタン大学との連携推進と留学の具体的内容検討をするため出張した。またルツエルン及びバーゼル市内アートスクールのデザイン教育の実態調査と19年度100%デザイン東京への共同研究参加を企画し、両者のデザイン教育の模索が始まる。

⑤ その他の取り組み

- ・eエデュケーションの促進

メディア教育推進室の強力を得て、授業におけるBlackboard活用を促進しつつある。

- ・パフォーミング・アーツ学科の個人レッスン授業などは毎授業その記録がとられている。またどの学科でも教員が単独で毎授業そのポイントと感想を学生に記録させ、学習状況を把握する一手段としている。大きい規模ではビジュアル・アーツ研究の

授業において学生が映像資料がストリーミング形式で自宅からも視聴できる掲載など効率のよい学習態勢を提供している。

- ・ ビジュアル・アーツ学科ではルツエルンアートスクールと Blackboard を通じて同研究テーマの学習交換を 19 年度開始し、学生のプレゼンテーション能力向上をも助勢する。
- ・ 教員の業績報告・研究者情報総覧記入の徹底と研究内容の明確化を促進する。これは教員個人の業績をあげるばかりか研究成果を学生へ還元することを重要目的としている。

（４）今後の予定や課題

- ・ GPA 向上、附加能力向上とともに、社会貢献するべくその機会と場を獲得のための重要課題の一つである就職という現実とどのように取り組むかを教員、学生双方に認識させるかを考えなければならない。

Ⅱ 教員研修

1. プレゼンテーション研修会

(1) 実施の概要

平成14年から始まったプレゼンテーション研修会も5年目に入った。学部によっては受講率が8割を超え、研修会の内容および運営ともに安定してきた。5年目になって、満足度および効果の向上を図ることができたと思う。

夏休みに2回、春休みに1回、合計3回のクラスを実施し、参加者合計数は16名であった。5年間の参加延べ人数は180名(平成18年5月1日時点の在職者で受講した累積数は169名)となった。各クラスとも5～6名の参加人数だったため、どのクラスも非常に和気藹々とした雰囲気運営され、プレゼンテーション技法における学習効果だけでなく、教員間のコミュニケーションを図る上でも非常に効果的であった。

すでに専任教員の過半数が受講したことになり、FD活動についての共通理解もできた。今後は、当該研修会を継続しながら、他の内容を取り入れた別の研修会に発展させて、幅広いFD活動へと繋がっていくとよいと思う。

(2) 研修プログラム内容

2日間、朝9時から17時までの日程で、以下に示すように演習が中心である。特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

第1日目	第2日目
第1章：プレゼンテーションの基本 第2章：視聴覚教材の使い方	第3章：質疑応答の技法 演習3：基本的な技法の演習 演習4：ディスカッション
演習1：模擬授業 プレゼンテーション（1） 演習2：改善点の明確化 ビデオ視聴による改善作業	演習5：模擬授業 プレゼンテーション（2） 第4章：まとめ 演習6：アクション・プラン作成

(3) 実施の状況

開催の日程および参加人数は以下のとおりである。開催場所は、全クラスとも研究管理棟 201・202 会議室である。参加者詳細は「参加一覧」参照のこと。

- ・第1回： 8月01日（火）～8月02日（水） 5名
- ・第2回： 9月12日（火）～9月13日（水） 6名
- ・第3回： 2月27日（火）～2月28日（水） 5名

(4) 実施後のアンケートから

アンケート項目は、継続的に変化を捉えるために、1年目から同じにしている。項目ごとにA～Eまでチェックするものとフリーコメントの両方からなる。

(4) - 1 チェック項目の集計結果

以下は、チェック項目の結果である。「#」はクラス番号で、その列の第4行、「計」（網掛け行）は3クラス分の合計である。「点」はA=5、B=4、C=3、D=2、E=1として平均を出したものである。

参考のため過去4年の平均を最終行に載せた。1年目は多少低い、2年目以降、ほとんど数字の変化はない。参加者自身の「スキルの向上」については4.1ポイントと低めであるが、自己評価項目では一般的なアンケートでも低い数字になる傾向にあることを考えると妥当な数字である。その他の項目はすべて4.4ポイント以上である。最高点が5ポイントであることから、全体として満足度が高い研修として定着したと考えられる。

① 全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	3	2	0	0	0	5	4.6	1	2	3	0	0	0	5	4.4	1	0	4	1	0	0	5	3.8
2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	2	3	1	0	0	6	4.2
3	5	0	0	0	0	5	5.0	3	5	0	0	0	0	5	5.0	3	1	4	0	0	0	5	4.2
計	13	3	0	0	0	16	4.8	計	12	4	0	0	0	0	4.8	計	3	11	2	0	0	16	4.1
2005	28	5	1	0	0	34	4.8	2005	27	7	0	0	0	34	4.8	2005	12	16	5	0	0	33	4.2
2004	29	3	1	0	0	33	4.8	2004	28	4	1	0	0	37	4.8	2004	10	21	3	0	0	33	4.2
2003	34	3	1	0	0	38	4.9	2003	32	4	1	0	0	37	4.8	2003	12	22	2	1	0	37	4.2
2002	41	15	2	1	0	59	4.6	2002	43	14	2	0	0	59	4.7	2002	10	38	6	4	0	58	3.9

② 研修会の質について

講習内容								講師								テキスト、教材、教具							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	3	2	0	0	0	5	4.6	1	5	0	0	0	0	5	5.0	1	4	1	0	0	0	5	4.8
2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	5	1	0	0	0	6	4.8
3	5	0	0	0	0	5	5.0	3	5	0	0	0	0	5	5.0	3	5	0	0	0	0	5	5.0
計	13	3	0	0	0	16	4.8	計	15	1	0	0	0	16	4.9	計	14	2	0	0	0	16	4.9
2005	21	12	0	0	0	33	4.6	2005	33	1	0	0	0	34	5.0	2005	29	4	1	0	0	34	4.8
2004	27	6	0	0	0	33	4.8	2004	32	1	0	0	0	33	5.0	2004	29	4	0	0	0	33	4.7
2003	26	10	1	1	0	38	4.6	2003	35	3	0	0	0	38	4.9	2003	31	5	1	0	0	37	4.8
2002	36	17	3	2	0	58	4.5	2002	51	6	1	0	0	58	4.9	2002	40	17	2	0	0	59	4.6

③ 研修会の運営について

日程								時間配分							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	3	2	0	0	0	5	4.6	1	1	4	0	0	0	5	4.2
2	6	0	0	0	0	6	5.0	2	6	0	0	0	0	6	5.0
3	4	1	0	0	0	5	4.8	3	4	1	0	0	0	5	4.8
計	13	3	0	0	0	16	4.8	計	11	5	0	0	0	16	4.7
2005	20	10	10	0	1	32	4.5	2005	26	6	1	0	1	34	4.6
2004	24	8	1	0	0	33	4.7	2004	26	6	1	0	0	33	4.8
2003	24	9	5	0	0	38	4.5	2003	31	6	1	0	0	38	4.8
2002	28	19	3	5	3	58	4.1	2002	40	16	2	1	0	59	4.6

開催場所								事務処理・連絡							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	3	1	1	0	0	5	4.4	1	3	2	0	0	0	5	4.6
2	3	3	0	0	0	6	4.5	2	2	3	1	0	0	6	4.2
3	4	1	0	0	0	5	4.8	3	3	2	0	0	0	5	4.6
計	10	5	1	0	0	16	4.6	計	8	7	1	0	0	16	4.4
2005	29	5	0	0	0	34	4.9	2005	19	9	3	1	1	33	4.3
2004	24	7	1	0	0	32	4.7	2004	22	9	2	0	0	33	4.6
2003	22	12	2	1	0	37	4.5	2003	16	16	1	2	1	36	4.2
2002	17	24	6	6	0	59	3.6	2002	14	20	15	7	2	58	3.6

⑤ 研修会の開催について

研修を継続すべきか								他の人に参加を勧めるか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	4	1	0	0	0	5	4.8	1	3	2	0	0	0	5	4.6
2	5	0	1	0	0	6	4.7	2	4	2	0	0	0	6	4.7
3	5	0	0	0	0	5	5.0	3	5	0	0	0	0	5	5.0
計	14	1	1	0	0	16	4.8	計	12	4	0	0	0	16	4.8
2005	23	6	2	0	1	32	4.6	2005	23	7	2	0	0	32	4.7
2004	27	5	1	0	0	33	4.8	2004	29	4	0	0	0	33	4.9
2003	33	4	0	1	0	38	4.8	2003	34	2	1	0	0	37	4.9
2002	46	9	2	2	0	59	4.7	2002	41	14	2	2	0	59	4.6

(4) - 2 フリーコメント概要

項目別の数字によるポイントはすでに安定しており、改善項目を洗い出すという点では無意味である。こうした場合ますますフリーコメントの重要性が増すことになる。記述的にかかれたコメントを集計することは、大変労力を要するが、この中には多くのメッセージが含まれているので、今後も集計をしていきたい。

■「有用性」についてのコメントが 26 件と一番多く、全体として有意義な研修であることをご理解いただけたようである。特に、「今後、授業に役立つようにスキルを生かしていきたい」、「授業について考え直すよい機会になった」という前向きなコメントが多く、この研修をスキル改善のきっかけとして捉えていただいたと考えることができる。

有意義な項目としては、「ビデオで自分の姿を視聴した」、「他の教員の講義を受講した」、「他学部の教員とのコミュニケーションを図れた」、「改善点が理解できた」などがあげられた。

■「内容」では、「授業に活用できるツールや技法がよかった」という直接授業に関連した内容を評価していただいているようである。また、「教員だけでなく、事務職員も一緒に研修会も必要である」といった意見もあげられた。FD 活動が、教員だけのためではないことを考えると、非常に積極的な意見と捉えることができる。

■「日程」については、「一泊 2 日の研修を希望する」、「半日ずつ 4 回を希望する」というような、今までにない形態についての提案があった。「一泊」を希望する背景には、本音で話し合えるディスカッションの重要性があると思う。

昨年までのような「9 時始まりは辛い」、「4 時終了がよい」といった意見は皆無であった。

(5) ディスカッションの実施

2日目の午前中のディスカッションは大変好評で、FD活動を活発にしていけるためには、もっと時間をとって本音で話し合い、その意見を集約して、さらなる改善に結びつけるべきである、という積極的な姿勢を感じることができた。

これだけ大規模な大学の中で、学部・学科という壁を越えて本音でフリーディスカッションをしたことは、大変価値があることと思う。単にコミュニケーションが円滑になったということだけでなく、FDに関する共通理解を図ることができたことが重要である。FD活動について共感しあって築いた人間関係が、これからのFD活動を学部・学科を越えて広げていくための原動力となると感じている。

ディスカッションでは、FD活動関連だけでなく、組織的なことや施設のことも多岐に亘る意見交換が行われた。いずれにしても、“より質の高い教育をしたい”、“玉川大学の価値を高めたい”、“学生に満足してほしい”という熱意に溢れている意見ばかりである。教員一人ひとりの熱い思いが感じられた時間であったと思う。これらの意見は、積極的かつ建設的なものばかりであり、今後のFD活動の幅を広げるための参考になると考えられる。是非、FD委員会でこれらの意見を検証して、実施可能なことは実施の方向に進めていきたいと思う。

ディスカッションで出た意見を、クラス別に以下に列举する。3クラス分を統合せずにクラス別にするのは、フリー・ディスカッションの形式にしたため、出てきたテーマがクラス別に異なるからである。また、なるべく生の声が聞えるように、抜粋したりまとめたりしないで、単に内容別に分類するだけにとどめて記述する。

第1回(8/1~2)(名簿順、敬称略)

メンバー：香取幸一、渡邊博之、佐藤隆之、豊田一秀、田中敬一

教員の仕事について

- ・教育に力を入れるのはよいが、研究にも力を入れるべきである
- ・学生と教員の関係が、どうあってほしいのかが不明確である
- ・教育に力を入れるというのは、学生との距離を近づけることなのか
- ・学生の安全が一番という感じがする
- ・主体は「学生」であることを忘れてはいけない

学生への対応について

- ・単位はいらないから受講したいという学生を断らなければいけない
- ・意欲のある学生が学ぶ機会を奪うのはいけないのではないか
- ・私語の学生に対して、黙って眺める
- ・眠っている学生に対して、怒らずに起こす
- ・学生が発表しているときに眠るのは、厳しく叱る
- ・後ろに座る学生（やる気がない）と、授業前に関係を築く

- ・後の座席まで回って会話する
- ・眠っている学生は、教員も気になるので起こす
- ・起こしたり、叱ったりして雰囲気が悪くなることもあるが、必要ではないか
- ・前の席が空いているときに、学生の意見を聞きながら前を埋める工夫をする
- ・外部に学生を連れていくことができない
- ・公的サークルにすると、保険がかかるので可能である
- ・学生の授業に対する意見を吸い上げる仕組みがない

コミュニケーション不足について

- ・学内オープン・キャンパスをするのはどうか
- ・学内の横のつながりに関して風通しが悪い
- ・学部間で共用できる企画をする機関がない
- ・学術研究所こそが、総合大学としての相乗効果を図る機関ではないか
- ・しっかりした制度の中で、担当教員の融通性を発揮していくことで解決できる
- ・総合大学として、各部が協力していけないか

時間割について

- ・昼休みがないのはどうか
- ・農学部では昼食を取れるように、時間割を工夫している
- ・教育学部では、教職を取る学生がいるので、時間割の工夫は無理

施設について

- ・教室間の移動時間を考慮しなければならない
- ・特殊な教室（例：プラネタリウム）の使用は運営が大変

履修のしくみについて

- ・履修する前に2回程度(1回でもよい)の試し受講できるとよい
- ・農学部では履修後での変更は認められない
- ・コア科目の選択の幅が狭くなってきている
- ・コア科目の抽選がもれて4年を取る学生もいる
- ・重複している科目も調整できるのではないか
- ・出席に対する教員間の共通理解が必要である
- ・ゼミは中核となるべきもののだが、それを選択科目にするのはどうか
- ・ゼミがない状態では、教員と学生の絆を築けないのでは
- ・学部ごとに異なるので、上限の単位を一律にするのはどうか
- ・20単位でも少なすぎる
- ・20単位のメリット・デメリットを再確認すべきである

授業内容について

- ・学生のニーズに合っていない授業がある
- ・教室不足で開講に制約がでる
- ・学部間で時間割の調整をするのは不可能
- ・学内だけでの研究だけでなく、社会との関わりを重視していくことが必要である
- ・学生を一般社会やマスコミとの関りに引っ張っていくことが教員の役目ではないか

シラバスについて

- ・シラバスを臨機応変に対応できるようにするべき
- ・シラバスを履修した学生に合わせて変更するほうが適切である
- ・履修するには、シラバスだけでなく教員との相性もあるはず

組織について

- ・総合大学というより単科大学が集まっているような感じがする
- ・総合大学として機能しているのは管理の面だけである

学外との関係について

- ・市町村との連携で、町づくりに参加できないか
- ・キャンパス内で足固めをした後に、外部に出ていきたい
- ・芸術：サイテックセンターの壁面のデザインをして、企画書を提出した

第2回（9/12～13）（名簿順、敬称略）

メンバー：中田 幸司、佐々木 正己、山岡 好夫、堀 和秀、曾野 洋、野本 由紀夫

FD活動について

- ・歴史から学んで、玉川らしいFDを提案していくべきではないか
- ・色々な大学の事例を調べるとよい
- ・FD研修のプログラムを、もう少し増やせるとよい
- ・大学でも授業崩壊が起きている（玉川ではない）

FD活動を行う上での仕組みについて

- ・FDを推進するためのディスカッションができるような委員会が必要ではないか
- ・意思決定がトップダウンで、学内で議論して上にあげる仕組みがない
- ・問題があったときに、どこに持っていけばよいのか
- ・教育支援のシステムの充実を図る必要がある

組織的について

- ・ TA の活用を考える（玉川では本来の TA ではない？）
- ・ TA が学内だけでなく学外でも活動できると、活力を引き出せる
例：教育学部の TA が小中学校の現場で活躍する
- ・ 学内の業務の流れが不明確であったり、重複していたりしているのではないかと（分かりにくい）
- ・ 業務が縦割りで、連携が取れていない
- ・ 新人研修後の実施するためのサポート体制が構築されていない
例：PC が 5 月、メール使用が 7 月まで待たされた
- ・ 本来の教育の目的に合わせて体制を考えてほしい

評価について

- ・ 大学間でのアンケート結果の違いがあるかを調べてみるのも面白いのではないかと
- ・ 評価は特定の教員を責めるのではなく、全体像がわかることがよい

教員の質向上について

- ・ 「よい授業」「悪い授業」「よい先生」「悪い先生」についての意見を学生から聞くような意見収集をするとよい
- ・ 大学教員は多様であるべきで画一的にならないほうがよい
- ・ サバティカルを導入を検討してほしい→教員の資質開発に結びつく
- ・ 海外とは限らずに国内であってもよいので、是非考慮してほしい
- ・ せめて玉川が持つ地域（ナナイモ、九州、北海道など）に宿泊施設を作って、教職員が活用して研修できるとよい
- ・ 講義の方法だけでなく、学生指導の面での研修が必要である

学生の質向上について

- ・ 学生の活力を引き出すための試みをする必要があるのではないかと
例：千葉大学では学長のリードでボランティアを行っている
- ・ 自己開発を自らやっていく試みが必要ではないかと
- ・ ゆとり教育で育った学生が入学してきて、基礎学力に不足があり、意欲が薄く、競争意識がない傾向にある → 対応していく必要があるのでは？
- ・ 学生の「対人コミュニケーション能力」が低くなっている
- ・ 文章を書かせると多く書くが、文章能力は低い

学内の規則について

- ・ 授業回数（例）のように規則を厳密にすると、失敗に結びつくのではないかと（失敗から学ぶ）
- ・ 規則の設定から考え、弾力性を持たせた規則が必要である
- ・ 学部の特異性を考慮した規則を作成するべきではないかと

授業の仕方について

- ・授業の最初に「約束事」を提示するとよい

教育活動を阻害する要因について

- ・学部棟は7時以降は電気も消えてしまう → 共同で声を出したらよいのでは？
- ・10限の授業が終わると、建物にも入れないのは困る
- ・図書館の閉館時間も早すぎる
- ・7時で建物を閉めると、教育内容にも影響が出る

第3回（2/27～28）（名簿順、敬称略）

メンバー：茅島 路子、實川 眞理子、樋田 栄揮、箕輪 功、相馬 正宜

FD研修の成果を教育活動によりよく活用するために

- 授業の場である教室やAV機器などのハード・ウェアの設計に、FD活動の成果を反映する工夫の必要：
 - 研修成果をよりよい授業に活用したい。たとえば教室の設計や視聴覚機材などに、こうした教員のニーズを反映できるように、ニーズを調達部局に届けるルートがほしい。
 - 携帯電話の授業での活用や授業改善のデータベースなど、新しいアイデアを持っている教員の声や提言を活かしていけるとよい。
 - 学部の枠を超えてコミュニケーションをもつことができれば、特色ある教育を模索する上でも役に立つのではないか。たとえば、全学共通の昼休みなどあれば、教員がインフォーマルな話合いをもったり、学生の意見を聞いたりもできるであろう。教員・職員の垣根も越えたい。
 - 学部の枠を超えてでてきたアイデアをプロジェクトとして育てていけるシステムがあればよいのではないか。
 - 大学に所属する工学や教育工学や認知心理学など最先端の領域の専門家をリソースとしてよりよい教育環境の充実を目指したい。
- 学生や他の教職員などからの協力を得て授業改善を行う時間が確保できれば、FD研修の成果が授業に反映できる。
 - 外部評価などでの文書作成作業が年々増えてきているが、それらのための時間を作り出すと、研修成果を活かした新しい取り組みに挑戦したりフィードバックを検討したりするといった、教育のための時間がとれなくなっている。教員としての本分を考えると、やはり教育活動に時間を充分にかけられることができるように、文書作成の作業量をおさえることができるような体制が、支援の増加や参加している外部プログラムの見直しも含

めて、望まれる。

- 全国区の大学で玉川があり続けるためにも、この成果を活かしたい。
 - 地方入試がキャンセルされたり、玉川学園地域の下宿が埋まらなくなっているなど、地方から親元を離れて玉川に来る学生が減ってきているのではと思われる兆候が散見される。
 - 下宿代を払っても、親元から離れても、それでも玉川で学びたい、あるいは子弟や教え子をここで学ばせたいと考える動機は何かを考えてみる必要がある。
 - 同窓会会員の中には全人教育を受けさせたいと考えている人も多いことは知られているが、現在の大学はその想いに応えているだろうか。
 - 地方の高校教員や同窓会会員とのダイアログを大切に、玉川でしか得ることができないものは何かを明らかにしたい。全人教育もふくめて、玉川の魅力として挙げられたものについては、積極的にカリキュラムに組み入れ、全国から愛されてきた玉川教育とそれを支援してくれる人たちとのつながりを財産として保持していきたい。
 - 上記のような伝統的な玉川サポーターを大切にすると同時に、経済的な理由で玉川への進学をあきらめているような学生に対する奨学金の拡充などで、玉川に期待する新しい層も発掘していきたい。
 - 他大学で「全人教育」を掲げているところまででてきている。元祖として、今の時代にあった全人教育を提言していくことで、リーダーとなれるのではないか。
 - 文科省の GP を得ている一年次教育をよりよく拡充していくことも大切だ。そのためにも、社会人基礎力をつけるための指導と、大学での学習を促進するための指導とを明確に区分して、それぞれの目的を学生が理解するように指導方法を改善していくことが必要だ。
 - 学生が玉川に帰属意識をもち、アルバイトなどで貴重な時間を浪費して学生生活を終わってしまわないような、魅力ある大学であるように工夫しなければならない。帰属意識や達成感を持って巣立った学生は、社会人としての活躍も期待できると同時に、同窓生としても玉川のサポーターとなってくれるだろう。

(6) 実施の成果

プレゼンテーション研修会の実施も5年を経て、半数以上の専任教員が受講済みとなり、当該研修会が定着したと考えられる。フリーコメントやディスカッションからも分かるように、当該研修を通じて教員間に相互理解が深まり、FD活動への意欲が向上したと思う。改善への提案に結びつくような具体的な意見も多く出てきた。こうした具体的な提案ということは、大きな進歩と考えることができる。

次のステップとして、各学部内で行われる公開授業などを通じ、さらにプレゼンテーションの技術が向上していくことが望ましい。また別の内容の研修会も検討していきたい。

(7) 平成 18 年度 プレゼンテーション研修会参加者一覧

学部	学科	在職者数 (人)	平成 18 年度参加者氏名 (敬称略)			※ 累積数 (人)
			第 1 回	第 2 回	第 3 回	
文	人間学科	13			茅島 路子	6
	比較文化学科	24	香取 幸一		實川 眞理子	16
	リベラルアーツ学科	20		中田 幸司		14
	国際言語文化学科	8				5
農	生物資源学科	13		佐々木 正己		10
	生物環境システム学科	12		山岡 好夫		8
	生命化学科	16	渡邊 博之			14
工	機械システム学科	14				8
	知能情報システム学科	17			樋田 栄揮 箕輪 功	9
	メディアネットワーク学科	13			相馬 正宜	9
	マネジメントサイエンス学科	11				3
経	国際経営学科	25		堀 和秀		23
教	教育学科	28	佐藤 隆之	曾野 洋		20
	乳幼児発達学科	10	豊田 一秀			5
芸	パフォーマンス・アーツ学科	16				8
	メディア・アーツ学科	10	田中 敬一	野本 由紀夫		6
	ビジュアル・アーツ学科	9				5
計 (人)		259	5	6	5	169

※在職者数は助手以上で、平成 18 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

※累積数は当該学科の平成 18 年 5 月 1 日現在在職者の中で、平成 14～18 年度に研修を受講した専任教員の累積数。

2. 未来創造セミナー

(1) 実施の概要

日 時：平成 19 年 1 月 29 日（月）13:00～16:00

場 所：研究・管理棟 210・211 会議室

出席者：10 名

目 的：・小原芳明先生と一緒に夢を語ることを通して、玉川大学の目指す方向を再確認する。

・玉川大学の未来について自分なりに考え、他の参加者と意見交換する。

・玉川大学の未来を担う一員としての自覚を深める。

(2) 研修プログラム内容

テーマ：学生と接して感じる大学のあり方

ー 10 年後の玉川大学を、どんな夢の大学にしたいですか ー

13:30～13:35 はじめに (5 分)

13:35～13:50 小原芳明先生のお話 (15 分)

13:50～14:30 参加者による発表 (40 分)

14:30～16:10 ディスカッション (100 分) *途中で適宜休憩

16:10～16:30 まとめ (20 分)

(3) 実施の状況

参加者全員がテーマをもとにそれぞれの意見を発表したあと、大原征而理事の進行によりディスカッションを行った。

参加者の発表は次のとおり：

◇知的発信の共同体の確立 研究者・教育者について、学生教育について、職員について

◇より国際性のある大学、より個々の学生を伸ばすことのできる大学、より学生同士が有機的に関わりあう大学

◇私が学生と接する機会と、学生から受けている印象、「教職員のパーソナリティ」と「制度の運用」

◇玉川大学の学生を甘く見ちゃいけない！

◇全人教育に基づく教育

◇学生と接して感じること どのような玉川大学にしたいか

◇玉川大学をこんな「夢の大学」に

◇学生に活気を出させるには スポーツ科学による人間作り

◇施設の充実、教育のシステム充実

◇「夢の大学」の提案

(4) 実施後のアンケートから

	とても 充実していた	すこし 充実していた	物足りなかった	物足りなかった
研修の内容について	5	1	3	0

研修に参加してよかった点

- ・玉川大学が直面している問題・課題を直接聞くよい機会だった。
- ・他学部の教員の実践を直接聞くことができ、意見交換できて有意義だった。
- ・「考えさせる」というスタンスの教員が多かったことが確認できたこと。
- ・学長から、将来の課題について確認できたこと。
- ・自分自身に関わる仕事しか見えていないと痛感した。

改善してほしい点

- ・資料を事前に配布してほしい。それにより、すぐにディスカッションに入れる。
- ・自分の発表内容の個別の項目について、他の出席者からのフィードバックを希望。
- ・ひとつのテーマでじっくり議論したほうがよい。
- ・各学部レベルでのビジョン構築と結合する必要があると考える。
- ・もう少し研修の時間をかけるとよい。また、同じメンバーで後日開催するのもよい。
- ・参加者が持っている共通の夢をもう少し話し合いたかった。
- ・もっと時間をかけて意見交換したかった。これからというところで研修が終わってしまい残念。

(5) 実施の成果

日頃、学長との直接対話や他学部の教員との意見交換の機会が少ない大学教員にとって、本研修はそれを提供する機会となっていたと感じられた。アンケートでは、参加者の半数が「とても充実していた」と回答している。また「すこし物足りない」と回答した出席者は、いずれもディスカッションの時間が十分に持てなかったことをあげている。本研修は、さらに時間を充分にかけるなど実施方法を工夫することにより当初の研修の目的を達成できると考えられる。

(6) 平成 18 年度 未来創造セミナー参加者一覧

＜文 学 部＞	河野哲也・松本博文	＜農 学 部＞	薬袋裕二
＜工 学 部＞	箕輪 功・益田誠也	＜経営学部＞	芦澤茂光・飯野峻尾
＜教育学部＞	金井茂夫	＜芸術学部＞	高橋正晴・小佐野 圭

* 敬称略

3. 新任教員研修会

平成 19 年度採用の新任教員（助教以上）に対し、研修センターと教学部の共催により、各部の協力のもと研修会を実施した。この研修会は 14 年度より開始されたもので、5 回目の開催となる。参加者 17 名で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 19 年 2 月 21 日（水）10:00～16:50

22 日（木）10:00～16:10

場 所：工学部 123 教室

対 象：平成 19 年度採用の助教以上の新任教員

研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・教育方針に対する理解を
深め専任教員としての業務を支障なく遂行できるよう、また新しい時代
に向けた学園の発展に貢献していただけるよう協力を求める。

（１）研修プログラム内容

【2 月 21 日（水）】

時間	内 容	資 料	担 当
10:00	開会・研修説明		研修センター
10:05	玉川大学の教育と教員に期待すること		教学部長
11:00	休 憩		
11:05	新教育の開拓者－小原國芳 について 校歌紹介	（DVD 上映） ・玉川学園の開校について ・校歌の生まれたとき ・玉川学園校歌（楽譜）	大原理事 研修センター
12:20	昼 食（大原理事と）		
13:05	キャンパス・ツアー ガイダンス		研修センター
13:10	キャンパス・ツアー	・学園案内図 ・キャンパス・ツアー資料	教務課 研修センター
14:15	休 憩		
14:25	玉川学園の組織機構、玉川大学の概要、 専任教員の業務	・玉川学園組織機構図 ・教職員数 ・学生数一覧 ・学部運営組織	教務課
14:55	休 憩		
15:10	研究費と出張（国内外）の手続き等について、 教学事務手続要領について、個人研究 費、学部予算・執行について	・事務手続要領 ・個人研究費マニュアル	学務課

15:50	JCB 法人カードと経費口座について	・「経費口座の開設と JCB 法人カードについて」	資金課
16:05	休 憩		
16:15	玉川学園の個人情報保護方針について	・ 玉川学園における個人情報保護の取り組み ・ 玉川学園個人情報保護コンプライアンス・プログラムガイドブック	総務部長
16:40	質疑応答 翌日の予定説明		研修センター

【2月22日（木）】

時間	内 容	資 料	担 当
10:00	年間授業計画、カリキュラムの概要、学則・規程等（Notes システムと Notes 掲示板の活用、授業、休講、補講、試験、成績等）	・ 年間授業計画 ・ Notes システム ワークスペースの閲覧方法について	授業運営課 情報システム課
11:00	休 憩		
11:10	研究者情報システムについて		教務課
11:45	昼 食（学長・島川理事と）		
12:40	休 憩		
13:10	本学の I T を活用した教育について	・ IT を活用した教育について 玉川大学における e エデュケーション ・ アカウント取得申請書	e エデュケーションセンター 副センター長
14:10	休 憩		
14:20	服務について	・ 大学教員の勤務について ・ 玉川学園服務規程 ・ WELBOX 会員のみなさまへ	人事課 給与課
14:50	休 憩		
15:00	新任教員懇談会		研修センター
16:00	質疑応答 まとめ		研修センター

（２）実施の成果

今年度の新任教員研修会では、研修内容・教材・講師の説明について、参加者のうちほぼ全員が充実していたと回答している。

研修に参加してよかった点としては、

- ①玉川大学の理念や沿革、教育方針、全容について学ぶことができた。
- ②今後の授業運営に参考になった。
- ③大学運営の仕組みが理解できた。

④他の先生方と知り合うきっかけとなり、学部間交流ができた。

⑤事務的手続きの概略と問い合わせ窓口を知ることができた。玉川の職員の対応に感動した。

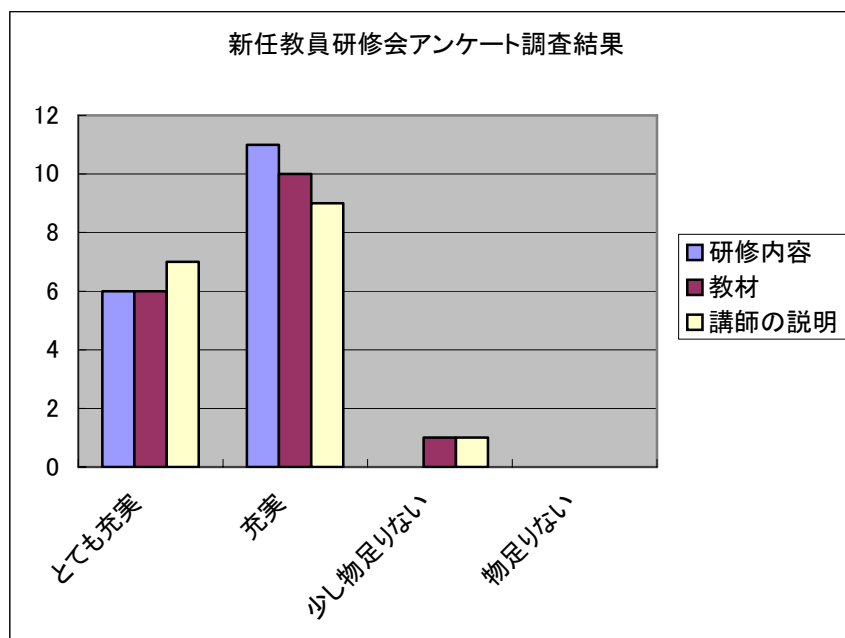
などの意見が多くあった。これらの意見から、本研修会の目的は達成できていると評価できる。

一方で、改善を要する点として以下の項目が上げられた。

①参加者同士のコミュニケーションの時間がもう少しあるとありがたい。

②初日の授業がどのようにスタートするのか、そしてそれに必要なものが何かがわかれば、イメージも何を準備するのもよりつかみやすい。教育・授業に関する具体的なレクチャーをしてほしかった。

③短時間でも、学部別・学科別の打ち合わせの時間があればよいと思う。



4. Blackboard@Tamagawa の活用

本学では、平成 10 年度から一部の学部で e ラーニングの取り組みを始め、平成 16 年度 4 月には全学共通の授業支援システム「Blackboard@Tamagawa」の活用が始まった。本システムは、平成 16 年度に開講された授業のうち約 18%で利用され、平成 18 年度春学期には 44.2%に達した。

(1) 活用事例報告

活用事例報告①（出典：e-Education NewsLetter、2006 Vol.2）

工学部メディアネットワーク学科： 水 野 真 准教授

専門科目「プログラミングV」での活用

メディアネットワーク学科では、コンピュータでどのようにして問題が解決されるのかという問題意識を認識した上で、プログラミングを実践的に学習しています。

学生は、MyPC を授業に持参しBlackboard@Tamagawa に掲載した講義資料を見ながら、実習を進めます。Blackboard@Tamagawa のHTML エディタ機能では足りない部分を、パッケージファイルの解除を活用することで、充実した講義資料を掲載する方法をご紹介します。また、水野先生は、画像認識によるロボット自律動作や教育用ロボットの研究グループでも情報共有等幅広くBlackboard@Tamagawa をご活用いただいております。

科目の実施規模とBlackboard の活用

◆ 科目名：プログラミングV

工学部メディアネットワーク学科

専攻科目群選択科目

◆ 授業の概要：メディアネットワーク学科科目で、一年次から行っているプログラミング I（導入必須科目）からプログラミングIV（発展必修科目）の基礎を受けての応用プログラミングである。内容は、プログラミング演習(Java によるweb サーバーおよびiButton でのコントロールを行うことによる組み込み型コンピュータの利用方法など) を学ぶことである。

今まで教わってきた他の講義からの基礎を応用して、IPv6 のプロトコルを用いてのプログラミングでもある。

◆ Blackboard の活用：講義で用いる説明及び設問を全部まとめて掲載し、さらに講義中に起こったソフト的・ハード的なトラブルとその解決法も掲載している。また、自習に必要なと思われる資料も掲載している。一括連絡用にアナウンスも利用している。この講義では用いていないが、他の講義ではテストマネージャ、デジタルドロップボックスなども利用している。

パッケージ機能の活用

Blackboard@Tamagawa 導入以前から講義に用いるテキストはHTML にて書き、ネットワークを用いて講義を行っていた。Blackboard@Tamagawa でもHTML によるコンテンツ作成は出来るのだが、Java アプレットを利用するような高度なことが直接的にはできない。始めは自分のサーバーへのリンクを作るだけという利用形態であったが、項目を作るときのコンテンツの部分で追加アクションとして「ファイルをパッケージ解除する」を選んで、自分で作ったHTML の講義コンテンツをフォルダごと圧縮 (zip 形式) し、添付することによりJava アプレットも利用可能であることが分かり、この方法で利用している(図 1 参照)。

2 コンテンツ

上の情報にファイルを添付することができます。[参照]をクリックして添付するファイルを選択し、このファイルへのリンクの名前を指定します。

ローカルファイルの添付

Content Collection項目へのリンク

ファイルへのリンク名

追加アクション

図1パッケージ機能の活用

文字コード変換ソフト自作

パッケージ解除機能での資料掲載は、Blackboard@Tamagawa のHTML エディタでは表現力不足で、他のツールを使えばもっと自分の書きたいことを主張できると思っている方には、おすすめの方法だと思う。

また、特にこの方法は自分のところで全て作ってからアップロードするので作り忘れが少なくチェックがしやすいと思う。ただ、今回のバージョンアップで表示の文字コードがUTF-8* になったので以前作っておいたS-JISのページをアップロードしたところ全てが文字化けしたのでびっくりした。世の中には文字コード変換ソフトは色々あるようだが、HTML のタグの中まで直してくれるのが見つからなかったの、探すのが面倒なので機能が単純なHTML 文字コード変換ソフトまで作ってしまった。

Blackboard@Tamagawa は教育手段の一つ

対象の学生はノートパソコンを必携化した最初の学生たちである。彼らにとってパソコンは日常化しておりBlackboard@Tamagawa はその一部かもしれないが、

Blackboard@Tamagawa は教育の手段の一つであることを忘れてはいけないだろう。

アナウンス
シラバス
登録情報
連絡
プログラムV
最新の情報に更新
詳細ビュー

プログラミングV 『Javaによる温度計測とそのwebサーバー』

目的 TTN400マイクロノードを用いてネットワークの学習を行う
場所 工学部 324教室
使用機器 Windowsコンピュータ、TTN400マイクロノード、温度センサー、iButton、LANケーブルなど
必要な予備知識

- javaプログラミング
- unixのコマンド(cd, ls, pwd, ps, killなど。)
- MS-DOSのコマンド(cd, dir, gconfg, ping, ftp, telnetなど。)
- クライアント/サーバーの概念
- htmlのタグ

はじめに

最近の電子機器のほとんどはコンピュータ内蔵になっています。コンピュータといえばWindowsを連想する人も多いかと思いますが、現実には人間と直接接点の無いコンピュータも多く存在しています。この講義ではネットワーク上で色々なコントロールが可能なTTN400マイクロノード(以下、TTNと呼ぶ。)を用いて、簡単な温度測定を行い、そのwebサーバーも構築することを目的とします。

レポートについて(簡易レポートと最終レポートの2種類があります。)

簡易レポート

- 各自一日一通出たところまで ma-mizuno@engs.tamagawa.ac.jp に提出のこと。(提出期限:当日のPM11:59まで)
- その日作成した全てのソースをメールの本文にコピーすること。(添付ファイルはNG)これは、最終レポート作成の際のデータ保存の意味も含まれている。
- 簡易レポートは、今日の講義で何を行って何が分かったか、何が分からなかったかを報告する文書のことを言いますから、ソースプログラム以外の部分が重要です。

図2プログラミングV

Blackboard@Tamagawa は、多言語対応のため、文字コードとして UTF-8 を使用。

活用事例報告②（出典：e-Education NewsLetter、2006 Vol.3）

教育学部教育学科： 石 橋 哲 成 教授

教育学部1年次対象の「全人教育論」における活用

「全人教育論」は生前、小原國芳先生が全学の一年生を対象に一人で持たれていた科目です。現在は教育学の専門の先生方が手分けして、6学部の全1年生を対象に講義されています。教育学部1年生（300名）に対しては、教育学部長でもある石橋哲成先生が、自分が全員に対して直接話したいという意向を持たれ、入学直後の第一セメスターにおいて1年生を4つのクラスに分け、4コマの授業を持たれています。現在、「全人教育論」は1単位科目であり、一回の授業時間は50分です。この短い授業時間を有効に生かすために、石橋先生はBlackboard@Tamagawaを活用されています。どのように活用されているのか、紹介いただきます。

科目の実施規模とBlackboardの活用

◆ 科目名：全人教育論

教育学部教育学科・乳幼児発達学科

1年生全員（300名を4クラスに分け実施）

◆ 授業の概要：本学の掲げる教育は「全人教育」ですが、全人教育とはそもそもどのような教育なのか、とりわけ小原國芳先生が主張された全人教育の内容はどのようなものであり、現代社会にあってどのような意義を持つものなのか、また、大学レベルにおいてはどのように実現されるべきものなのかを追求しています。

講義補助資料の掲載

「全人教育論」の授業のために、学生には各自テキストとして『全人教育論』（小原國芳著／玉川大学出版部刊）と『教育とわが生涯 小原國芳』（南日本新聞社刊）の2冊を持ってもらっています。この2冊は、小原國芳の全人教育思想の形成過程、全人教育思想の内容を吟味する時に使用していますが、授業全体の構成からして、これだけでは足りません。そこで講義の補助資料として、以前は毎回授業中にプリントを配布していました。教育学部の学生は一般的に授業の欠席は少ないのですが、やむを得ず休む学生もいます。

そこで講義補助資料をこのBlackboard@Tamagawaに掲載し、必要な学生には各自で見ってもらうことにしました。おかげで、授業に休んだ学生が翌週に「前回のプリントを下さい」と言うこともなくなりましたし、授業では直接取り上げなくても、学生の参考になりそうな資料や文献も載せることによって、興味を持った学生はさらなる追求が可能になったように思います。

ビデオ資料の掲載

Blackboard@Tamagawaには、講義補助資料のプリントだけではなく、ビデオ資料も3本ほど掲載しています。小原國芳先生の全人教育思想は、先生の生き方と深く関わっており、その意味では、先生の「全人教育論」を正しく理解するためには、先生の生涯を知ることがとても重要です。学生たちには5月の連休を使って先に挙げたテキストの一冊、『教育とわが生涯 小原國芳』（南日本新聞社刊）を読んで感想文を書いてもらっていますが、その補いとしてビデオ『新教育の開拓者 小原國芳』を見せるようにしています。本で読んだ場面を動く場面で確認することは、臨場感も伴って理解を深めることになります。

しかし、このビデオは約40 分間かかるものであり、50 分の授業の中で全部放映すれば、授業者が講義できる時間はわずかとなり、学生たちには、いくらいビデオであっても、「この授業はビデオを見て終わった」という悪い印象を残すことになってしまいます。そこで、授業では導入として15 分ほど紹介し、残りの部分は各自で授業が終わったあと、自宅あるいは自習室でBlackboard@Tamagawa を開いて見てもらうことにしています。また、玉川学園の各部における全人教育の実際を見てもらうためには、過去に製作された『玉川学園の教育』のビデオ、生きた小原國芳先生の姿や話しぶりを見てもらうためには、生前先生がNHK教育テレビで対談され放映された『心を育てる』もBlackboard@Tamagawa に掲載しています。このようにBlackboard@Tamagawa は、短い授業時間故に出てくる問題の解消にも役立っています。

今後とも教育学部では

教育学部では、現在いろいろな授業の中で如何に有効にBlackboard@Tamagawa の使用が可能かを、それぞれの先生がそれぞれの立場で考え、実践してくれています。最近、教育実習の事前指導の一環として小学部の授業参観を実施しましたが、急病で後半の質疑に出席できなかった学生に対しては、Blackboard@Tamagawa が役立ちました。

また、現在3年生で来年春の教育実習を控えた学生は、今セメスターに実施される「教育実習事前指導」に毎週出席することが義務付けられています。アメリカのマーシャル大学に留学中の学生には、毎週の事前指導の授業をアメリカで、Blackboard@Tamagawa を通して聴講してもらうことにしました。このことによって、教職希望の学生でも、3年次の秋セメスターに留学が可能となりました。今後とも教育学部では、Blackboard@Tamagawa の有効利用を積極的に考えていきたいと思っています。



全人教育論（ビデオ教材）



教育実習事前指導（ビデオ教材：質疑の様子）

活用事例報告③（出典：e-Education NewsLetter、2006 Vol.4）

芸術学部ビジュアル・アーツ学科教授： 梶 原 新 三 教授

ビジュアル・アーツ学科3年次対象の「ビジュアル・アーツ研究」における活用

「ビジュアル・アーツ研究」は一年次対象「ビジュアル・アーツ概論」の続編として位置づけられ、様々な芸術領域最前線で活躍している講師の方々を招聘するオムニバス講義です。対象となる3年時の学生にとっては今までの「夢」や「漠然としたイメージ」からちょうど将来のキャリアを具体化する時期となります。そのため、学生たちにとっては将来の展望に直結するかもしれない講話内容から、一期一会を逃すまいと、講義終了後に複数学生が個別の質問を行うために、講師を囲むといった風景が定番となっています。毎回、異なる講師を壇上に迎えることから、限られた講演時間、機会といった条件を最大限に活用するために、講師のプロフィール紹介、事前課題（予習）指示と回収、事後の課題指示と回収、講話収録後の、映像のストリーミング配信などに、Blackboard @ Tamagawa を有効に活用しておられる事例を紹介いたします

科目の実施規模とBlackboard の活用

◆ 科目名：ビジュアル・アーツ研究

ビジュアル・アーツ学科 3年全員

◆ 授業の概要：自分の研究をより深め、そして将来の職業の可能性は・・・と、将来について考える3年生。各分野で活躍中の講師から実践を通して語られる講義は様々な芸術活動、その活動を支援する仕事の多様さ、奥行きの高さなどの具体的な話から、その結果、今の自分には何が必要か、何を準備するべきかを考える授業とする。

将来のキャリア形成

芸術学部に学ぶ3年次の学生にとって、将来のキャリアを考え始める節目の時期ともいえるこの時期に講義が設定されている。職業の可能性、将来を考えるというきっかけとなり、側面から支えていける講義になればいいと思う。どのような話をしてもらえるかを必ず事前打合せをし、講師自身の話にくわえ、学生本人が自分自身の「仕事」と重ね合わせて考えるような講演内容となるよう側面的なお願いをしている。事前資料にはその話を聞くための、前提事項について調べる課題が用意されている。このことが、特に各自の主体性を促すきっかけとなっている。

学生にしてみると、その講義が必ずしも期待した通りに進むわけではないが、直接その人物にふれ合い、意見を交わすことができたという体験が、貴重な経験となって生かされているということを実感している。

その意味でも、「世の中には素晴らしい仕事をしている人がいるのだということを、学生に紹介したい」という気持ちで、講師には、様々な芸術領域で活躍している方々を、毎年13人ほどにお願いをしている。講師依頼、講演内容については、大変な作業ではあるが、できる限り毎年違う講師の方を選んでいる。

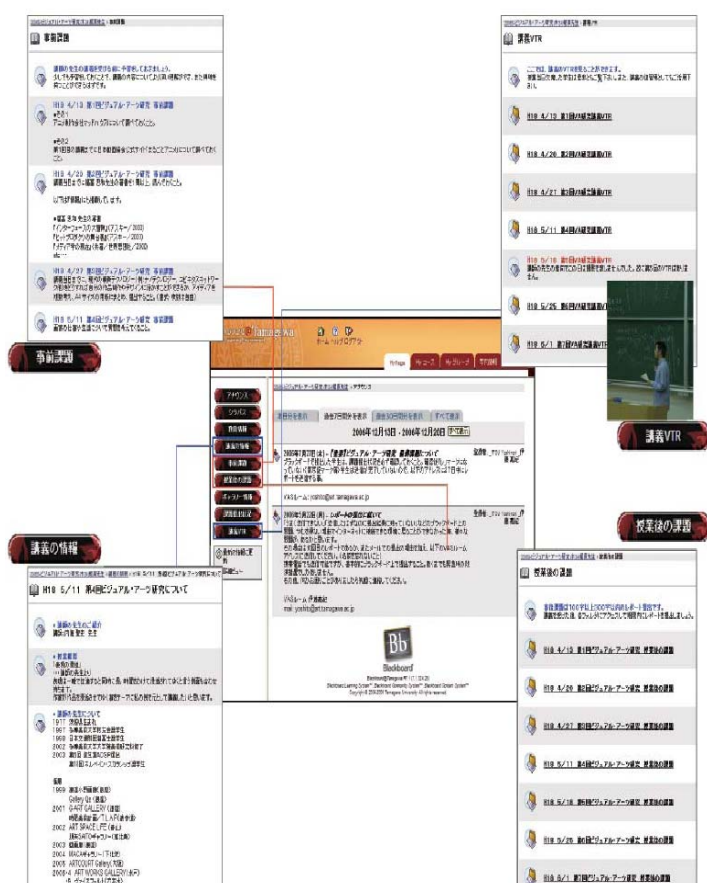
Blackboard@Tamagawa の活用

教室でひとりの講師が講義を行うのは1講義、約100分である。講師と学生がただ一度の出会いチャンスである教室という空間を神聖な場としたいという意気込みがある。そのためには、さまざまな形で雑多な要件で、便利にBlackboardを活用している。その活用サイクルは実際に行われる講義の数週間前から始まり、講義終了後の翌週まで続き、それが13回の授業としてなりたっ

ている。

学生は、「講師のプロフィール紹介」、「事前課題指示」、「事前課題提出」をBlackboard 上で行い、授業に臨む。当日の講話の終了後には「課題指示」、「課題提出」もBlackboard を活用している。学生が提出した課題については、担当者から講師に送られる。また、貴重な講話を聞けなかった学生のために、授業を収録した映像資料がストリーミング形式で自宅などから視聴できるように、掲載もあわせておこなっている。

講師は、それぞれの立場でプロフェッショナルな方が多いが、自らの仕事について話しをする機会さえほとんどない方もいる。まして若い学生を目前にして、学生たちの将来に対する内容を含めた話をする機会は、ほとんどないといっても過言ではない。80分という限られた時間では、とても語り尽くすことができなかったというかたも多い。その場合も必要に応じて、資料などを掲載できるという、限られた時間を有効に補完できるBlackboard の存在が安心感となりありがたい。今後とも感想を述べるだけでなく、疑問点や質問に回答してもらうなどインタラクティブな活用をしていきたい。そのことにより、ますます学生の主体性を即発し、一対一の親和性を多くの受講者が共有し、感性が即発されることになればと期待している。その手段にBlackboard のもつ機能をさらに活用していきたいと考えている。



Ⅲ コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

前年度同様、今年度も春・秋学期においてそれぞれ最終授業にて実施した（一部、科目担当者の都合等により補講・試験期間中に実施）。対象科目はコア科目、コアⅠ・コアⅡ科目の全科目（実験・実技科目を除く）であるが、今年度より学期により対象科目群を限定した。

春学期：全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、社会文化科目群

秋学期：全人教育・FYE 科目群、自然科学科目群、生活関連科目群

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝142 名／153 名（92.8%）

秋学期＝113 名／121 名（93.4%）

実施開講クラス数：春学期＝248 クラス／268 クラス（92.5%）

秋学期＝168 クラス／178 クラス（94.4%）

回答学生数：春学期＝8,814 名／10,676 名（82.6%）

秋学期＝6,232 名／7,753 名（80.4%）

(2) 実施時期

春学期：7 月 8 日（土）～7 月 14 日（金）

秋学期：1 月 6 日（土）～1 月 15 日（月）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がクラスでマークシート用紙を配布、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.94 参照）

2. 集計結果及び公表（p.43～60 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

コア科目群（全体）、全人教育論、全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、言語表現科目群（英語）、言語表現科目群（英語以外の語学）、社会文化科目群、自然科学科目群、生活関連科目群

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記 9 分類についてはその平均値を学内のみを対象にホームページで公表している。

■ 平成 18 年度＜春学期＞

コア・FYE 教育センター

平成18年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

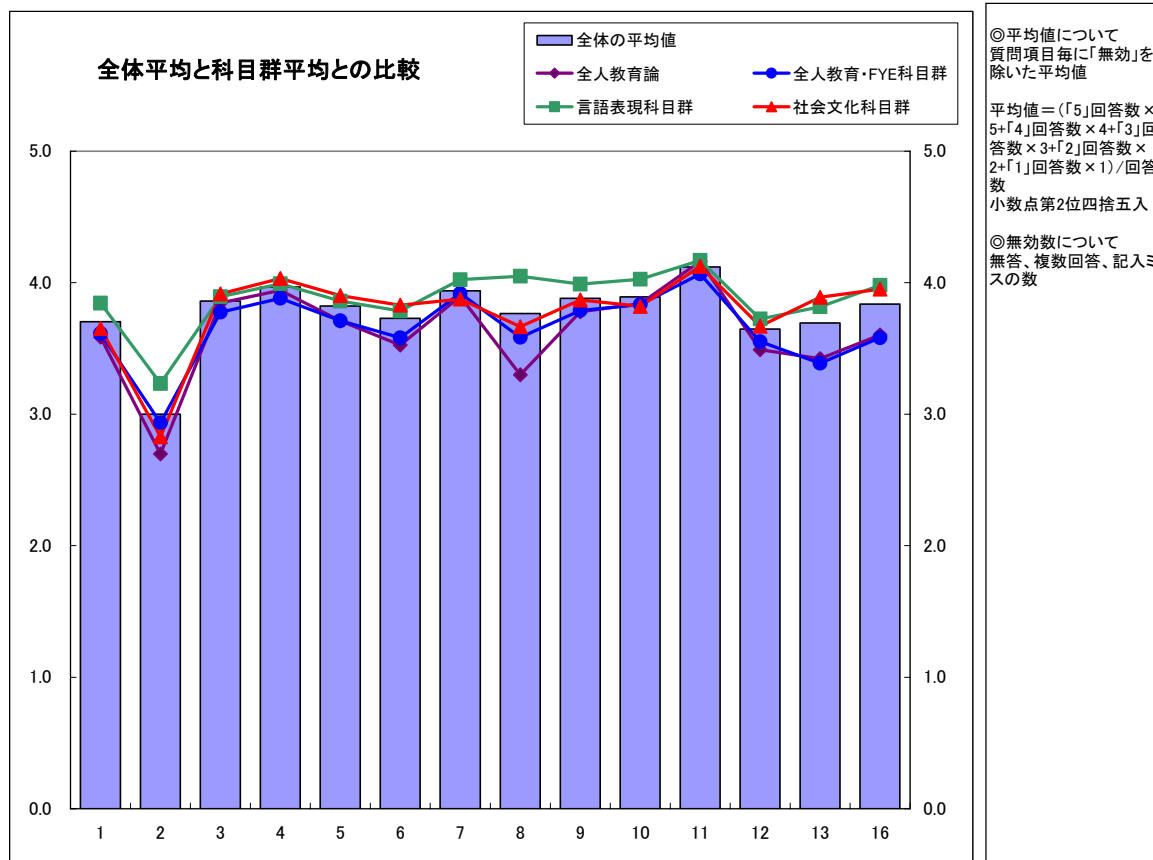
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 8814

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	19.4%	42.3%	29.4%	7.0%	1.9%	15
	2 授業以外によく予習復習した	3.0	8.1%	22.8%	38.7%	21.6%	8.7%	20
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	28.4%	38.3%	26.0%	5.4%	1.9%	23
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	34.0%	36.0%	24.3%	4.2%	1.5%	29
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.8	27.6%	34.7%	31.4%	4.8%	1.4%	43
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.7	27.7%	31.9%	28.9%	8.8%	2.7%	35
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	38.6%	29.6%	22.1%	6.9%	2.9%	26
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	30.5%	29.6%	29.0%	7.8%	3.1%	77
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	31.7%	33.4%	28.2%	4.6%	2.0%	25
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	32.8%	33.3%	26.2%	5.6%	2.0%	25
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	43.9%	30.2%	21.5%	2.9%	1.5%	27
	12 授業全体についてよく理解できた	3.6	21.3%	37.4%	29.7%	8.3%	3.4%	45
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.7	28.0%	31.5%	27.2%	8.5%	4.8%	63

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.8	33.5%	30.6%	25.8%	6.1%	3.9%	976



平成18年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

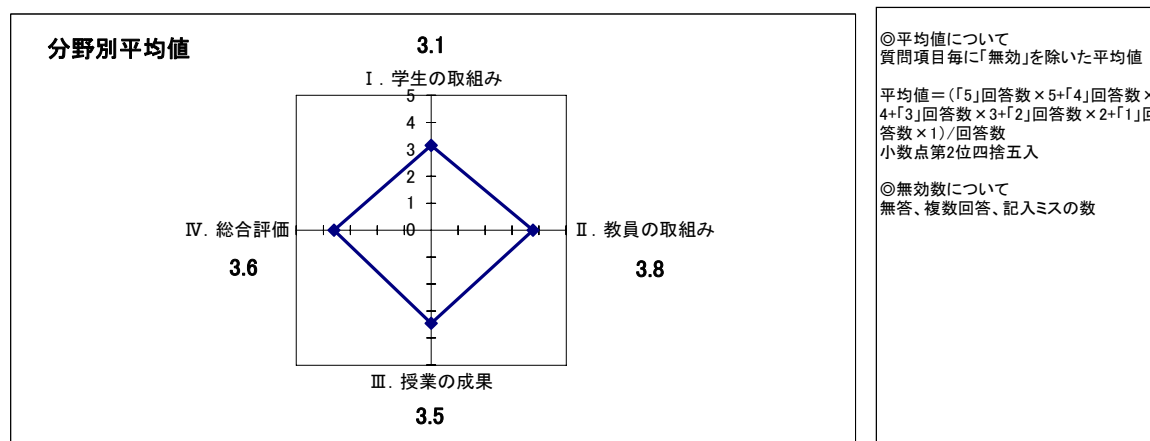
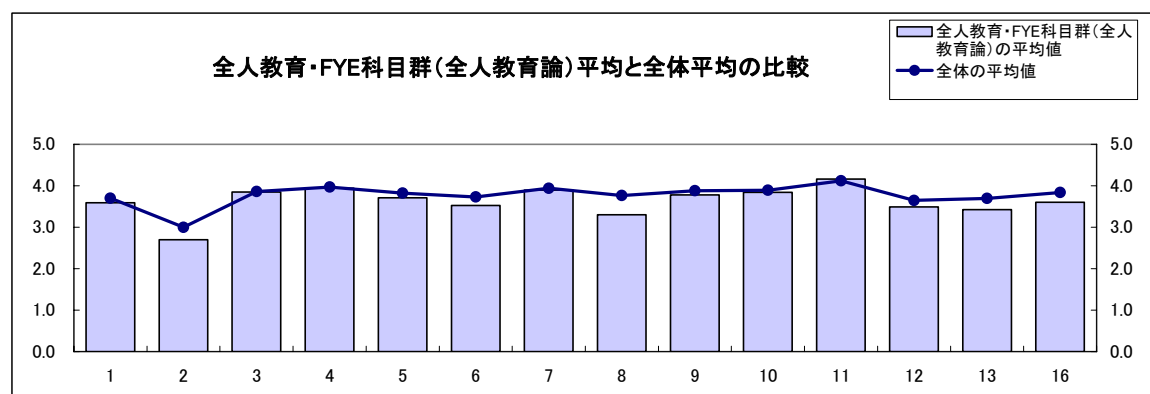
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

回答数(全体): 1484

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.6	17.6%	39.2%	31.7%	7.2%	4.3%	3
	2 授業以外によく予習復習した	2.7	6.4%	14.9%	36.6%	26.2%	15.9%	4
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.8	29.4%	36.2%	26.6%	5.6%	2.3%	2
	4 毎回よく授業の準備がされていた	3.9	33.4%	34.9%	26.0%	3.8%	1.9%	3
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.7	23.4%	33.2%	35.9%	5.8%	1.6%	12
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.5	22.3%	29.5%	30.9%	13.0%	4.3%	4
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	41.1%	26.1%	19.6%	7.6%	5.6%	4
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.3	18.5%	21.6%	39.3%	12.7%	7.9%	59
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.8	29.2%	31.9%	29.6%	6.4%	3.0%	6
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.8	31.8%	32.8%	26.3%	5.9%	3.2%	2
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	49.8%	24.9%	19.5%	3.2%	2.6%	5
	12 授業全体についてよく理解できた	3.5	19.2%	32.7%	31.1%	12.1%	5.0%	10
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.4	21.2%	29.0%	29.3%	11.9%	8.6%	10

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.6	26.9%	27.4%	30.9%	8.7%	6.0%	178



平成18年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

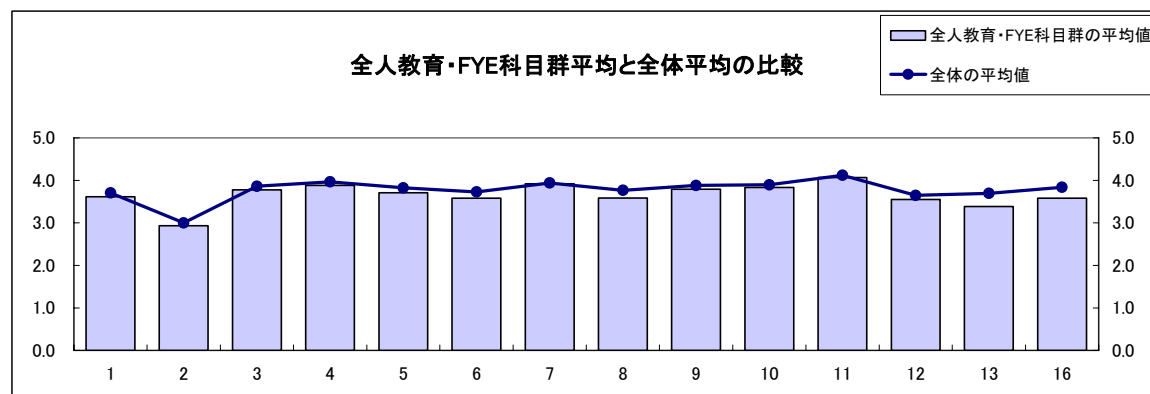
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

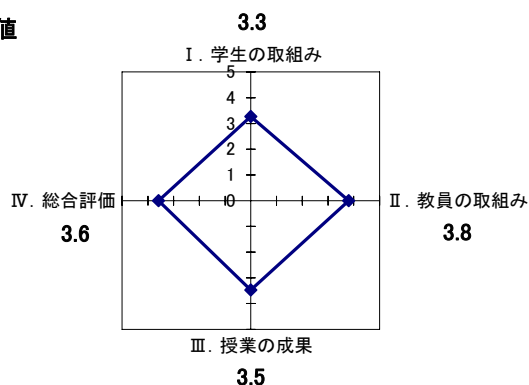
回答数(全体): 2994

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.6	17.5%	39.8%	32.2%	7.6%	2.9%	4
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	8.3%	21.4%	36.9%	22.4%	11.0%	6
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.8	26.0%	36.1%	29.6%	6.1%	2.2%	6
	4 毎回よく授業の準備がされていた	3.9	30.7%	35.3%	27.5%	4.8%	1.8%	6
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.7	24.1%	32.9%	34.4%	7.0%	1.5%	16
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.6	22.2%	31.6%	32.1%	10.6%	3.6%	10
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	38.2%	29.6%	22.0%	6.3%	3.9%	7
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.6	24.5%	27.5%	34.6%	8.9%	4.6%	63
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.8	27.6%	33.7%	30.9%	5.5%	2.3%	12
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.8	30.1%	33.7%	28.3%	5.4%	2.6%	7
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	42.7%	28.8%	23.1%	3.2%	2.2%	11
	12 授業全体についてよく理解できた	3.6	18.9%	35.0%	32.5%	9.5%	4.1%	15
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.4	18.4%	29.1%	33.0%	12.0%	7.6%	21

総合評価	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV 16 この授業を受講してよかったと思う	3.6	25.8%	27.2%	32.4%	8.5%	6.1%	369



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成18年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

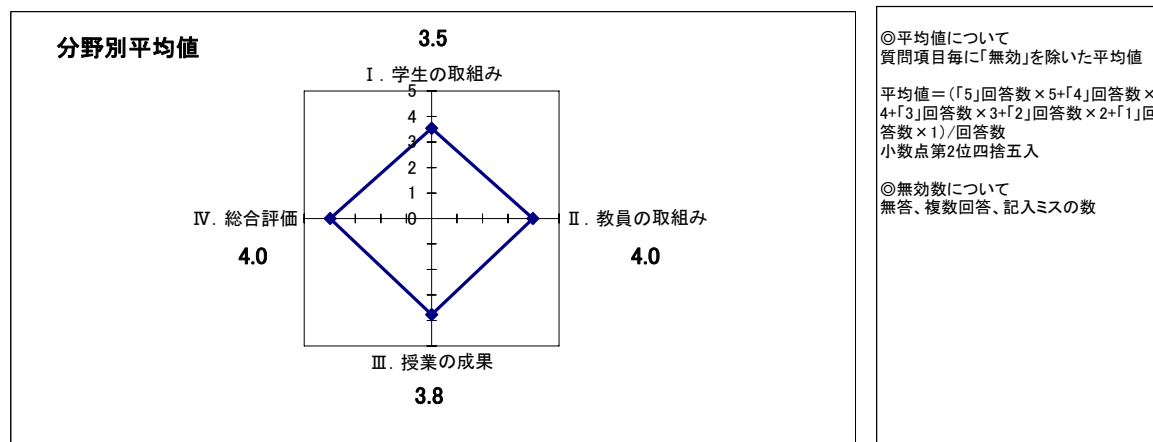
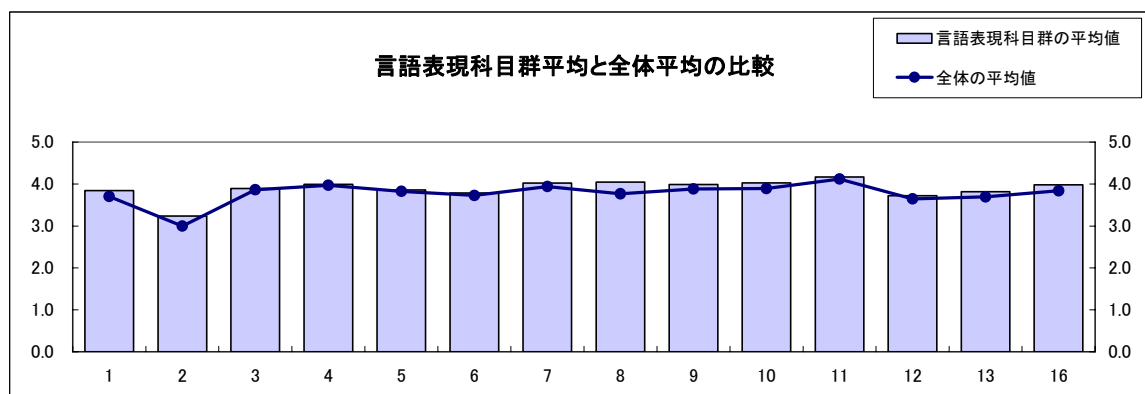
玉川大学

コア科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2928

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	23.6%	45.2%	24.4%	5.5%	1.3%	6
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	10.7%	29.9%	36.6%	17.8%	5.0%	7
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	30.7%	37.5%	24.6%	5.2%	2.1%	12
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	36.2%	34.6%	23.1%	4.5%	1.6%	14
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	30.2%	33.2%	30.9%	3.9%	1.8%	15
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	31.3%	29.9%	27.5%	8.8%	2.6%	16
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	42.5%	28.4%	20.4%	6.3%	2.4%	12
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.0	40.4%	32.4%	20.7%	4.6%	1.9%	10
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	37.2%	32.2%	25.1%	3.4%	2.2%	8
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	39.5%	32.4%	21.5%	4.7%	2.0%	11
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	46.7%	29.5%	19.4%	2.8%	1.6%	10
	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	24.4%	37.6%	27.0%	7.8%	3.2%	15
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.8	32.4%	31.2%	25.9%	6.8%	3.7%	20

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	38.7%	31.3%	22.3%	4.8%	2.9%	280



平成18年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

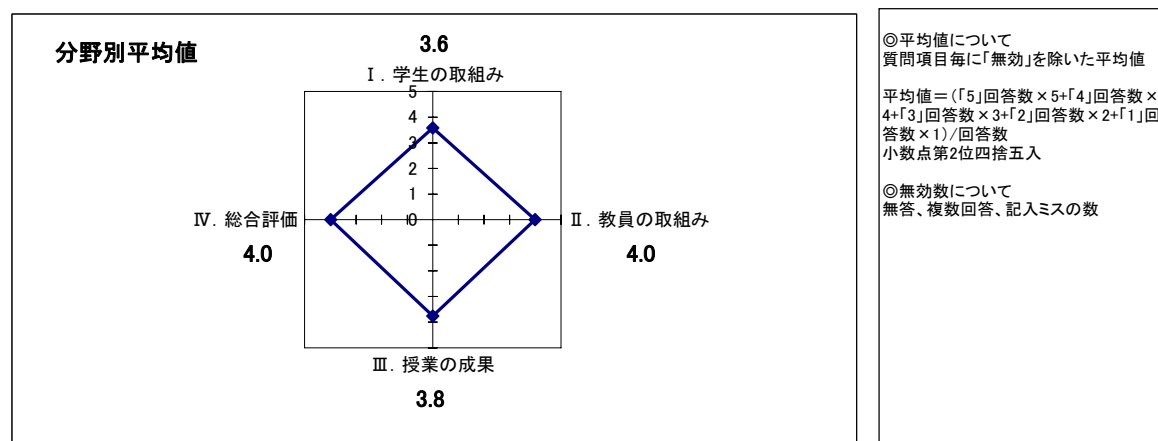
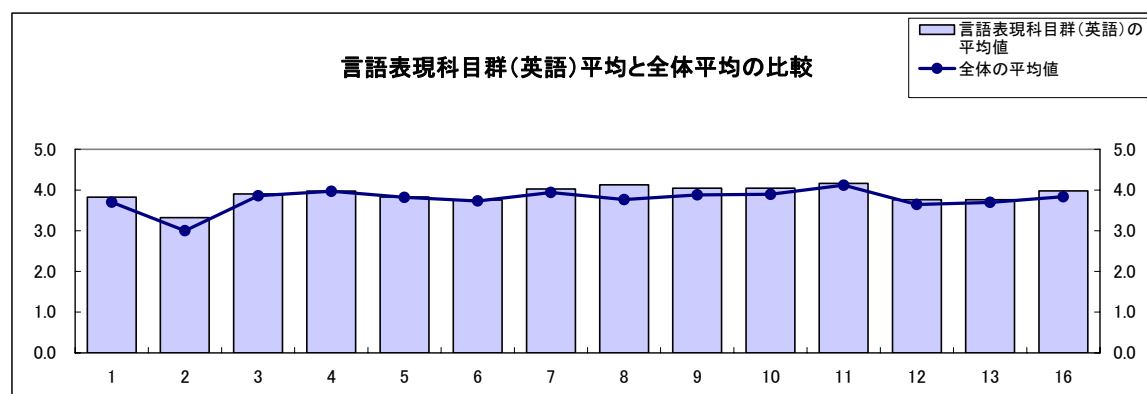
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語

回答数(全体): 1427

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	22.0%	46.9%	24.1%	5.9%	1.1%	2
	2 授業以外によく予習復習した	3.3	11.9%	32.8%	35.2%	15.9%	4.1%	1
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	28.0%	40.8%	26.1%	4.0%	1.1%	4
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	33.0%	37.4%	24.6%	4.2%	0.8%	7
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.8	28.0%	34.0%	32.1%	4.6%	1.3%	4
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	28.2%	31.4%	30.0%	8.6%	1.8%	7
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	39.5%	31.4%	22.2%	5.9%	1.1%	3
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.1	41.3%	35.3%	19.3%	3.4%	0.8%	4
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	37.1%	34.7%	24.8%	2.5%	0.9%	2
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	38.3%	34.9%	21.0%	4.6%	1.2%	2
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	43.8%	32.4%	20.6%	2.6%	0.6%	3
	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	24.3%	38.6%	28.2%	6.7%	2.2%	7
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.8	28.8%	31.6%	29.6%	6.8%	3.2%	8

総合評価	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV 16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	36.4%	33.1%	24.6%	3.9%	2.0%	132



平成18年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

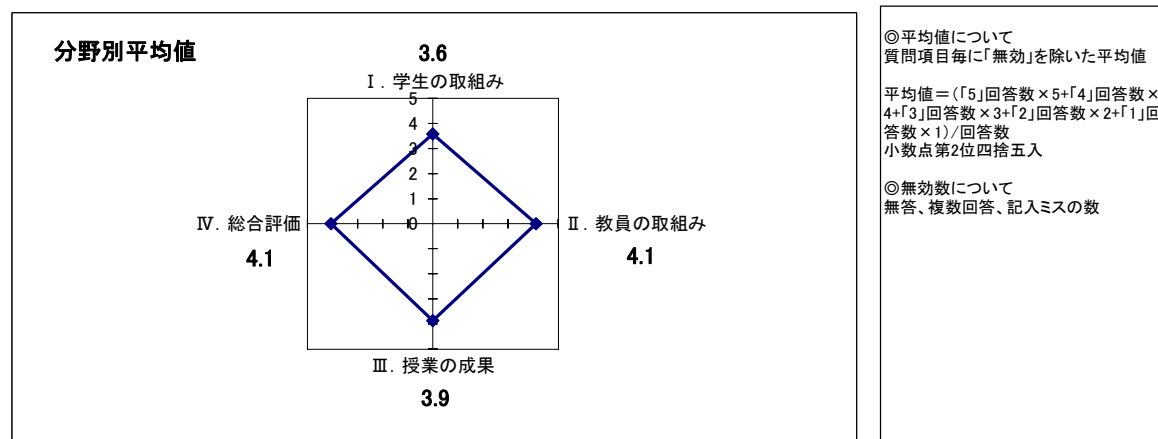
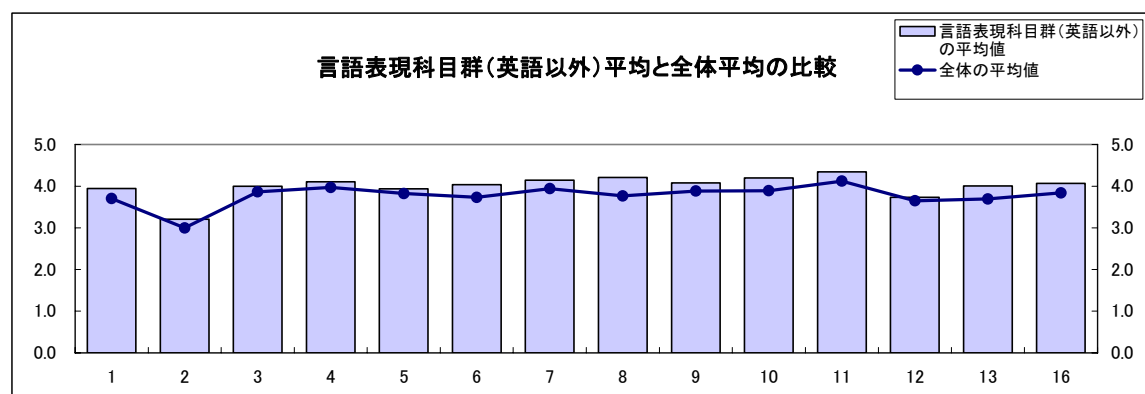
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語以外

回答数(全体): 709

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	28.6%	43.1%	22.9%	4.8%	0.6%	2
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	9.4%	30.9%	35.7%	19.1%	4.8%	4
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	36.5%	36.0%	20.4%	5.1%	2.0%	3
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	42.6%	32.4%	20.1%	3.1%	1.8%	2
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	34.8%	30.3%	30.3%	3.0%	1.7%	5
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	41.5%	31.3%	19.0%	6.3%	2.0%	5
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	51.3%	24.0%	15.2%	6.8%	2.7%	5
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.2	49.3%	28.8%	17.1%	3.0%	1.8%	3
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1	44.0%	28.6%	21.2%	3.5%	2.7%	2
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	48.2%	29.3%	17.6%	4.0%	1.0%	5
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	58.1%	23.1%	15.3%	2.1%	1.4%	3
	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	24.7%	38.9%	24.4%	8.9%	3.1%	4
III	13 授業の内容に興味をもてた	4.0	40.4%	30.3%	21.2%	5.7%	2.4%	6

総合評価	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV 16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	43.3%	30.0%	19.6%	4.2%	2.9%	60



平成18年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

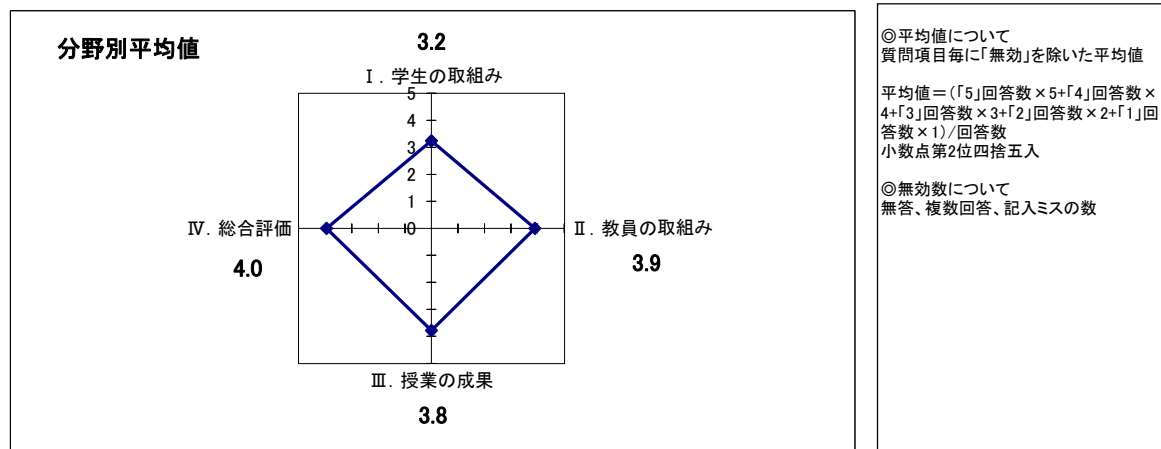
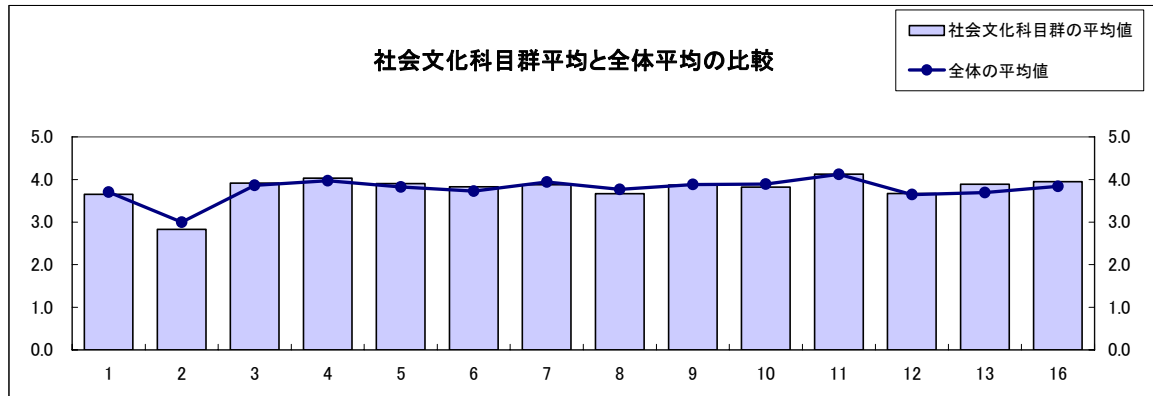
玉川大学

コア科目 社会文化科目群

回答数(全体): 2892

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	17.2%	41.9%	31.5%	7.8%	1.6%	5
	2 授業以外によく予習復習した	2.8	5.4%	17.1%	42.8%	24.6%	10.2%	7
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	28.7%	41.5%	23.6%	4.9%	1.2%	5
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	35.2%	38.2%	22.3%	3.3%	1.0%	9
	5 シラバスによって授業が行われた	3.9	28.6%	38.0%	29.0%	3.5%	0.8%	12
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	29.9%	34.2%	26.9%	7.1%	2.0%	9
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	34.9%	30.7%	23.9%	8.2%	2.4%	7
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.7	26.7%	28.7%	31.9%	9.8%	2.9%	4
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	30.4%	34.3%	28.7%	5.1%	1.6%	5
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.8	29.0%	33.8%	28.8%	6.8%	1.5%	7
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	42.2%	32.3%	22.0%	2.7%	0.8%	6
	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	20.4%	39.5%	29.5%	7.6%	2.9%	15
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.9	33.6%	34.4%	22.5%	6.5%	3.1%	22

総合評価	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV 16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	36.1%	33.4%	22.7%	5.1%	2.7%	327



平成18年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

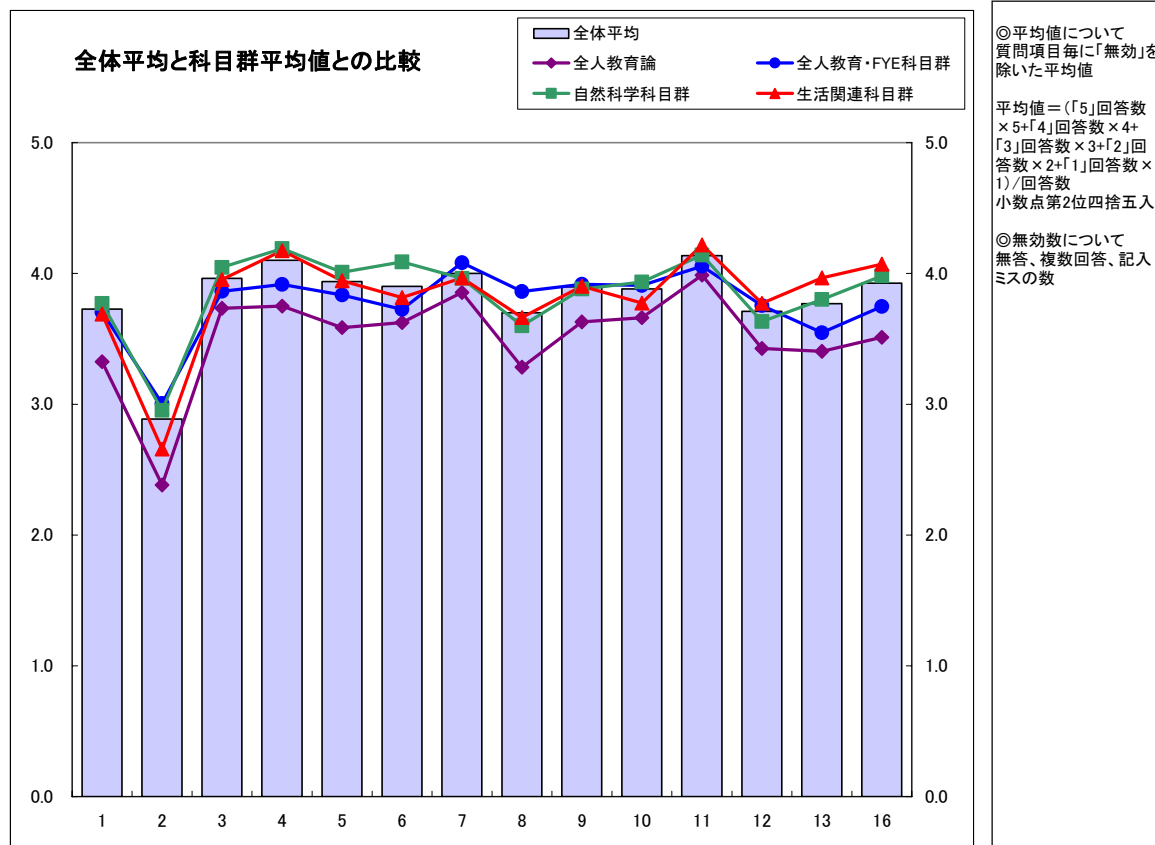
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 6232

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	21.5%	40.8%	28.7%	7.0%	2.1%	16
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	8.3%	18.8%	38.0%	23.2%	11.7%	19
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	32.1%	39.3%	22.5%	4.7%	1.3%	19
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	39.8%	35.6%	20.4%	3.3%	0.9%	22
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	31.5%	36.5%	27.3%	3.5%	1.1%	25
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	33.7%	32.4%	25.9%	6.3%	1.7%	98
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	40.6%	30.0%	20.5%	6.5%	2.3%	21
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.7	27.7%	29.3%	31.2%	9.1%	2.8%	19
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	32.7%	32.6%	28.3%	4.8%	1.7%	22
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	31.4%	34.5%	26.7%	5.7%	1.7%	24
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	43.1%	32.0%	21.4%	2.7%	0.9%	25
	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	23.7%	37.2%	28.7%	7.1%	3.3%	41
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.8	30.3%	32.1%	25.9%	7.4%	4.3%	46

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.9	36.3%	31.9%	23.3%	5.1%	3.4%	634



平成18年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

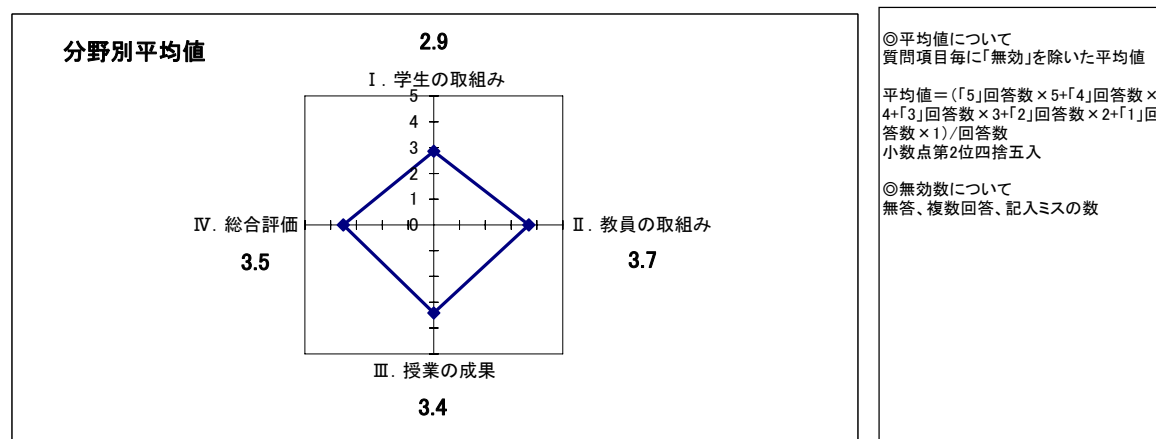
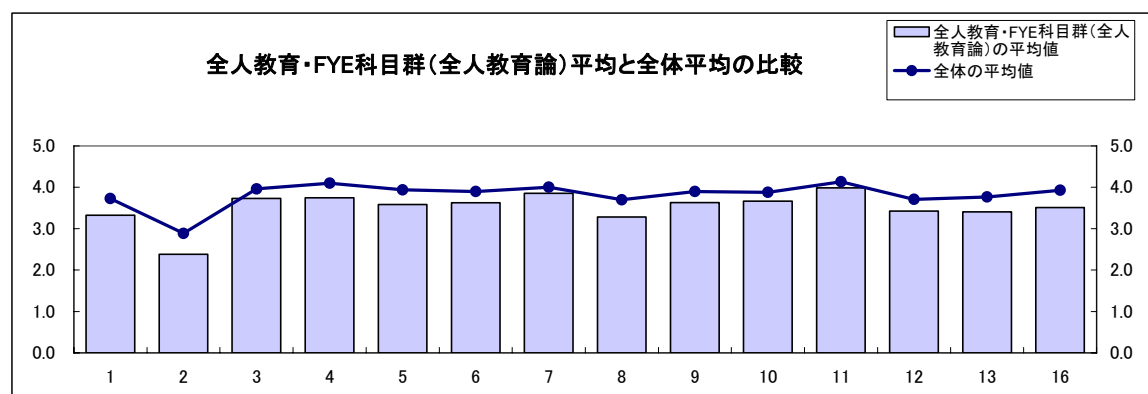
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

回答数(全体): 240

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.3	13.8%	26.7%	43.3%	10.8%	5.4%	0
	2 授業以外によく予習復習した	2.4	3.8%	7.9%	37.9%	23.8%	26.7%	0
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.7	20.8%	39.6%	33.3%	4.6%	1.7%	0
	4 毎回よく授業の準備がされていた	3.8	24.2%	35.0%	33.8%	5.8%	1.3%	0
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.6	17.2%	31.0%	46.9%	3.3%	1.7%	1
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.6	21.3%	28.3%	43.3%	5.8%	1.3%	0
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	40.2%	23.4%	22.6%	9.2%	4.6%	1
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.3	16.3%	20.8%	45.0%	10.8%	7.1%	0
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.6	22.9%	30.8%	35.8%	7.1%	3.3%	0
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.7	21.3%	33.8%	37.5%	5.0%	2.5%	0
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.0	35.0%	34.2%	26.7%	2.9%	1.3%	0
	12 授業全体についてよく理解できた	3.4	16.0%	27.8%	44.3%	6.3%	5.5%	3
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.4	19.8%	26.6%	37.1%	7.2%	9.3%	3

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.5	20.0%	28.4%	40.4%	4.9%	6.2%	15



平成18年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

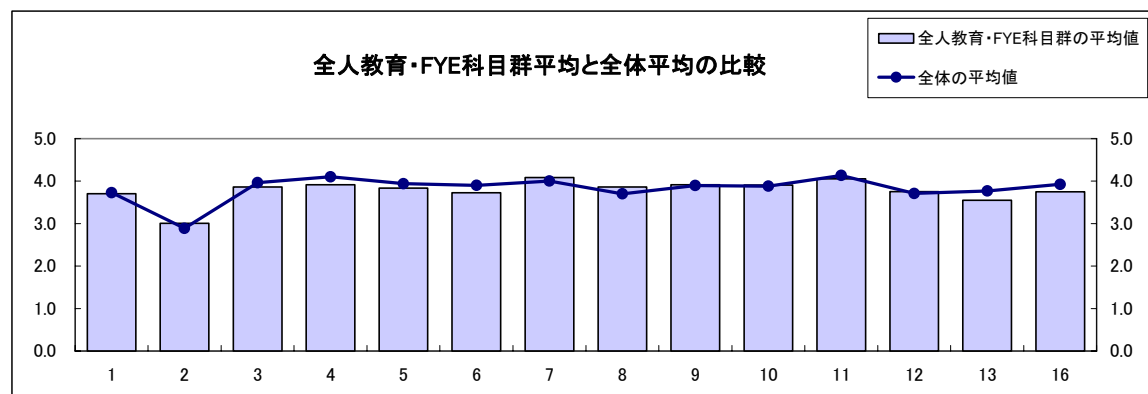
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

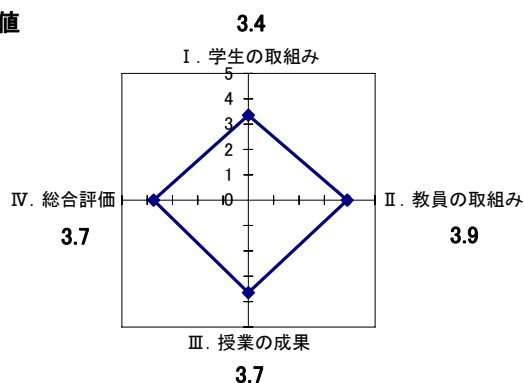
回答数(全体): 1934

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	21.3%	40.0%	29.2%	6.8%	2.7%	3
	2 授業以外によく予習復習した	3.0	10.8%	21.7%	35.7%	21.1%	10.8%	3
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	27.9%	39.2%	25.7%	5.4%	1.7%	5
	4 毎回よく授業の準備がされていた	3.9	32.4%	35.1%	25.8%	5.3%	1.4%	6
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.8	29.2%	33.6%	30.7%	4.8%	1.8%	7
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.7	26.4%	32.2%	31.1%	8.0%	2.2%	7
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	41.9%	32.2%	19.7%	4.4%	1.8%	5
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.9	30.8%	33.9%	27.8%	5.5%	1.9%	1
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	32.2%	34.2%	28.3%	3.8%	1.5%	4
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	31.4%	35.5%	27.3%	4.4%	1.5%	5
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	39.7%	32.4%	23.1%	3.4%	1.5%	4
	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	23.7%	38.1%	30.8%	4.6%	2.8%	12
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.5	22.7%	30.2%	32.4%	8.8%	6.0%	14

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.7	30.5%	29.7%	28.8%	5.9%	5.1%	42



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成18年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

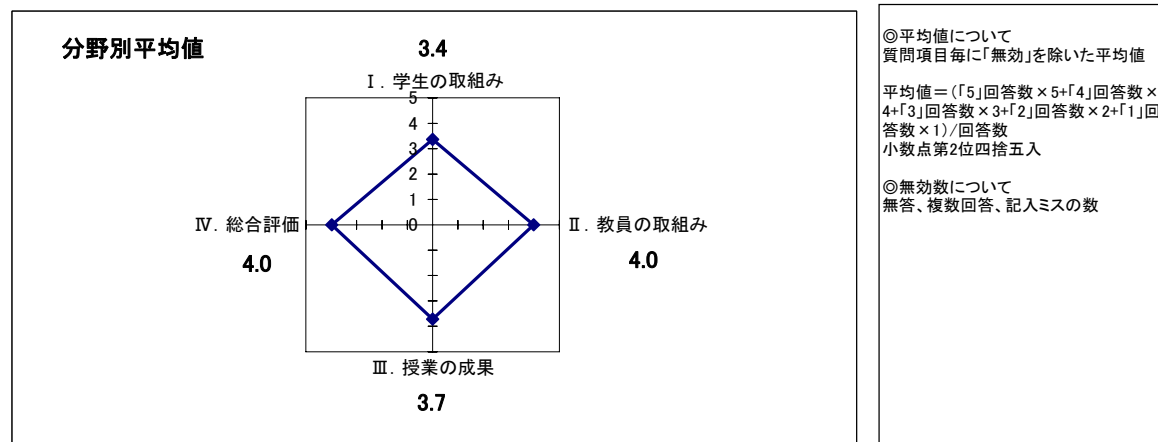
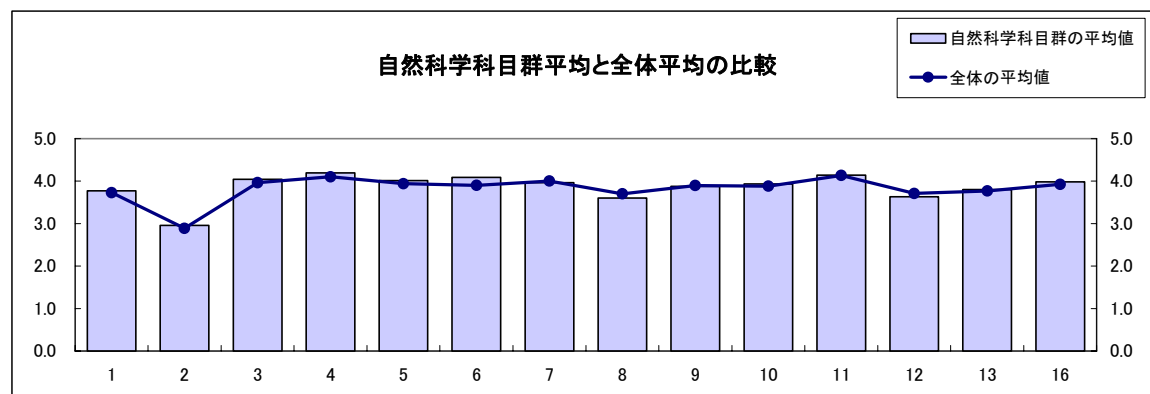
玉川大学

コア科目 自然科学科目群

回答数(全体): 2556

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	22.1%	42.7%	27.0%	6.5%	1.7%	8
	2 授業以外によく予習復習した	3.0	8.7%	19.8%	39.4%	22.3%	9.7%	8
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	35.9%	39.2%	19.5%	4.2%	1.1%	10
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	43.7%	35.8%	17.1%	2.6%	0.8%	6
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	33.9%	37.9%	24.5%	2.9%	0.8%	10
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.1	41.5%	32.7%	20.4%	4.1%	1.3%	11
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	38.1%	31.3%	21.7%	6.5%	2.4%	10
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.6	23.5%	29.4%	33.8%	10.4%	2.9%	9
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	31.4%	33.6%	28.4%	5.0%	1.6%	9
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	33.6%	35.1%	24.3%	5.3%	1.7%	8
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	41.8%	34.3%	20.9%	2.4%	0.7%	8
	12 授業全体についてよく理解できた	3.6	21.3%	37.4%	28.7%	8.5%	4.1%	10
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.8	30.3%	34.7%	24.0%	7.0%	4.1%	14

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	36.9%	35.1%	20.4%	4.5%	3.1%	365



平成18年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

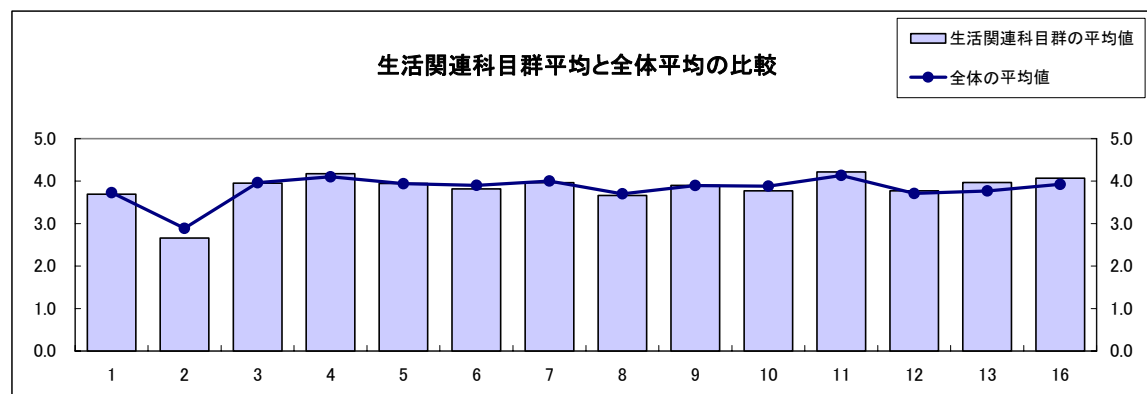
玉川大学

コア科目 生活関連科目群

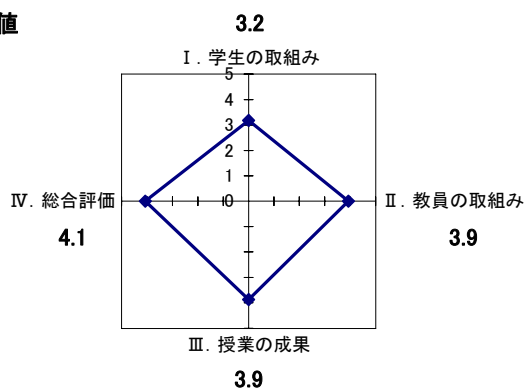
回答数(全体): 1742

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	20.8%	38.9%	30.6%	7.8%	1.9%	5
	2 授業以外によく予習復習した	2.7	5.0%	13.9%	38.6%	26.9%	15.6%	8
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	31.2%	39.6%	23.5%	4.7%	1.0%	4
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	42.3%	35.9%	19.2%	2.1%	0.5%	10
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	30.8%	37.7%	27.5%	3.1%	0.9%	8
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	30.3%	32.2%	28.0%	7.9%	1.6%	80
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	42.9%	25.6%	19.6%	9.0%	2.9%	6
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.7	30.3%	23.9%	31.2%	11.1%	3.5%	9
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	35.1%	29.3%	28.3%	5.4%	1.9%	9
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.8	28.2%	32.4%	29.8%	7.9%	1.8%	11
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	48.8%	28.0%	20.2%	2.3%	0.7%	13
	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	27.3%	35.8%	26.5%	8.0%	2.6%	19
III	13 授業の内容に興味をもてた	4.0	38.8%	30.6%	21.7%	6.3%	2.6%	18

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	42.8%	29.9%	20.6%	5.1%	1.7%	227



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

参 考 資 料

参考資料 1. 大学FD講演会「大学教育と学生の質の保証」

絹川 正吉 先生

(平成 18 年 4 月 1 日、玉川学園講堂での講演全文採録・掲載)

出典：学内ノート「新年度に向けて」

F D 活動は教員自らの自発的な行動として行われなければその効果は期待できない。また、組織的・継続的な活動でなければ F D 本来の意味にならない。したがって、この F D 活動は教員個々に浸透することが重要であり、さらなる推進を図るために大学 F D 講演会を開催している。特に繁忙なこの時期の開催にもかかわらず、講演を快諾していただいた絹川正吉先生に感謝の意を表するものである。

以下にその講演内容を全文掲載する。

はじめに

本日はお招きをいただきまして大変光栄に存じております。経歴にありますように、現在、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」、「特色 G P」と略称していますが、その運営に携わっています。実施委員会において学長の小原芳明先生には大変ご尽力をいただいておりますので、そのお礼の気持ちも込めましてお伺いさせていただいたわけであります。

個人的なことを申しますと、甥がこちらの農学部出身でありまして、いろいろと関心を持っておりました。

与えられた課題

さて、今日与えられた課題の 1 番目は履修登録における上限単位の適切性、2 番目は成績評価の厳格化と学習到達度の検証、G P A の使い方、3 番目は教育活動に対する成果の検証ということで、大変具体的な宿題をいただきました。

ただ今、小原先生からお話がございましたように、大学を卒業したということの証は何か、別な言葉で言いますと、私どもの教育の質の評価の問題です。教育の質の評価は大変難しい。特色 G P の審査においても、そのことについては非常に多くの議論があります。私は一つの考えを申し上げたいと思いますので、いろいろとご異論があろうかと思いますが、ご参考にしていただければありがたいと思います。

ご造詣の深い先生方には、私のアマチュアのような話などお聞きになる必要はないかと思うのですが、身内の話は聞かないけれども他人の話は聞くということがあるようでございますので、そういう意味では多少お役に立たせていただけるかもしれません。

学生は湯呑み？

いきなり、スライドに「学生は湯呑み？」と変なことが書いてあります。「日本では学生は教室

でじっと座っている。先生は土瓶から水を注ぐように、上から知識を注ぎ込む。場合によっては受け入れるものが一杯になってもまだ注ぎ込む。日本の学生は湯呑みのように扱われている（イールズ）。」とスライドに書いてあります。このことばの出典は、玉川大学の出版部から最近出ました『戦後日本の高等教育改革政策』（土持ゲーリー法一著）という本です。同書には、詳細に戦後の新しい学制の発足に関する歴史的経緯が述べられています。イールズという人は、占領軍のC I E（民間情報教育局）のメンバーです。若い方には馴染みがないと思いますが、私どもの年代ですとC I Eと言えばすぐわかるわけでありまして、イールズと言いますと反共宣伝で一世を風靡した人物です。イールズの評価というのは非常に難しく、レッドパージなどをした点についてはネガティブな評価ですが、他面、日本の高等教育の展開にとっては非常に重要なことを言っていた人物です。

このイールズが「学生は湯呑みか」ということを言ったわけです。また「学生の口にジョウゴをあてがうことは、考える力を養う方法ではない。」というデバイ（ノーベル化学賞受賞者、コーネル大学教授）の言葉も紹介されています。

日本の高等教育の現在のテーマは何であるか。いろいろありましようけれども、一言で言いますと、大学教育は学生に課題探究能力を育成することだということを何度も中央教育審議会、あるいは大学審議会の答申の中でうたっているわけでありまして。言われるまでもなく、大学というところは課題探究能力の育成をするところであると思うわけですが、では私どもの現実の営みが課題探究能力の育成に貢献しているか。課題探究能力の育成は湯呑みでは達成できないわけでありまして、後で申しますけれども、具体的に言いますと、ただ講義をしているだけでは達成できないということです。

そういう課題に対する一つの小道具といえますか、インフラとして単位制度、G P A制度等々があるわけでありまして、単位制、G P A制というものが機能しているか、していないかということが問われるわけです。機能しているならば課題探究能力の育成に貢献するということになるのではないのでしょうか。

G P A制度・成績の評価

玉川大学もG P A制度を導入しておられまして、関連資料を拝見しました。I C Uは創立以来ですから、60年前にG P A制度を導入して、いわば当たり前のこととして今日までやってきています。多少記号が違っていて、グレードの表記が玉川大学の場合にはS・A・B・C・Fとなっていますが、I C Uの場合にはA・B・C・D・Eです。ただしG P、グレードポイントは4・3・2・1・0で同じであります。ここが5・4・3・2・1となっているところもあるようであります。ちょっとややこしいところがありますが、I C Uでの経験を基にお話ししますので、本学の場合に翻訳してお考えいただければありがたいと思います。

I C Uの場合の特徴は、Iというグレードがあることです。Iはインコンプリート。インコンプリートは病気等により、課業が未完了である場合、例えば試験が病気で受けられなかったという場合に、学生はインコンプリートの申請をします。インコンプリートの申請をしますと手数料を取られます。随分みみっちい話ですが、学生は手続きを取って、正式に後から試験をしてもらう権利を確保する。Wというグレードがありまして、これは登録取消、ウィズドローということ

ですが、ウィズドローは不可抗力の場合に限って認める。それ以外は一切登録の取消は認めない。そういう登録制、あるいは単位制度等々の運用を厳しくしめないと、単位制度、GPA制度というのは意味を持たないわけです。GPAというのは単位数を重みとする評点の平均値であることは、本学と同じです。

政策課題としてのGPA

今、GPA制度を文部科学省は普及させることを心掛けているようでありまして、いわば文部科学省の政策の一つです。はじまりは「21 世紀答申」です。1999 年の大学審議会の答申の中で厳格な成績評価とGPAという問題が出ておりまして、GPAを使って厳格な成績評価をすることによって大学の社会に対する信用度を増せというような意味のことが書かれました。大学審議会の言い方には問題があります。厳格な成績評価ということとGPAということは直接的には関係ありません。ですから、そこはおかしいと思うのですが、いずれにしてもGPA制度というものを日本の大学に定着させるということを文部科学省は政策の一つにしているわけです。

最近の文部科学省の調査では概ね順調に進捗していると書いてありますが、実態はそうでもありません。シラバスとか授業評価は、今、日本の大学が形だけであってもほとんど導入しています。90%以上の大学がそういうことをしていますが、GPA制度はまだ遅れているようです。国立大学では法人化に伴って、中期目標に基づく中期計画を文部科学省に出さなければいけないということで、多くの大学がこの中期計画の中にGPA制度の導入ということを書いています。ある大学から、実はこの4月からGPA制度を導入すると中期計画に書いたけれども、まだ何も準備はできてないので何か教えてほしいという声が掛かりまして、私が伺ったことがあります。GPA制度はなぜかあまり進展しない。その大学でお話をして、質疑のときに私は叱られました。ある教授からGPA制度というのは相対評価である。いまは相対評価の時代ではない。自分は絶対評価を非常に大事にしているので、GPA制度などとてもないというようなお叱りをいただいたわけです。何かGPA制度という問題と日本の伝統的な大学人の気概といいますか、心情といいますか、そういうものと絡まっているような感じがします。それが理由かどうかわかりませんが、GPA制度はまだあまり進捗していません。

書類で拝見いたしますと、玉川大学のGPA制度は先進的レベルだと私は思います。今、紹介したような大学から比べますと、随分先進的です。しかし失礼ですけれども、問題がある。ICUのGPA制度にも非常に大きな問題があります。その問題に気付いてなかったということであり、両者を比較検討するということは、意味があるのではないかと思うわけです。

単位制度

GPAの基本になっているのは単位制度でありまして、ご承知のように単位というのは学習の達成を認定する指標です。後でもう少し詳しく申しますが、1単位というのは45時間の学習量とされています。45時間とする根拠はどこから来たかということ、1週間の労働時間なのです。45時間の内訳は15時間のクラス授業と、クラス外で30時間の自己学習、合わせて45時間の学習量を1単位とするというわけです。単位制度が意味を持つのは、科目選択制という基礎構造の上です。これからの学士課程教育というのは、そういう科目選択の幅をどこまで広げるかというの

が一つのテーマになってきています。そういう意味では学士課程教育のインフラであるわけです。

結論を言いますと、単位制度が実質的に機能しているかどうかということで、その大学の教育の質ということがある意味では計られてくると思うのです。先ほど言いましたイールズは、単位制度の導入ということに非常に大きな力を発揮しました。戦後の学制改革は、占領軍の指導によって導入されたと言われております。しかし、先ほど紹介した土持さんの本では日本の高等教育政策は占領軍の指導ではなかったといっています。実は当時の東京帝国大学の総長であった南原繁氏が言い出したことだとして、通説と反対のことが書いてあります。いずれにしても単位制度というのが旧制大学と新制大学を区別する一つの象徴的なコンセプトです。単位制度がうまくいっていないということは、言ってみれば新制大学がうまくいかないということになるわけです。

土持さんの指摘の中で非常に大事な点は、単位制度というのは適切な授業法により機能するものであるとしていることです。例えば、授業法が帝国大学のように講義一辺倒のところでは単位制度というのは機能しない。すなわち大学の質は保てないということです。ですから、単位制度を考えるとすることは、実は授業法の改善を考えることだというのが土持さんの一つの主張でして、私はこの説に同感であり、常々そういうことを申し上げてきました。

先ほどの問題に戻りますが、学習量を学習時間で計るとというのが単位制度の意味でありまして、1週間の労働時間は労働基準法で1日8時間です。金曜日まで働くと5日間ですから5倍する。そして土曜日は5時間働く。昔は土曜日も働いたわけです。8時間×5で40、5時間足して45時間。すなわち1週間の労働時間が1単位の学習量として、単位制度というのは設定されています。最近では少し崩れておりますけれども、そもそもの大学設置基準では、先ほど申しましたように15時間のクラスワーク、プラス、クラス外での30時間で1単位としています。ですから、クラス外での30時間をきちんと学習させているかということが大きな問題になるわけです。そうしますと、45時間、1週間で1単位とすれば1セメスターが15週でありますから、15単位がぎりぎりの単位習得量だということになります。卒業学習量は15単位×2期×4学年で120単位になります。現在の設置基準では124単位が卒業基準になっておりますけれども、大体1セメスター15単位でフルワークだというのが単位制の考え方です。ですから、冗談であります、120単位以上学生に履修を要求するということ、あるいは履修を認めるということは労働基準法違反だということになるわけです。

問題の所在

問題の所在は、ただいま申しましたように、1単位というものが日本の大学のほとんどの場合には15時間の授業だけで終わっていることにあります。それ以上の勉強は学生の自主性に任せているところが問題点です。1セメスターで20単位以上履修が可能だということが問題で、15単位以上取ったならば勉強が追いつかなくて単位を落としてしまうことが起こる。そのように授業、あるいは教育活動が進行していないということが問題です。日本の場合には授業を1時間やって、そして1単位ということになりますと、結局、設置基準上から見ますと、単位の水増しが行われていることになります。1単位について30時間の自学自習が必要になるような授業運営をしてないことが問題です。ですから、今日、問題になります単位の上限制度、キャップ制というのは、

学生を遊ばせる制度だと揶揄されることになるわけです。

特色G Pの応募事例にも、この問題に関係するものがありました。ある教員養成系の大学で、教員養成のために教育実習に非常に力を入れている。力を入れているということは教育実習等々に関わる単位数が別に加わるわけです。トータルで卒業に必要な単位数は150単位ぐらいになる。そのぐらい熱心に教員養成をしているのだというのが、その大学のご主張でした。この事例は審査委員会で問題になりました。150単位取らせるということでよいのか、議論がありました。卒業に必要な単位数の総数としては、120ないし124で適切なわけです。124単位ですら学生の作業量としては多すぎるのに、学生は悠々と150単位取れる、ということが問題です。

単位認定要件

カーネギー財団の高等教育に関する調査の中に、単位の認定要件に関わるデータがあります。日本の国立と私立と、それからアメリカの私立を取り出して書きました。単位を認定するために授業に出席することを要求するか、しないかということについて、日本の場合は、国立大学が51%、私立大学が73%ですが、アメリカは率が高くて84%の大学（私立大学）は授業出席を単位認定の要件にしている。それからレポートを何回課すか。複数回課しているかというわけですが、日本の国立大学が26%、私立大学が35%でアメリカは52%です。さらに、討論への参加を単位認定の要件にするということについては、日本の国立大学の場合は13%、大体討論をしてないわけですから、このデータはおかしいのかもしれませんが、13%です。私立大学ですと15%です。アメリカでは75%。すなわち討論型の授業運営というのがほぼ当たり前だということになっているわけです。

それから日本の場合に学期末に1回試験をして成績をつけておしまいというのがよくあるわけですが、そういう試験1回だけというのが国立大学で43%、非常に多いですね。私立大学ではさすがに少なくても26%ですが、アメリカの場合にはほとんどない。試験が1回限りというのはほとんどあり得ない。試験1回限りで成績をつけたら何が起こるかということ、学生から猛烈なクレームが来ます。それだけで評価されちゃ困るというわけです。日本と逆ですね。日本の場合には試験1回で楽だからいいやと思うわけですが、アメリカの場合はそうじゃないですね。試験1回というのはほとんどない。試験2回以上が80%ですから、ほとんどの大学では必ず学期中に同一科目において試験を2回以上する。その間にレポートも複数回課す。そういうような授業の運営をして単位を認定しているわけです。そういうところに日本の大学の問題が出ているわけですね。

G P AはI C Uの文化

I C Uの話をするのは失礼かと思いますが、私の経験はI C Uだけですので、I C Uのことを通して考えさせていただきます。

I C UではG P Aというのは文化です。文化というのは司馬遼太郎によりますと、生活集團のクセのようなものだということです。生活に密着しているわけです。I C Uは半世紀、G P Aの経験を持っておりますが、いわばそれが生活の一部になっています。学生ことばの中にも単位制、G P A制を反映した言葉がたくさん出てきます。「Bアバ」という言葉があります。これは後でちょっと申しますが、学生にとっては非常に重要なことで、Bアバレージ（B 平均）のことを指し

ます。「リピート」というのがあります。リピートというのは、例えばある数学の科目で評点が2であった。その学生は2では大学院進学に足りないので3に改めたい、改善したいというときに、同一科目をもう1回履修する。再履修で前回より成績が上がれば、過去の古い成績が入れ代わって新しい成績になる。いい成績が取れるわけですね。そういう制度を利用することを「リピート」といいます。それから「ローグレ」というのがあります。学生はローグレ、ローグレと言うのですが、これも後で触れますが、成績不良になった場合のことです。「ペティション」というのがあります。いろいろな履修制限があります。例えば単位上制限も一つの制限です。そういう制限を例外的に排除することを訴えます。そのことを「ペティション」を出す、というのです。例外を認めてほしいということで、学生は学部長に訴えてペティエディションをいっぱい出すわけです。学部長は学期初めは大変でして、何十とくるペティションに対応しなければならない。これは不許可、これは許可するというような具合です。大変な作業ですが、そういう「ペティション」という言葉があります。学生の生活の中にGPAというのはしみ込んでいるわけでありまして、教員も当然このGPAなくしては授業運営、あるいは教育指導ができないという形になっています。

ですから、GPAというのはただGPA制度を導入したというだけでは意味がないわけでありまして、それがどう運用されているか、あるいは生活の中に根づいているかということが一番重要なところですね。そういうGPAを機能させる仕組みが単位制度であり、科目登録制度であり、アドバイザー制度であるわけです。科目登録制度というよりも、むしろ科目選択制度ですね。科目選択というような場面がありませんと、GPAは機能しないわけです。

受講単位上限（キャップ）制度

本学でも問題になっていますキャップ制度、単位の登録の上限というのは、実は大学設置基準で決まっています。

「大学は、学生が各年次にわたって適切に授業科目を履修するため、卒業の要件として学生が習得すべき単位数について、学生が1年間、または1学期に履修科目として登録することができる単位数の上限を定めるよう努めなければならない。優れた成績をもって習得した学生については、上限を越えて履修科目の登録を認めることができる（大学設置基準 27-2）。」

この条項は努力義務ですが、努力義務であっても設置基準であるには違いないわけです。いずれにしても、履修科目登録の上限というものは設置基準でありますから、上限を整えてなければ、それこそ文部科学省に許認可事項を持って行ったときに問われることになるわけです。

このことが実は問題でして、なぜ大学設置基準で言わなければ日本ではそういうことができないのか。履修科目登録の上限を必然的に設けざるを得ないという状況がないから規定でもってやってくるわけですね。あべこべなわけです。ICUの場合は3学期制でありますから、各学期の標準履修単位数は13単位。13単位でも毎学期13単位取りますと、卒業までに146単位修得できることになります。ICUは136単位が卒業要件になっていますので、10単位ほどオーバーします。卒業間近になりまして卒論の時期になりますと、ルーティンワークは終わっていて、あとは卒論だけというような条件に持っていきますから、124単位をクリアするためには毎学期13単位標準で大体適切であると経験的に考えています。

標準単位以上の履修というのは、設置基準にうたわれる前からICUは実行していますが、設置

基準にありますように許可制です。許可の仕方、仕組みがあります。最近 I C U もどんどん崩れておりまして、私は大変遺憾に思っているのですが、古い制度では、G P A が 3 以上、グレードで言いますと私どもでは B 以上（玉川大学で言いますと A 以上）ですね、G P A が B 以上でないと標準以上の履修登録は認めないというのが I C U の履修規則です。学生が「B アバ」に強い関心を持つのはそのためです。ただ、最低履修単位制度は I C U では実施していません。これは一つの問題点です。

先ほどから申しておりますように、日本の大学におけるキャップ制は能力のある学生を遊ばせる制度である。アメリカの大学におけるキャップ制というのは、能力がある学生は上限以上履修して 3 年で卒業する。大学院に飛び級する。キャップ制がなくても上限以上の履修が不可能になるような授業の内容と質、それが問われるということです。

評価 D（玉大の C）の意味

そういう視点に立ったときに、評価 D の意味がでてきます。玉川大学では評価 C ですね。評価 C の場合、評点 1 の場合です。D または玉川大学の C の場合は、当該科目を履修したことの認定はされるけれども、いわば一応の合格であります。どういう意味で D というのを導入したか。いろんな説がありますが、一つは上位のところが玉川大学は S と A でありますから、I C U の場合は A、B ですが、上位の細分化に対応して下位も細分化して D が出てくるのだという考え方もあります。あるいは 1 科目不合格、即卒業延期という事態を救済するという意味があるのだといいます。これは単位制度ではなく学科目制の場合です。この科目を取らなければ卒業できないという仕組みになっている場合には、こういうようなことは意味があるのかもしれませんが、これには私は賛成しません。

いずれにしても評価 D の位置づけが問題です。そここのところの取扱いが問題であるわけです。すなわち、すべての科目が D 評価、玉川大学の C 評価で卒業させるかということです。すれすれの成績、学科目を履修したことをかろうじて認めることができる、そのレベルで学生を卒業させるのかという、そういう問題です。すなわち、ミニマムリクワイアメントということになります。卒業時の G P A が例えば 2 以上でなければ、卒業させないということでないという意味がない。質の保証にならない。そういう仕組みの中で評価 D、あるいは玉川大学の評価 C ということが位置づけられることになります。

履修指導～ミニマムリクワイアメントを満たすために～

そういう単位制度の運用においては、科目登録制度というものがどのぐらい厳格に行われるかということで意味は変わってきます。あるいは意味がなくなってしまう。I C U の場合には、科目登録というのは非常に重要な学期始めの行事でありまして、科目登録日、学期の一番最初の日には全教員がオフィスに待機して指導を受け持っている学生、アドバイザーと言いますが、アドバイザー 1 人ひとりと面接をして、この新しい学期の履修をどうするかということを協議し、相談に乗って、そして学生が自主的に履修科目を決定していく。そういう作業をします。ですから、科目登録日には全学の教員が大学に来る珍しい日です。普段は全教員が揃うようなことはあまりありません。登録日は全学がちよっとお祭りのような騒ぎになります。

受講科目の登録については、教員は履修の助言はしますが、あくまでも学生の責任で登録させる。学生の履修責任を明確にしています。登録変更は玉川大学もそうだと思いますが、学期開始から2週間以内、登録変更可能期限以後は一切変更できない。厳格にそのことを実行する。登録外の科目は受講しても無効である。よく登録しないで受講して試験も受けて、だから単位認めろという要求がありますが、これはダメだというわけです。最終試験直前に取り消しを認める大学がある。ある国立大学に非常勤で行きましたときに、学年末の最終週のときに学生が赤い紙を持ってくるのです。赤い紙を見ましたら、「科目登録取り消し票」と書いてあるのです。私は大変びっくりしまして、こんなばかげたものは受け取れないと言って全部学生に投げ返したら学生が困ってしまいまして、教務課に訴えた。これは大学の制度だということです。教務係が飛んできて「先生、何とかしてください」と言っておりましてけれども、私は「試験の直前になって登録取り消しというのは敵前逃亡だから銃殺だ」と物騒なことを言いました。そういう仕組みでは学生の自己責任を果たさせないことになります。あくまでも学生に履修登録をするのは自分の責任。最後までやり通させる、そういう仕組みでなければいけないわけです。絶対にそういうことは認めないという毅然とした態度を取らなければ、科目登録制度、そしてGPA制度というのは機能しないのです。

先ほど申しましたように、学期開始日にICUでは科目登録をしますが、そこで学生に来させる一つの知恵といいますか、仕組みがあります。それはアドバイザー、教員を通して前学期までの成績の一覧表を学生に渡すことです。その成績の一覧表をもらわないと次学期登録する科目が決まらないわけですから、どうしてもアドバイザーに会わざるを得ないというわけです。そしてアドバイザーがその成績表を見ながら学生と相談して、来学期はどうしようということを考えるわけです。

私は教員のときに、学生に1年次の終わりごろには4年間でどういうふうに勉強していくか、自分でプランを立てさせ、卒業までの暫定的履修予定表を作らせました。それを根拠にして毎学期調整しながら学生の履修指導をしていました。科目登録の調整ということをアドバイザーと協議して行う。あくまでもアドバイザーは助言者の立場で最終的には学生の責任で登録させる。あるときに私のアドバイザーが学生結婚をして、子供ができた。妊娠しているのにフルワークやるというのですね。13単位以上取るというわけです。私はそれは無理だ、せめて半分ぐらいにしろということを非常に強く言ったのですが、学生はどうしても言うことを聞かない。子供を持ったということが理由になって、自分の学業が停滞するということは自分の誇りが許さなかったのでしょうね。絶対やるというわけです。私は「じゃあ勝手にやりなさい。あなたの責任だ」とさじを投げたわけですが、1学期が終わりましたら、何と彼女の成績はBアバ、Bアバレッジですから非常に優秀なわけです。私はびっくりして、どうやってBアバを取れたのかと思ったら、子供を育てたのは自分じゃなくてお母さん、おばあさんだったのですね。そして自分は学業に専念できたというわけでありますから、私は啞然としたわけであります。いずれにしても、学生の自己責任を徹底させることが大事です。

成績表はカルテ

さて、成績表は、それまでの履修登録科目全体の記録です。毎学期毎に、登録科目名、単位数、

グレードが記載され、毎学期毎のG P Aが記入されます。成績表の最後には、それまでの登録科目全体のG P Aが記載されます。1 段ごとに学期の記録になっています。ある学生の場合ですが、1 年の1 学期のG P Aが 2.73 とありますから、まずまずの成績ですね。B アバというのは3 でありますから、3 以上なければ優秀じゃないわけで、これは平均的です。1 年の3 学期に 2.73 あったので、1 年のときには一生懸命勉強したんですね。ところが、2 年の第 1 学期には 1.69 に下がっている。2 年の秋学期になると 1.45 ともっと下がる。そして冬学期になると 0.92、1 未満でこれがローグレーダーですね。こういうのを見ますと、成績表は学生のいわば学習に対するカルテのような役割を持っているわけです。下がってきていることが一目瞭然で分かりますから、その理由を学生に問わざるを得ない。学生は言いたくない場合が随分多いわけではありますが、そのところをあまり根掘り葉掘り聞きますと、これは人権侵害になりますからできませんけれど、それなりの節度を持ちながら、なぜ下がったかということと一緒に考える。あるいは学生に考えさせる。

成績不良除籍制度

成績不良除籍制度、ローグレーダーシステムができたのは 1960 年ですから、創設より 5、6 年遅れて導入しました。アメリカではローグレーダーシステムというのは当然行われていたわけですけれども、I C U がなぜ 1960 年になってローグレーダー制度を導入したかということには、次のようなエピソードがありました。I C U では学生運動が非常に激しくて、創設まもなく学生紛争が起こっております。1960 年代には大変な学生紛争が起こりまして、本館バリケード封鎖という校舎のバリケード封鎖が、日本で一番初めに行われたのが I C U でした。大変不名誉な記録を持っているわけです。そこで当時のアドミニストレーターは、学生が盛んに学生運動ができるのは勉強してないからだと考えた。そこで勉強させるためにローグレーダーシステムを入れた。勉強しなければ成績が悪くなる、そして成績が悪くなったら退学である。という制度を導入すれば学生紛争は収まるだろうという予測に基づいてローグレーダー制度を導入したという伝説があるわけです。ローグレーダー制度を導入することによって学生運動は鎮静化したかという、ますます盛んになりました。

これはブラックユーモアに近いわけではありますが、いずれにしても初めの制度は 3 学期連続、（後に、もしくは通算 4 学期）G P A が 1.5 未満の場合には除籍、すなわち D 評価、すべての科目が 1 だったら、これはローグレーダーになるわけですね。それが 3 学期続いたら除籍というわけですから、ただ科目を通過したという形では卒業させないということだったわけです。そういうミニマムリクワイアメントという意味合いも持っていたわけです。正直言いまして、あまりそういうことを私どもは意識しないでやっていました。

現在は、ここが問題ですが、1.5 ではなくて 1 になっています。1 未満が 3 学期連続、もしくは通算 4 学期は除籍というように最近の学部長が変えてしまったのです。私は、これは反対だったんですが、皆さんは賛成するので教授会は通ってしまったわけですが、これは間違いですね。

さて、1 回目の成績不良になりますと、先ほどの成績表の一番右下のところに、ウォーニングが出ています。「あなたはローグレードで、あと 2 回続けたら除籍」だと、自動的にウォーニングが出るわけです。1 回目の成績不良警告が出ますと、アドバイザーと相談して何が原因かを考え

ます。学生と一緒に考える。そして履修登録を調整します。卒業延期になってもきちんと勉強するというのが大事ですから、少なめに登録させる、というようなことをします。2回目の成績不良が続きますと、保護者に通知し、アドバイザーが指導報告書というのを学部長に出します。

「成績不良者報告」という様式ができています。なぜ学生がこういう成績不良に陥ったかというのをアドバイザーが記入しなければいけないことになっています。成績の経過、家族と経済状況、健康状況、課外活動の状況などを記入するようになっています。演劇活動に熱中していて成績不良というのはよくあります。アドバイザーとしての対応を書いて学部長に提出するという仕組みになっています。

そういう報告書を出して、もう1回、連続して3学期目も成績不良だった場合には、今度はアドバイザーと学生は同道で学部長の前に出頭しなければなりません。教員と一緒に成績不良の学生に付き添って学部長の前に出て、なぜ成績不良であるかを説明する。つまり成績不良を改善する余地があるのかどうかということを学部長に判断させるために出ていくわけです。いわば学部長から面詰されるわけですね。気持ちのいいものではありません。ICUの場合の成績不良制度というのは、除籍をしないための制度だと私は言っています。3学期制度で機能する常時ケア・システムの下で、除籍しないための除籍制度というのが有効性を持つ。通年制ではあまり意味がないのではないかという考えです。しかし、これはちょっと問題ですね。除籍をしないための制度でよいのか。それだけでは、ミニмумリクワイアメントという意味が薄れてきます。

ミニмумリクワイアメント

キャップ制の本来の意味とは何か、考えておく必要があります。ミニмумリクワイアメントというのは何であるか。ミニмумリクワイアメントというのは、その大学の卒業生の質保証です。どういうふうな質保証をするか、それをGPAで表現する。それがミニмумリクワイアメントです。学生の質の保証は、各学期の履修単位数及びGPAがミニмум以上であることによって表現されます。たくさん単位を取っているということは質保証にならないですね。150単位取れているということは質保証ではないわけです。成績がある一定以上なければダメだ。

アメリカのあるカレッジでは、玉川大学のように最低履修単位制がありまして、各学期10単位以上履修して、GPAが2以上を要求しています。厳しいのは卒業時のGPAが2.0以上なければいけない。2以上なければ卒業させないというのです。そこで、この大学の場合の特徴は救済制度にあります。卒業時にGPAが2以上なければダメだということになりますと、2年次でもってどのぐらい条件を満たしてないといけないうか。GPAが1.6以上なければ、卒業の見込みがなくなる。3年次における最低GPAも決まってきます。卒業の見込みがないと学生は自発的にやめるわけです。そこで、救済制度が登場します。すなわち評点が2以上の科目だけ認めて、いわば精算をさせ、改めて学生に履修をする機会を与えるという救済措置を講じます。いずれにしても、ミニмумリクワイアメントとしてGPAが2以上というのは、一流のアメリカのリベラルカレッジでは普通のことのようです。科目を合格したということだけでは卒業させないので

ICUの誤り

I C Uでは3年終了時に卒業論文に取りかかる資格として、G P Aが 1.5 以上ということを課したわけです。そうしますと 1.5 以上を満たさない学生が続出する。続出しますと、いろいろな条件をつけてとりあえず卒業論文の登録を認める。卒業論文ができませんと卒業できません。そこで救済をする。例えば次の学期にBアバ以上を取るということを条件に、とりあえず卒論登録を4月に認めるというようにします。そういう異例の措置を学部長が認める、そういう慣習ができてしまった。あまりにもそれが多くなったために、あるときの学部長が今後はG P A1.5 以上というのをやめると言ったわけですね。ローグレーダーのシステムもいろいろな例外状況を認めるという慣習ができてしまったものですから、G P A1.5 未満というのを1未満ということにしてしまったのです。1未満ということは、1であれば全部卒業できちゃうわけですから、ミニマムリクワイアメントを満たさない。ミニマムリクワイアメントの条件が崩れてしまうわけです。そういう誤りをI C Uは犯している。

玉川大学の場合には、学習継続条件が各セメスター履修登録単位数の 65%以上を修得するという条件ですが、G P Aの条件はついていないようですね。その学習継続条件を満たさないことが3回続くと退学だというわけですが、失礼ですけど、これはどういう意味であるのかわかりません。卒業させるための親切心なのかもしれないですね。

G P A制度の効用

G P Aの効用についてのエピソードがあります。I C Uが一番初めに直面した問題は、いかにして、卒業生の質を社会に認知させるかということでした。I C Uがバイリンガルで教育をしたために、1期生の相当数がアメリカの大学院に進学した。アメリカの大学院に進学する場合、リコメンデーションレターは非常に重要な根拠になります。そしてリコメンデーションレターを書くときに、G P Aの信頼性ということが問題になったのです。I C Uは無名の大学でありましたから、アメリカの大学院にI C Uのクオリティの高さをきちんと提示する必要があった。そこで当時の副学長が本学におけるG P A制度の運用はこうであるという説明文を推薦状に添付しました。すなわち第一にI C Uは非常に競争率の高い大学であって、高校卒業生の 10%以内でないと入学できないということ。そのぐらいクオリティの高い学生を相手に全学G P Aは 2.6 であること。そういう状況下でグレードA、B、Cの分布はこうなっていること。これだけ厳しいG P Aの運用をしている中で、この学生のG P Aは 3.5 であるから、いかにこの学生が優秀であるかわかるであろう、という説得の仕方でもリコメンデーションレターを書いたわけですね。それで続々とアメリカの大学院に入学したという経緯がありました。

アメリカでG P Aというのはどういうふうに使われているか。これは桜美林大学副学長の諸星さん（彼はI C Uの卒業生）が言っていることですが、G P Aが 3.0 以上あると自動車保険が割引になるというのですね。G P Aが高いと事故率が下がるということらしいのですが、日本の場合にはどうでしょうか。企業の採用判断にG P Aがちゃんと使われているであろうか。日本の社会でこれから日本の大学のG P Aをどこまで信用して使うか、いろいろ問題があります。

G P Aを使うことの一つの意味といいますか、意義は、やはりG P A制度を通して教員集団における評価の標準化を図るということ、評価の非等質性への対応ですね。そして、教員集団に教育の共同性を自覚させる。学生に成績を与えるのは、その教員個人の営みではなくて、大学全体

のシステムの中で行うことである。それがその大学のクオリティにつながっていることを自覚させる。教育の共同性ということ自覚させる作用がある。教育の共同性という視点は今回の特色G P の評価の留意点として非常に大事な点になっています。そして言うまでもありませんが、学生の自己学習支援契機をG P A制度は与えるということになるわけです。

評価の等質性

G P A制度を本質的に機能させようということになりますと、評価そのものの問題が起こってきます。楽勝コースもハードコースも全部一律にG P Aの中で隠れてしまうといえますか、一律に扱われている。それでいいのかという問題が起こってくるわけです。良いか悪いかはいろいろ議論がありますけれども、慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスではA、玉川大学で言うとSですね、Aは20%以上つけてはならないという制限を設けているそうです。最近これはどうも崩れているようであります。

それからもう一つは授業運営の等質性、先ほど言いました単位を与えるための必要条件というものが標準化されていないと、G P Aというのはバラバラになってしまいますから、そういうところにも留意しないとイケない。試験評価の等質性ということも問題になります。成績評価の主観性ということはどうやって私どもはクリアするのか。一つの例でありますけれども、ここに出ているデータは、1枚の英語の試験答案を100人近くの大学の教員が採点したものです。同一答案に対する評価が、大きく分散した。評点がほとんど正規分布のように分布したのです。90何点つける先生があつたかと思うと、同じ答案に対して60点ぐらいの点をつける先生もいる。このぐらい成績評価には主観性というのがあるのだという実験結果が報告されています。これは極端な例かもしれません。私は専門が数学ですが、数学の成績評価は簡単だろうと思うかもしれませんが、とんでもないわけでありまして、随分バラツキがあります。

そういう主観性を克服して、大学全体の中で、いわば公平な評価をしなければG P Aというのは意味がないわけでありまして、どうするかということですね。どこかで共同の営みとしてG P Aの調整が行われなければいけない。I C Uの場合には、学部長は1年に1回、G P Aの実態を表にして、教授会で報告をしています。一般教育の場合に、Aを与えている科目数、Bを与えている科目数の割合等を公示しています。そして、全学のG P Aも報告されている。一般教育は全学のG P Aが3.33というのだから相当甘いわけですね。その次は学科別です。人文科ですが、人文科ですと2.64ですから、大体平均ですが、社会科学科は2.8。社会科学系というのは甘いんですね。人文系と理系は辛いのです。大体これは全国的な傾向のようです。こういうような統計表を作りまして注意を喚起しています。昔は学務副学長から全教員の成績評価一覧が出て、科目ごとに、甘すぎるところには赤ラインがついて配られました。何かそういう仕組みを考えませんかG P Aの意味が、ただ形だけになってしまうわけです。

厳格な成績評価

先ほど申しましたように、「21世紀答申」で厳格な成績評価の要求がありました。それに伴いG P A制が推奨されました。なぜ推奨されたか。G P Aの推奨というのは、裏を返せば日本の大学教育への不信の表現であるわけです。大学が社会から信用されていないことを言っている

に過ぎないわけであります。一つの格言ですが、「誰も学んでもいないのに教えたというなら、誰も買ってもいないのに売ったというのと同じだ」と。これはジョン・デューイが言った言葉です。売ってないのに「売った、売った」と言ったら、その店はつぶれます。ところが大学は平気でそういうことをやっているんじゃないかというわけですね。そして、「評価される者には決定的な影響を及ぼすが、評価する者には何の影響も及ぼさない。」ローグレーダーに学生になるということは、教員にとっては何の痛みにもならないということでもいいのかということです。本来、評価というのは、教えたことと学んだこととのズレを認識することです。そこに査定という要素が入りますので、複雑になるわけです。

単位制度の意味

単位制度というのは学習量によって、いわば標準化をしているわけです。標準化することを通して、アメリカの場合ですと、大学間移動を可能にする。A大学で取った単位を持って、B大学に編入学するというのが単位制度を通して可能になるわけです。日本ではまだそれはできませんが、少なくとも学部間移動ということは、いま日本の大学でも必須の問題です。学生の発達段階を考えますと、学部間移動ということは認めざるを得ない。それを認めるときに単位制度ということが大学全体として共通のスタンダードで確立してなければなりません。そういう意味でも単位制度の充実ということは、これからの大学にとって必須のことになるわけです。そのためにはGPA制度が全学的に同じ考えで行われていなければならない。

大学の質保証

さて、与えられた課題の一つに教育の質の問題がありました。教育成果の検証というのができるのか、ということです。私はこれに対してははっきりした答えがありません。特色GPにおきましても教育成果の検証ということは、評価の留意点に入っていますが、どの大学もそれがきちんとできていません。まだその方法は確立していない。私はその方法はないのではないかと悲観的な考えを持っています。それを克服する手段を考えなければいけないわけです。よく到達目標を設定し、それによってどこまで到達目標が達成されたかで教育成果が検証されるというのですが、実は到達目標というのも極めて相対的です。絶対的な到達目標というのはいないわけですから、到達目標は極めて相対的です。知識、技能の習得量というのは、例えば資格試験のような場合には検証可能かもしれませんが、教育の成果というのは技能ではない。あるいは知識量ではないわけです。そうしますと、そういう能力の評価というのはどうやってやるのか。教育成果の直接評価というのは不可能なので、いわばそれを取り巻くシステム、外形を評価することを通して評価するというのが、現在における大学評価の一つのあり方です。これはひとつ問題です。いずれにしても絶対評価というのは、言葉は非常に悪いですが、妄想ではないかと思います。こういうことを言いますと、大学の教授の方から叱られますが。

玉川大学は私立大学協会に所属されています。私立大学協会は今回、「日本高等教育評価機構」を設置し、認証評価は主としてそこで行うということになりました。この高等教育評価機構の評価基準をところどころ見ました。例えばこう書いてあります。「学士課程及び大学院課程において教育機能を十分に発揮させるための取り組みがなされているか。」ここはまだいいですね。「授業

を行う学生数の現況が、教育研究活動を行うために適切に管理されているか。」これはクラスサイズを問題にしているわけで、大事なことはありません。クラスサイズが適切であるか、というようなシステム的なことを評価基準として挙げているわけです。そういうシステム的なことでもって質評価ができるのか。評価機構の評価基準は基準認定では意味を持つかもしれませんが、質保証にはならないのではないかと私は思います。ちょっと失礼な言い方をしていますが、大学基準協会の評価も同じですね。ですから、システム評価を越えて、質そのものの評価にどうやって迫るかということが大きな問題です。認証評価というのは本来、基準認定です。最低基準だけではそれぞれの大学の存続はこれからは難しいということは言うまでもありません。システム評価を越える質評価をどうするかということは大問題です。

リベラルアーツ基準

アメリカでは、どういう大学評価をしているのか。一つの例ですが、アメリカにリベラルアーツ・カレッジだけを対象とした基準協会があります。大学基準協会のようなもので、**American Academy for Liberal Education**、**AAL E**と言っていますが、その基準認定を**ICU**は先だって受けまして、一応合格いたしました。その**AAL E**の評価基準はどういうものであるかということを見ますと、日本の場合の、例えば大学基準協会、あるいは高等教育評価機構の基準とは質が違うのです。一番初めに出てくる基準は何かというと、「効果的推論教育」（理論整然と考え抜く能力の育成）を実施しているかということです。そしてクリティカル・シンキングをさせているか、ということを見るのです。何を見るかというと、授業です。**AAL E**の審査では、まず大学のほうから自己評価報告書を提出します。その自己評価報告書を見て基準協会のほうから審査員が直接大学にやってきて、1週間程度滞在します。基準委員は任意に大学の中を見回って、学生に会い、教員に会い、スタッフにも会い、教室も覗くという形で実況検分して、そして審査報告書を書くわけです。

ICUの場合にはこう書かれました。**ELP**という英語教育プログラムがあります。英語教育プログラムが**ICU**の一つの特長です。「英語を学ぶのではない。英語で学ぶのだ」という標語を立てた教育プログラムですが、そういうプログラムとか、社会科学セミナーとか、卒業研究は効果的推論教育の内実を満たしている、という評価をしてくれました。それからインタラクティブなクラス運営、双方向的なクラス運営に学生が慣れている。例えばということかということ、必ず質問があります。学生から次々と、教員がしゃべっている間でも、すぐ質問の手があがります。そういう状況をおそらく観察したのでしょう。インタラクティブなクラス運営に学生が慣れている、と評価されました。教員が慣れているかどうかはわからないけれど、学生が慣れている。しかし、効果的推論能力の実践という課題は、卒業研究以外はすべての学生に対応しているわけではない。これは批判です。卒業研究では確かにそういう能力の育成、例えばセミナー等を通してやっているけれども、全学的体制として不十分ではないかということでした。学生に効果的推論能力を育成する、そういう全体像を提示していない。大学全体でこういう取り組みをしているのだということが学生に明瞭に提示されてない。何となく行われている。これはいかんというわけですね。ネガティブな評価を受けました。

課題探究能力の育成も評価の対象になります。課題探究能力の育成に関しても、一応そういう

能力を育成する授業が行われていることは認められました。しかし、問題はE L Pで養われた課題探究能力を、他の科目の授業でさらに伸ばすための努力が弱い、専門科目の教員はもっと努力すべきだ。せっかく学生がクリティカル・シンキングの訓練をE L Pで受けていながら、それを十全に発揮させるような授業運営をしてないクラスがあるというわけです。何かというと、要するに講義しかしていないクラスがあることを批判したのです。

また、アメリカの大学では **Writing**（論文作術）は、リベラルスカレッジでは中心的な科目です。書くということですね。論文作術教育をしているか。I C Uは多くのクラスでライティングを課している。ライティングという専門のクラスがあるわけではありません。日常のそれぞれのクラスでライティングを課しているということが大事だったわけです。E L Pは集中的にライティングの訓練をしている。バイリンガル教育においてライティングは重要な位置を占める。学生は両言語でライティングをするすばらしい機会が与えられている。このことはI C Uの個性であり、世界の大学教育の一つのモデルになると、これはベタボメでしたが、実態はちょっとみずばらしい。

こういう事例を通して私が考えますのは、大学教育の質の保証というのは、日常的な教育活動の質が問われているということなのですね。その日常的な教育活動の質を支えているのは、言うまでもありませんが、教員の質であり、学生の質であり、スタッフの質であり、そして施設、環境であり、行政であるということ言うまでもありません。一番大事なのは日常的教育活動がどう行われているかということです。

大学改革とは

そういうことを考えますと、大学改革というのはシステムの改革ではなくて、文化の改革である。言葉は悪いですが、文化大革命を起こさなければダメだということになるわけです。日本の大学における文化大革命の基点は何であるか。それは、私立大学は教育機関であるということです。要するに第1位のステークホルダーは学生である。これは半分皮肉であります。ボローニャ大学の初めの学則は2つあったわけですが、その1つの学則は「学生の許可なく休講してはならない」ということでした。これを読みまして、私は自分の大学でこれに類したことを実行しました。何をやったかということ、1週間以上の学会出張は認めない。3学期制でありますから、1学期は12、3週しかありません。1週抜けるということは致命的です。学習量が減ってしまうわけですから単位の水増しになる。したがって必ず補講をすることを要求しました。補講を義務づけたわけです。休講の掲示票の下に補講は何日の何曜日何時と書かせることを実行したわけです。ある教員がフランスに海外出張する、学会で出張する。出張期間が1週間を越えていましたから、学務副学長が不許可にしました。そうしたらその教員は学問の自由を阻害したと言って弁護士を通して訴えるというから、どうぞ訴えてくださいと開き直りました。実際に弁護士からは学長のところに電話がありました。訴えるというのです。訴訟になればおそらく私のほうが勝つと思いました。日本の大学にとって画期的な判決が出たことでしょう。結局、不透明のまま終わりました。多摩大学と宮城大学の学長をされた野田一夫氏は、大学教員セミナーで、大学教員の前で、「あなた方、研究をするのに学生の許可を得ていますか」と言うんですね。これは半分ブラックユーモアであります。

「講義」は止めよう

一番大きな問題は講義です。講義というのはドイツの大学革命から流行りだしたものです。講義というのは、教授の研究成果の誇示であったわけです。それが明治期に日本の大学に輸入されて、知識受容という後進国の必要にちょうど適合した。日本の大学の場合は、漏斗を口に当ててどんどん注ぎ込むということが必要だったわけですね。しかしそういう講義法というのは、現在の日本の大学で本当に有効か。学生に意味があるかということですね。講義だけが授業法ではないわけでありませう。

アメリカの教育社会学者が分析した結果ですが、学習効果という視点で見ますと、講義というのは学習効果がほとんどない。リーディングは10%です。講義というのは5%、視聴覚教育で20%、デモンストレーションで30%です。これらの授業法では学生は受け身ですね。学習形態が討論、実習、他人に教授というのは例えばセミナー等での発表ということを行っているのでしょう。そういう授業形態から見ますと、講義の学習効果はほとんどない。ちょっとこれはショックですね。私はそうは思わないのですが、講義は講義なりに一つの意味を持っているけれども、講義だけではダメなのではないか。

それで私は学長時代にICUのFDハンドブックに、先生方にいろいろ授業上の注意を喚起していただく事項を書きまして、先生方に読んでもらっているわけですが、その中で学長の要請という1ページをつくりまして、「講義をやめてください」と書いたのです。双方向的学生参加方式で、リザーブ・ブック制度を活用してくださいと要請しました。せっかく図書館が充実しているのに、なぜリザーブ・ブック制度を使わないのですか。さらに、シラバスをホームページで公開してください。中間試験を実行してください、という要請をしました。ICUでも、国立大学から移ってきた先生が試験1回きりというのが結構いるのです。そして必ず試験結果はフィードバックすることを要請しました。そのために、最終試験期間制度はやめましようと言ったのです。最終試験というのは、学期の最後の週を一斉に試験のために使います。そうすると、その試験が終わると学生はもはやクラスに出る機会がないわけですから、学生は試験の受けっぱなしです。それはダメだと。それで私は、最終試験は学期最後の週ではなくて、もう1週前にやりなさいと。最後の週は、その前の週にやった最終試験の結果に基づいて学生と討論しなさい、フィードバックしなさいということを提案したのですが、結局通りませんでした。依然として最終にやって、試験のやりっぱなしですね。それじゃダメだ。GPAも2.5を標準にするよう要請しました。授業評価を実行してください。休講には補講を必ずやりなさい、ということを学長要請として「FDハンドブック」に掲げました。誰も守らない。私に権威がないからですね。

問題は授業運営をどうするかということです。質の維持というのは授業運営にかかってきます。いろんな工夫があります。これは一つの例ですが、ハーバード大学ではミニッツペーパー、ICUではコメントシートと言っている方法があります。授業の最後に小さめの紙を学生に配って、その日の授業で一番大事な点は何であったか書かせます。2番目にどこが難しかったかとたずねる。簡単に5分か10分で書けるようにする。毎回書かせて、毎回その書いたものに基づいて次の授業を展開する。そういう仕組みをハーバードでは実行している。ICUも同じようなことを随分前から行っています。これは簡単なことで必ずできます。ICUではコメントシートを用意し

ました。簡単です。大きい紙を使つてはいけません。B 5 の半分です。あまり大きい紙を与えま
すと学生はいっぱい書きます。いっぱい書いたら読む時間がありませんから、教員の労力を省く
ためになるべく小さい紙にする。名前とクラス名を書く欄を印刷しただけの用紙を作りました。
毎回授業の終わりに5分ぐらいで書かせる。ある時は感想を書かせる。ある場合には意見を書か
せる。その都度、その都度対応を考えながらコメントシートに書かせて、必ずそのコメントシ
ートを次のクラスのときに紹介しながら授業展開をする。ICUではこれを一般的に実行してい
ます。義務化したわけではありませんが、多くの先生が自発的にそれを利用しています。国立大学
から来た先生が初めてそれを使ってみて、その効果の大きさにびっくりしたと私に報告をして
くれました。

Class Journals

時間がなくなってしまいましたが、最後に、授業運営の一例として、「クラスジャーナル」とい
うことを紹介します。各学生に学習記録の作成を求める。それをジャーナルと言います。次よう
な項目について学生が行ったことを記録する。クラスで行ったこと、クラスで指示されたこと、
宿題、毎回のクラスでの指定予読資料、等です。さらに、クラスでの討論の単なる記録ではなく、
そのことについての自分の知見を書く。単純な資料の要約ではなく、学習者の見解の独創性を示
せ、と指示します。指定された資料を読んで、自分はどう思うかということを書かせる。資料あ
るいはクラスでの討論の何に興味を持ったかを記録させる。自分の考えに確信が持てるようにチ
ャレンジしているかについて書かせる。他分野との関連を発見したかを問う。新しい視点が出た
か、資料の特徴は何か、ということを書かせます。ジャーナルは1冊のノートを用います。途中
で書き替えてもいい。ただし、必ず修正の記録を残させます。これはワープロではダメですね。
ワープロで修正していたら古いのは消えてしまいますから、これはダメです。ジャーナルは根拠
資料も添えて、学期末に提出させる。ジャーナルの評価は成績の約30%を占めます。書かれた分
量では評価しません。ジャーナルはクラス活動に関わる学生の知的営みの記録です。学生がどう
いうふうにものを考えるようになったかということを自分で記録させるわけですね。そして記録
させたものを評価する。だから先生は大変です。全部読まないといけません。したがって、
マスプロじゃできません。クラスサイズは当然制限されますが、いずれにしてもそういう仕
組みでもって授業運営をしている。

私の身近の者がこういうことをやっていたわけですがけれども、聞いてみましたらアメリカの優
れた大学では一般的なことのようにです。そういうことを通して、いわばクリティカル・シンキン
グを育成する。キャップ制の意味というのは、学生にじっくり学ばせるということなのです。教
える量を最小限にする。学生に自学自習の時間を与える。自学自習をさせなきゃダメですね。今
の学生は自学自習をさせてくれと言います。自学自習をするのではないのです。させてくれと言
います。知識を網羅するということは必要ありません。ポテンシャルが身につくということが大
学教育の質でなければいけない。ポテンシャルをつけるということでもいいわけでありまして、知
識の多寡が問題ではないというわけであります。

大変失礼なことを申しましたけれども、以上で終わりにいたします。ご静聴ありがとうございました。

〈 絹川 正吉 先生 経歴 〉

昭和 4 年（1929 年）生まれ

学 歴

昭和 28 年(1953 年) 3 月 東京都立大学理学部数学科卒業 理学士
昭和 30 年(1955 年) 3 月 東京都立大学大学院理学研究科数学専攻 理学修士
昭和 35 年(1960 年) 6 月 Northwestern University、Graduate School、Ph.D.取得

職 歴

昭和 47 年(1972 年) 4 月 国際基督教大学教授
昭和 62 年(1987 年) 4 月 国際基督教大学教養学部長
平成 8 年(1996 年) 4 月 国際基督教大学学長
平成 16 年(2004 年) 3 月 同上任期満了により退任
平成 16 年(2004 年) 4 月 国際基督教大学名誉教授
平成 15 年(2003 年) 4 月 文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」
実施委員会委員長（現在に至る）
平成 17 年(2005 年) 8 月 名古屋大学高等教育研究センター客員教授（11 月 31 日まで）

これまでの学外関係役職

日本私立大学連盟理事（8 年 5 月～）、常務理事（14 年 1 月～16 年 3 月）
大学基準協会監事（9 年 5 月～）、理事（15 年 5 月～16 年 3 月）
大学セミナーハウス館長（13 年 6 月～15 年 3 月）
大学教育学会会長（12 年 6 月～15 年 6 月）
日本高等教育学会理事（9 年 5 月～11 年 4 月、17 年 6 月～）
IDE 民主教育協会理事（13 年 9 月～）
東京学芸大学大学運営諮問会議会長（12 年 4 月～16 年 3 月）

大学教育関係著作

『一般教育における総合の意味』ICU 一般教育シリーズ 12、1982 年
『ヘブライズムとヘレニズム』（共著）新地書房、1985 年
『大学は変わる』（大学セミナーハウス編、共著）国際書院、1989 年
『大学教育の本質』ユーリーグ、1995 年
『ICU リベラルアーツの全て』（編著）東信堂、2002 年
『学士課程教育の改革』（共編著）東信堂、2004 年

参考資料 2. 大学 FD 委員会の議事要旨

第 1 回大学 FD 委員会議事要旨

日 時：平成 18 年 6 月 5 日（月） 17:15～19:00

場 所：教学事務棟 150・151 会議室

出席者：（委員長）高橋靖直

（委員）小嶋正敏、河野均、山田博三、玉木 勝、梶原新三、菊池重雄

（アドバイザー）切田節子

（事務担当）茂村恭司、大野太郎、伊従記章、柳原達宏

欠席者：（委員）金井茂夫

*敬称略

議 案：（1）平成 18 年度プレゼンテーション研修に関する件

（2）平成 18 年度 FD 講演会に関する件

（3）平成 17 年度 FD 活動報告書に関する件

（4）記入済み授業評価アンケート用紙の保存に関する件

報 告：（1）学生による授業評価アンケートの実施について

議事要旨：

委員会の冒頭、高橋委員長より、今年度より新しく委員になられた小嶋正敏委員を紹介し議事に入った。

（1）平成 18 年度プレゼンテーション研修に関する件（資料 No.1）

切田アドバイザーより、資料に基づいて説明。

昨年度まで年間 5 回実施してきた。受講者の割合も増えてきたことを考慮し、今年度は 3 回実施する。

参加者については、早い時期に決めて声をかけると忘れてしまう方もいるため、FD 委員の方々からタイミングのよい時期に声をかけていただく。都合が悪くて出席者がなく空きがあるような場合には、通信教育部や学術研究所、教育博物館の先生方にも声をおかけする。

（2）平成 18 年度 FD 講演会に関する件（資料 No.2・3）

事務担当の茂村課長および柳原課長より、昨年度の実施内容と今年度については、講演形式のものに限らずエクササイズやロールプレーを伴うようなものも FD 研修の選択肢として考えられる旨を説明。

FD 委員会としては、今年度も全学部に通のプログラムを協力した活動としてやっ

ていくのがよいとの考え方を確認。どのような内容の物をするかについては、今後、各委員が提案する。また、FD 研修の一環として研修センターより提案のあった「未来創造セミナー」については、計画どおり実施することとなった。

メンバーは、6 月 30 日までに、上記プレゼンテーション研修と合わせて学部ごとに選んでいただくこととなった。

（３）平成 17 年度 FD 活動報告書に関する件（資料として、冊子を配布）

茂村課長の説明に引き続き、大野課長が委員にプレゼンテーションし、冊子とともに学内に公開する旨を報告（コア科目の授業評価アンケートについては、学内ネットワークの範囲内で公開している）。

（４）記入済み授業評価アンケート用紙の保存に関する件

茂村課長より、アンケート用紙の保存や処分をどのようにするのがよいかについて検討いただきたい旨を説明。本件については、個人情報管理窓口に相談することとなった。

報告要旨：

（１）学生による授業評価アンケートの実施について（資料 No.4～18）

1 月に開催された FD 委員会を受け、コア・FYE カリキュラム委員会等で話し合われた内容について、菊池委員より、資料に基づいて説明。

- ・ 授業評価アンケートは、春学期と秋学期で対象科目を変えて実施する。
- ・ アンケート用紙は、資料 No.5 にあるような形に変更する。

アンケートに関して、高橋委員長より、本アンケートは教員名を伏せてあるものの、科目からそれを類推することは可能である、FD の参考資料として出したものなので取り扱いを慎重にお願いしたいとの旨が述べられた。

（２）次回の委員会開催予定

6 月 30 日までに、研修を受講する先生方の名前が決定してくるので、それを集計した後、次に次の委員会の開催を予定している旨を、茂村課長が報告。

以上

第2回大学FD委員会議事要旨

日 時：平成18年11月13日（月） 17:00～19:00

場 所：工学部第1会議室

出席者：（委員長） 高橋靖直

（委 員） 小嶋正敏、河野均、山田博三、玉木 勝、金井茂夫
梶原新三、菊池重雄

（アドバイザー） 切田節子

（事務担当） 茂村恭司、大野太郎、柳原達宏

＊敬称略

議 案： （1）平成18年度春学期コア科目の授業評価に関する件
（2）平成19年度採用の教員研修に関する件

報 告： （1）大学基準協会実施視察報告について
（2）授業参観について
（3）短期研修について

議事要旨：

（1）平成18年度春学期コア科目の授業評価に関する件

菊池重雄委員より資料に基づいて説明。

今回の集計資料は全学共通のもので、言語表現科目群では「予習する」が機能しているが、社会文化科目群～全人教育科目群では予習して授業に出ている学生が圧倒的に少ない。なぜ、全人教育科目群がこんなに低い評価なのかと大学基準協会の監査の際にも問題にあがっていた。1年次セミナーに関しては、学習記録がきちんと書けない、また出しても先生から返ってこない等によりポイントが低い。また、アクティブラーニングに取り組んでいない先生がいる（知らない、生かす手法がわからない、講義ノートを作るので精一杯）。

本件についての質問と回答および意見は以下のとおり：

・Q.この調査の科目は何か。自然科学などは入っていないか。

A.科目群により入ったところとそうでないところがある。

・Q.全人・FYE のところでは無効回答が多いが。

A.読み込みエラーでないかと思われる。今後確認する。

・Q.担当教員へのフィードバックはどうなっているか。

A.自分の評価がどの位置にあるかがいっている。また、自由記述の内容も届いている。

全学のデータを全体の平均として見た時にどの程度意味があるのかをFD委員会で検討する必要がある。予習している学生とそうでない者とは、総合評価がまったく異なってくる。平均を出す意味が今ひとつ見えてきていない。予習を促す先生の場合

は、ポイントが上がってくる。それなりの危機感を持っている先生が、予習をするようにと努めている。

- ・ 集計資料左部分に表記されている3つの分野（学生の取り組み・先生の取り組み・学生の理解度）について、それぞれで統計をとってみるとよいのではないだろうか。意欲を引き出すのも先生の役目ではないだろうか。
- ・ 今回は、やった授業しか対象になっていない（休講してそのままというような授業は含まれていない）。
- ・ 専任教員と非常勤教員の差なども考慮する必要があるだろう。
- ・ アンケートをとっても、レーダーチャートはほぼ同じである。授業の改善という意味では、限られた意味しか持っていないのではないだろうか。
- ・ このアンケートは、組織的改善のデータとして活用できる可能性がある。全学の比較の中での数が、学部での取り組みの際に意味を持つのではないだろうか。今後のFD活動に活用しうるデータの出し方を検討してほしい。
- ・ 結果をどう事実として受け止めて活用するのか。今回はコア科目のみだが、来年より、多くの先生の教育能力のティーチング評価をしなければならないという流れがある。今までは研究活動が対象だったが、これに「教育活動への貢献度」、「管理分野への貢献度」、「社会貢献」などの面を評価しようとしている。これらは今のところFD活動でなく、昇任・昇格の教員審査という部分で動いていることである。
- ・ 学部の専門科目や発展科目についても、いずれ全学的にやっていかざるを得ないか。
- ・ アンケート結果全体活用のための分析ができるとよい。
- ・ データをプロットして、その中に自分を置いてみている。すべての科目がプロットされているので、ばらつきの中の自分の位置がわかる。これはよい情報ではないだろうか。
- ・ データの悪い先生は、空き時間を作らないようにクラスを構成しておりそれが授業にも反映していると考えられる。
- ・ 先生方と教務担当の中で、恣意的に授業が決まっているようなところも見受けられる。希望を言える先生は、自分に都合のよい時間帯で授業が組まれている。
- ・ 学生に対して、「あなたが支払っている授業料に対して、受けている授業はどうか」というような質問を設けて聞いてみてはどうか。
- ・ 予習をする時間そのものが少ないので、1時間の予習でも「よくした」と評価してしまっている学生もいる。人によって評価内容が違う。
- ・ 先生と学生のコミュニケーションが取れている状態で評価が甘くなるということはそれはある意味で成功しているといってもよいのではないか。
- ・ 改善に使えるデータの示し方があれば出してもらえるとありがたい。平均的なところで無理やりやろうとしたら難しい。

（２）平成19年度採用の教員研修に関する件

事務担当の茂村教務課長より資料に沿って説明。

本件についての意見・提案は以下のとおり：

- ・ 2 日間にわたり行ってきたこの研修について期間が長いという意見も出ており、1 日に短縮して実施してはどうか。あるいは、2 月に 2 日間行うのではなく、内容によっては 4 月に行ったほうが効果があるものもあるのではないか。
- ・ 今のやり方は、私たちが改善せねばならない授業の形態（：説明ばかり）に似ている。先生方に予め資料を渡して読んでいただいた上で参加してもらったら 1 日でもよいのではないだろうか。もう少し継続してみて検討すればよいと考える。
- ・ 人は切羽詰らないとやらないし、必要なその時になってまた聞くものである。4 月以降に実施するとして、○月○日と言ってどのくらいの先生が集まれるかは疑問である。
- ・ 先生方の中には、すぐに授業を持たない方もいる。2 月に研修と聞いたらなるほどと納得できるが、2 日続けてやるより、間をあけてやるのもよい。

本件については、可能であれば期間を短縮することも念頭に置き、内容を検討・選択して改善案を作成することとなった。

報告要旨：

（１）大学基準協会実施視察報告について

10 月 31 日に実施された同視察について、高橋委員長より報告。

報告書についての質問と回答の後、実際に玉川に来ての質問と授業参観、および学生へのインタビューがあった。FD に関する問題も取り上げられていた。日本のほとんどの大学で授業評価が進んでいる。3 月には玉川の評価が下される。玉川としても、ティーチングを正當に評価し、昇格審査に生かしていくことを基本的に決めつつある。学生による授業評価と授業公開、実技系の業績も評価する方向で動いている。このための FD をどのように進めていくかが課題である。FD＝教育機関としての力をどうつけるか という意味である。

（２）授業参観について

高橋委員長より、「授業参観は今年度も前年度から継続して行っているが、学生だけの評価では限界があり、同僚に見てもらってサジェスションを得ることが大切である。各学部で実施していただき、年度末にご報告いただきたい」旨が述べられた。

（３）短期研修について

事務担当の茂村課長より、本委員会委員でもある玉木教授の例について紹介。高橋委員長より、この短期研修の報告会をどのように設け、学ぶ機会として組み込んでいくかを考える方向で今後進めていく旨が述べられた。

以上

第3回大学FD委員会議事要旨

日 時：平成19年1月29日（月） 17:15～19:30

場 所：教学事務棟 150・151 会議室

出席者：（委員長） 高橋靖直

（委 員） 小嶋正敏、河野均、山田博三、玉木 勝、金井茂夫、菊池重雄

（アドバイザー） 切田節子

（事務担当） 茂村恭司、大野太郎、伊従記章、柳原達宏

欠席者：（委 員） 梶原新三

* 敬称略

議 案：（1）平成18年度FD活動報告書作成に関する件

（2）平成19年度新任教員研修に関する件

（3）平成19年度FD研修（研修センター開催分）に関する件

報 告：（1）コア科目「学生による授業評価アンケート」の分析について

（2）その他

議事要旨：

（1）平成18年度FD活動報告書作成に関する件

事務担当の茂村教務課長より資料に基づいて説明。

本報告書については、17年度と同様の構成を考えているものである。高橋靖直委員長より、18年度はさらに大学の認証評価に関するFD関係部分記載の必要性が述べられた。これに対して、事務担当の大野教育企画課長より、大学実地視察と評価原案で取り上げられたものを事務局でまとめ報告書に掲載する旨が述べられ了承された。

また、茂村課長より、資料№.2の項目のⅡとⅢを入れ替えて掲載する旨が述べられた。

さらに、大学院におけるFDの法令化について、大野課長より、平成19年度より法令で義務付けられる旨が述べられた。

（2）平成19年度新任教員研修に関する件

茂村教務課長より資料に基づいて説明。さらに、柳原研修センター課長からも補足説明。本件については、原案どおり承認された。

また、高橋委員長より、この研修は他大学から来られる教員にとっては本学の特徴を理解するための機会となるし、また初めて大学で教鞭をとる方々に一定の情報と授業以外の内容のオリエンテーションをするという意味もある、よってこの研修により着任後の業務が実質的にも精神的にもよりスムーズになることを期待している旨が述べられた。

（3）平成19年度FD研修（研修センター開催分）に関する件

柳原課長より資料に基づいて説明。検討の結果、

- ・ 大学FD講演会については、対象者をいくつかにしぼって計画するなど、参加意識を喚起するやり方で検討することとなった。また、教育法令化された内容を明確に理解するための講演会を開催してはどうか、講演部分を短くしてパネルディスカッ

ションを取り入れると勉強になるのではないかと、講演会を開催する場合は、それに先立って講演内容を読んでおくなどしないと理解が深まらないであろう、などの意見があった。

- ・ 大学 FD プレゼンテーション研修会については、昨年と同様に開催し、実施回数については切田アドバイザーと相談することとなった。
- ・ 大学 FD コーチング・スキル研修会については、「コーチング」という言葉がスポーツのそれというイメージが強く、それよりもむしろアドバイジングの方がなじむということ、また、担任としての能力を高めてほしいとの考えから「アカデミック・アドバイジング研修会」として開催する方向で検討することとなった。詳細については、菊池委員と相談のうえで進めていくこととなった。
- ・ 資料として提出した上記 1～3 のほかに、今年度、初めて FD の一環として開催した未来創造セミナーについては、目的が FD に関係するかどうかは別として性格的には FD 的であるとのことで、次回の FD 委員会の際に参加者の報告書をもらいいただき検討することとなった。
- ・ 上記の学内において開催する研修のほかに、外部で開催される FD フォーラムなどの研修への派遣についても、今後検討することとなった。また、高橋委員長より、FD 活動への参加の度合いは今後は教員の評価の違いとして出てくる、研修に出ても出なくてもよいという形は避けたい、ある程度は出てくださいという半強制的な形も必要ではないかとの意見が述べられた。

報告要旨：

(1) コア科目「学生による授業評価アンケート」の分析について

菊池委員より資料に基づいて報告。本件に関する次回のミーティングは、2 月になる予定。

(2) その他

・ 大学認証評価について

高橋委員長より、教育活動の点検、自己評価、第三者評価、そしてそれを今後の教育研究活動にどう生かすかは重要課題であり、公式には 3 月下旬に本学の認証評価について大学基準協会のホームページに掲載される旨が述べられた。また、これについて大野課長より、認証評価は今年度 1 年かけて受けていくものでまだ途中の段階であり、学内向けには 3 月に大学基準協会ホームページへ掲載後に知らせることを考えている旨が申し添えられた。

・ 国際シンポジウムについて

茂村課長より、平成 19 年 2 月 27 日に開催予定の国際シンポジウム「教育評価としての学生調査」（会場：同志社大学）について、資料に基づいて説明。

・ 3 月開催の FD フォーラムについて

財団法人大学コンソーシアム京都主催の「第 12 回 FD フォーラム」（3 月 3・4 日、会場：京都産業大学 神山ホールおよび京都市大学のまち交流センター：キャン

パスプラザ京都)について、茂村課長より説明。

・ **新しい教員組織について**

高橋委員長より、19年度から準教授や助教という新しい職位が設けられ、新たな教員組織がスタートすること、助教と講師は5年の任期制で審査されることとなること、これと並行して教員審査についても今後は「研究」「教育」「社会貢献」「管理運営」という4つのカテゴリーで所定の基準が設けられて評価されること、FDと教員評価はイコールではないが関連してくる旨が述べられた。

・ **次回のFD委員会開催について**

次回の本委員会は3月に開催することとなった。

以上

第4回大学FD委員会議事要旨

日 時：平成19年3月30日（金） 15:00～16:30

場 所：教学事務棟 150・151 会議室

出席者：（委員長） 高橋靖直

（委 員） 小嶋正敏、山田博三、玉木 勝、金井茂夫、梶原新三、菊池重雄

（アドバイザー） 切田節子

（事務担当） 茂村恭司、大野太郎、柳原達宏

欠席者：（委 員） 河野 均

* 敬称略

- 議 案： （1）「個人情報保護研修会」に関する件
（2）玉川大学大学院FD委員会に関する件
（3）平成18年度FD活動報告書作成状況に関する件
（4）平成19年度FD講演会・研修等に関する件

議事要旨：

（1）「個人情報保護研修会」に関する件

高橋靖直委員長より、4月2日開催の全学教職員の集いに引き続いて予定されている「個人情報保護研修会」をFD活動の一環として開催したいとの学園としての意向がある旨を説明。さらに、事務担当の茂村恭司教務課長より資料に基づいて説明。本件については了承された。

（2）玉川大学大学院FD委員会に関する件

高橋委員長より説明：

大学教員のFDについては、大学組織としてFDを義務化ということはなかったが、大学院担当教員や大学院教育についてはFDの法制化がなされ、19年度より組織化あるいは学則に設けて活動しなければならなくなった。

こうしたことから、玉川大学でも大学院FD委員会を設置することとなった。各研究科の教務担当の教員が委員、教学部長が委員長を務め、4月1日よりスタートする。大学院の教員は、そのほとんどが学部の教員でもある。よって、大学のFDと大学院FDは異なるとは言ってもまったく関係ないとは言えないだろう。

これまで、日本の大学院は私塾的な感じがあったと考えているが、大学院生の量的拡大とも合わせて、今回の義務化のことも出てきている。玉川の場合は、必ずしもすべての科の人数が増えてきているとは言えない状況である。

いずれにせよ、来年の教職大学院設置も含め、改善する必要性を認識せねばならない。

（3）平成18年度FD活動報告書作成状況に関する件

茂村教務課長より説明：

本報告書については、すでに FD 委員の方々に原稿依頼済みで進めていただいている。現在のところ、9 割ほどの原稿が集まっており、まとめの作業に入っている。4 月中に校正を終え、5 月のゴールデンウィーク前に入稿し、できれば 5 月中旬には配付したいと考えている

（４）平成 19 年度 FD 講演会・研修等に関する件

最初に、高橋委員長より、次の内容が述べられた：

現在、我々が取り組まねばならない課題がひとつある。大学基準協会への加盟を含めた認証評価結果の検討をせねばならない。評価の中に、FD 活動に関することがいくつか含まれており、委員会として、玉川大学としての FD への評価への評価検討をする必要があり、これが次のステップに生かされていくべきである。

各年度での FD 活動の展開は、各学部にお問い合わせせねばならない。詳細については、新年度最初の大学 FD 委員会において諮りたい。

来年度の講演会や研修について、今日のこの委員会ではあまり具体的な形まではいかないと考えられるが、必要な部分だけを取り上げたい。

続いて柳原研修センター課長より、資料（別紙）に沿って説明。検討の結果、次のように決定した。

- ・ 講演会については、教務課と開催日程を調整のうえ開催することとなった。
- ・ プレゼンテーション研修会については、講師を務める切田アドバイザーと日程を調整のうえ、前年度と同様に開催することとなった。
- ・ 未来創造セミナーについては、一般の教員は日頃、学長と話すことは少なく、こうした直接話せる機会はなくさないほうがよいという点から、前年度と同様に開催する方向で検討することとなった。
- ・ 前回の本委員会で出たアカデミック・アドバイジング研修会については、アカデミック・アドバイジングという言葉の意味が広いことから、研修の目的や内容を明らかにし具体化するため、大学の全教員を対象にアンケートを実施することとなった。その結果と、これまでの各学部の活動を踏まえた上で次回の FD 委員会で検討する。

（５）その他

菊池委員・小嶋委員より、「授業改善のための 平成 18 年度 学生による授業評価アンケート」の途中経過について説明（別紙）。

以上

参考資料 3. プレゼンテーション研修会アンケート用紙

各項目ごとにA～Eでランクをつけてください。

その際、Aは「全くそのとおり」、Eは「全くそのとおりでない」という評価です。

1. 全体についての感想をお聞かせください	A	B	C	D	E	フリーコメント
・総合的に満足されていますか						
・担当する授業に役立つと思いますか						
・ご自身のプレゼンテーション・スキルは 向上したと思いますか						

2. 研修会の内容についてお聞かせください

・研修内容は適切でしたか (2日間という時間制約を考慮に入れてお答えください)						
・講師の説明は理解しやすかったですか						
・テキスト、教材、教具などは適切でしたか						

3. 研修会の運営についてお聞かせください

・2日間という日程は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・時間配分は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・開催場所、施設などは適切でしたか						
・事務手続き、連絡などは適切でしたか						

4. 今後のFD研修会についてお聞かせください

・この研修の開催を継続することに賛成ですか						
・この研修の受講を、他の人にも勧めますか						
・どんな内容の研修会を希望しますか (複数記入可)						

5. 具体的な技法について、裏面にお書きください。

6. その他の感想、コメントなどありましたら、別紙に自由にお書きください。

今後のFD研修会開催および運営の参考資料とさせていただきます。

参考資料 4. 「コア科目授業評価アンケート」用紙

玉川大学

－授業改善のための－

【コア科目】

平成18年度 学生による授業評価アンケート

このアンケート調査は授業担当教員が学生諸君と共に、授業をより改善することを目指して実施するものです。記入に当たっては、授業の全体を視野に入れた、責任ある評価をお願いします。なお、このアンケートがあなたの成績に影響することは一切ありませんので、氏名などは記入しないでください。

記入日	学年
年 月 日 曜日 時限	①1年 ②2年 ③3年 ④4年 ⑤その他

授業科目名

担当教員名

以下の質問について、該当する番号にひとつだけ○をつけてください。

あなたの取り組み	(非常に良い)	やや良い	どちらとも言えない	あまり良いと思わない	全く良いと思わない
1 授業には意欲的に取り組んだ	5	4	3	2	1
2 授業以外によく予習復習した	5	4	3	2	1
教員の取り組み					
3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	5	4	3	2	1
4 毎回よく授業の準備がされていた	5	4	3	2	1
5 シラバスにそって授業が行われた	5	4	3	2	1
6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	5	4	3	2	1
7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	5	4	3	2	1
8 授業中に学生の参加（質問・発言など）を促し、適切に対応した	5	4	3	2	1
9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	5	4	3	2	1
10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	5	4	3	2	1
11 教員は毎回熱意をもって授業をした	5	4	3	2	1
授業の成果					
12 授業全体についてよく理解できた	5	4	3	2	1
13 授業の内容に興味をもてた	5	4	3	2	1
担当教員が科目毎に設定する設問					
14	5	4	3	2	1
15	5	4	3	2	1
総合評価					
16 この授業を受講してよかったと思う	5	4	3	2	1

その他、意見、要望、感想など自由に記述してください。（裏面使用可）

参考資料 5. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(目的)

第 1 条 玉川大学(以下「本大学」という。)教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会(以下「本委員会」という。)を置く。

(組織)

第 2 条 本委員会は、委員長、委員、アドバイザー、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 3 学長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 4 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 5 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第 3 条 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第 4 条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

- 2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第 5 条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

第 6 条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第 7 条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部及び教育企画部とする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

2007 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8802 (教学部教務課)

042-739-8899 (教育企画部教育企画課)